



教会学校教案誌

2005.10.11.12月号

日本キリスト改革派教会
中部中会教育委員会

No.19

2005年10～12月カリキュラム (第19号)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
10月2日	教会に生きる (一)	問65	ハイデ64、ウ告白17章
		エフェソ4:12-16	コヘレト4:12
聖霊によって結ばれた教会共同体と一つにされて、信仰の喜びの道を歩もう			
9日	教会に生きる (二)	問66	ハイデ65、ウ告白14章
		エフェソ4:17-24	テモテニ1:7
教会の恵みを通して、キリストの真理に基づいた信仰生活を送ろう			
16日	信仰と悔い改め	問67	ウ小教理86, 87、ウ告白15章
		使徒言行録26:12-18	使徒言行録26:17
信仰を強くし、絶えず悔い改めて、神の御前に生きる人生を歩もう			
23日	恵み的手段	問68	ウ小教理88、ウ告白14章
		使徒言行録2:37-47	使徒言行録2:42
御言葉と礼典と祈りが教会生活の土台である。教会の恵みの内に生きよう			
30日 宗教改革記念	生ける神の御言葉	問69	ウ告白1章
		ルカ8:4-8	ルカ8:8
生ける神の御言葉の力への信頼を強くしよう。福音的に働き取ることを			
11月6日	御言葉への聴従	問70	ウ小教理89, 90
		ルカ8:11-15	ルカ8:15
神への愛と奉仕として、御言葉によく聴き従う歩みに励もう			
13日	礼典	問71	ウ小91-93、ハイデ65-68
		ルカ24:28-35	ルカ24:33b-35
礼典を通して豊かな祝福が与えられる。礼典の恵みを知ろう			
20日	洗礼	問72, 73	ウ小94-95、ハイデ69-74
		マタイ3:13-17	ローマ6:3b
洗礼の恵みを知り、信仰告白と洗礼・入会への志を強めよう			
27日 アドベント	聖餐	問74, 75	ウ小96, 97、ウ大168-177
		マタイ26:26-30	マタイ24:27b-28
聖餐の恵みを知り、聖餐共同体へのまなざしを持つことに努めよう			
12月4日 アドベント	平和の君	—	—
		イザヤ9:1-6	イザヤ9:5
平和の君キリストを待ち望み、平和の完成のために仕えよう			
11日 アドベント	柔和の王	—	—
		ゼカリヤ9:9-10	ゼカリヤ9:9
柔和の王をかしらにする者として、へりくだった柔和の道を喜んで歩もう			
18日 アドベント	ヨセフへの告知	—	—
		マタイ1:18-25	マタイ2:1-12
ヨセフの信仰の姿勢に学び、キリストの降誕を喜ぼう			
25日 クリスマス	東方の学者たち	—	—
		マタイ2:1-12	マタイ2:10-11
キリストの降誕を喜び、東方の学者のようにキリストに自らをささげて歩もう			

も く じ

2005年10・11・12月カリキュラム

まえがき	辻 幸宏 ...	4
巻頭説教	佐々木稔 ...	5
日曜学校・教会学校訪問		
宝塚教会教会学校の紹介	富井 篤 ...	9
連載「日曜学校教師会のために」	相馬伸郎 ...	13
中部中会「教会学校教師研修会」のご案内		22

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

10月2日	24
10月9日	32
10月16日	40
10月23日	48
10月30日	56
11月6日	64
11月13日	72
11月20日	80
11月27日	88
12月4日	96
12月11日	103
12月18日	110
12月25日	117
幼稚科工作	124
小学科上級ワークシート・考えてみようの答えの参考	128
成人科	木下裕也 ... 129

2006年1・2・3月カリキュラム

自由献金のお願い	133
2006年度 年間カリキュラム	134
編集後記・あとがき	136

まえがき

辻 幸宏 (岐阜加納教会協力牧師・大垣伝道所担当)

東部中会から中部中会に移ってきて以来、教案誌の編集委員として加えて頂き、微力ながら教案誌の編集に携わらせていただいています。教案誌の発行も5年目を迎え、多くの先生方・教会学校に執筆して頂き、さらに多くの教会に用いて頂けるようになってきておりますことは、感謝に堪えません。しかし編集に携わる者としては、多大な労苦があり、編集が続けられること自体、主の憐れみと励ましがあるからこそ、続けられている働きであるとも痛感させられています。

一方、大会教育委員会においても「教会学校教案誌」を発行する方向にあります。さらに機構改革委員会では、現在発行されています「大会時報」や各中会における機関紙(エクレシア、まじわり、改革派中部、リフォルマダ、四国伝道)、さらには改革派メディアミニストリーで発行されている「家庭礼拝のしおり」、各委員会が発行している案内等、情報と家庭礼拝を含む信徒教育を併せ持つような総合情報誌の発行が、将来的な検討課題として挙がっているとのことです。私自身、必要を感じる一人であり、この計画が現実のものとなるならば、素晴らしいことだと思っています。

しかし、同時に、大きな懸念も抱いています。というのは、この情報誌ですと、家庭礼拝のしおりも含まれるため、おそらく月刊紙となることでしょう。各号を作成するためには、企画立案・執筆者への依頼・原稿集め・遂行・割付・編集・印刷依頼・発送との膨大な作業が、毎月繰り返されることとなります。もちろん、部分的には、印刷会社に依頼したりすることは可能かと思いますが、その多くを託された委員会が

担わなければならなくなります。企画立案部分は、牧師が中心になって行わなければならないことでしょうか、それ以降の作業に関してまで委員としての牧師が携わり、大きな働きをなそうとすれば、教会における宣教の働きに影響することは間違いありません。もちろん、こうした働きは、教会に還元されていく働きであり、重要な働きです。しかし重要な働きだからこそ、1年、2年で息切れするような企画ではいけないのです。5年、10年と継続して発行され、改革派教会の全信徒に有用に用いられていくものになければなりません。

私の思いとしては、是非とも実現して頂きたい。そして教案誌も、教会学校教師のためだけでなく、広く信徒の方々にも読んで頂けるものとしていかなければなりません。

だからこそ、大会において新たに始められようとしている試みにおいては、企画立案の委員会と共に、編集などのために、信徒の奉仕としてなされる専属スタッフを確保する必要が欠かせないと考えております。また各企画毎に責任者を配置して、分業制にすることも必要でしょう。

必要が迫られつつも、これを成し遂げるためには、解決しなければならない多くの課題があり、さらに多くのハードルが待ちかまえていることでしょう。だからこそ、人間的な知恵にばかり頼ることなく、主がことを成し遂げるための知恵と賜物とを備えて下るように、祈り続けたいものです。またそれまでの間、引き続き教案誌の発行が続けられますよう、編集部のためにも覚えてお祈り下さい。

「どんなに多くても満たされる」

—ヨハネによる福音書6章1～15節による説教—

佐々木稔（南浦和教会牧師）

その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われたが、こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。フィリポは、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」イエスは、「人々を座らせなさい」と言われた。そこには草がたくさん生えていた。男たちはそこに座ったが、その数はおよそ五千人であった。さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われた。集めると、人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった。そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に來られる預言者である」と言った。イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでもた山に退かれた。

（ヨハネによる福音書6章1～15節）

1. パンの奇跡は絶好の機会を捉えて行われました。

五千人給食の奇跡は、パンの奇跡をするのに絶好の機会を捉えて行われました。パンの奇跡をするならこのときを逃してはないという絶好のチャンスでなされたのです。イエス様の知恵は本当に素晴らしいのです。五千人給食の奇跡は、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書のどれもが落とさないで記している唯一の大奇跡です。それだけ大きな印象を与えたわけです。しかし、ヨハネによる福音書だけが意識的に記している大切な事があります。そこに豊

かで深い霊的意味があるのです。

それは、4節の「ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた」というこの一文です。ユダヤ人が過越の祭りで強く意識するものは幾つかありますが、一つは、神が天からのパンの奇跡によって人々を養い生かしてくださったという奇跡です。出エジプトしたときに神はイスラエルの民をパンの奇跡で養い生かしてくださったことを、ユダヤ人たちは意識し思い出し語り合っているのです。そこで今度は、イエス様が同じようにパンを無尽蔵に豊かに出して人々を養い生かす奇跡をすることによって、御自分が偉大な神

の御子であること、神と等しい者であること、神であることをよりたやすく人々が信じられるようにして下さっているのです。

かつて、旧約時代には神がパンの驚くべき奇跡をしましたが、新約時代にはイエス様がパンの驚くべき奇跡を行うことによって、両者は重なってくるのです。両者はだぶってくるのです。天の神によるパンに関するのと同じ奇跡をイエス様も行えるということは、イエス様が天の神の御子であり、天の神と等しい者で、天の神と同じく神であることを鮮明に教えるのです。ですから、イエス様は一番よいときにパンの奇跡をして下さったということがわかります。

これらすべてのことは、人々がイエス様を神の御子と信じやすくするためのイエス様御自身のあたたかい配慮であったのです。イエス様は人々が信じて救われ、永遠の生命を受けることを本当に望んでおられるのです。そのことは今日も同じです。わたしたちはイエス様御自身のあたたかい招きに応じ、心を柔らかにし、聖霊の働きによって信じる者となり、永遠の命を自分のものにして、日々喜んで歩いていきましょう。

2. イエス様は弟子たちの信仰を試されました。

イエス様は五千人給食の奇跡をどんなふうに行ったのかと言うと、そばにいた弟子たちの信仰を試した上で、また人間の力ではどうにもできないことを確認させた上で、奇跡を行うのです。5節でイエス様は「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われましたが、イエス様の言葉は、弟子のフィリポの信仰を試したこと、テストしたことを意味しています。イエス様は、丘に上って来る大勢の人々を見ましたが、まもなく夕方になり日も傾いてくることを知っておられました。それらの人々は、ガリラヤ湖に沿って7キロあるいは8キロ、てくてく歩いてきたのです。そのため集まってきた人々はお腹が減っていたでしょう。さらにこの後空腹のまま7、8キロの道の

りを飲まず食わずで、また帰らせるということは、とてもかわいそうなことです。

そこでイエス様は弟子たちの信仰をテストしたのです。弟子たちがどのように反応するのか試したのです。イエス様御自身はもうこのときには、パンの奇跡によってこれらの人々を満腹させることを決め、御自分がなさることをもちろん知っておられましたが、弟子たちがどのように反応するか試したのです。イエス様が望んでいた答えは「イエス様、パンを買ってくる必要はありません。イエス様は以前にガリラヤのカナの結婚式でぶどう酒がなくなったとき、水をぶどう酒に変える奇跡をなさいました。ですから、今日も、イエス様が生きた神の子としての力によって、何らかの奇跡をしてくだされば大丈夫です。わたしはイエス様を信じています」という信仰の答えを求めていたわけです。

ところが弟子のフィリポは期待した答えをしませんでした。7節で「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えました。わかりやすい言い方をすると、「イエス様何を言っているのです。こんなに多くの人がいれば、仮に二百デナリオンの大金があって、パンを買って与えたとしても、おなかいっぱいにはなりませんよ。」とあっけらかんと言っています。「二百デナリオン」とありますが、これは、二日分の賃金総額のことです。当時としては大金でしたが、仮にそれだけの大金があってパンを買って一人ひとりに分け与えたとしても、いくらも食べられませんよという意味です。

この言い方には、全能の神の子イエス様がそばにおられるのだから、かつてのカナの結婚式で水をぶどう酒に変えて下さったように、神の子のイエス様は今日も必ず何か奇跡をして下さるとわたしは信じますという信頼の気持ちは感じられません。何もできませんよ。これで終わりなのです。こうして弟子のフィリポはイエス様による信仰のテストに不合格でした。落

第、赤点を取りました。イエス様への信頼がぜんぜんこの言葉には感じられません。

イエス様による信仰のテストに不合格だったのは、フィリポだけではなく、シモン・ペトロの兄弟アンデレもそうでした。アンデレは、9節で「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」と、これまたあっさり答えました。この答えにもイエス様が奇跡を行って人々に食べさせてくださるといふ信仰、信頼はみじんも感じられません。

こうしてフィリポもアンデレもイエス様による信仰のテストに合格できませんでした。フィリポとアンデレはこのときイエス様が望んでおられた信仰にはとても届かなかったということです。しかしイエス様は変わりなくフィリポとアンデレを愛して、御自分の弟子としてさらに残り一年の交わりの中で育ててくださるのです。実際にフィリポとアンデレはこのときはまだまだ信仰が未熟で育っていませんでしたが、イエス様の十字架の死、復活、聖霊降臨を終えて、信仰が勝利して確立していくのです。

このことは、今日のわたしたちも似たところがあるでしょう。わたしたちも長い信仰の人生において、自分の信仰が試されるときが必ずあるでしょう。そのときに失敗をし、自分の信仰の未熟さを痛感することがあるでしょう。そうであっても、イエス様はなお変わりなく、わたしたちを限りなく愛し、交わりの中でさらに育ててくださり、わたしたちを信仰の勝利の生涯に必ず導いてくださるのです。

イエス・キリストは、わたしたち一人ひとりの信仰を時間をかけて育ててくださるお方なのです。ですから、いろいろなときにわたしたちが失敗をし、ハマをし、不十分なことをしても、だからといってダメだと思ふ必要は全くありません。キリストは、なお、わたしたちを愛し、教し、育ててくださるのです。わたしたちは希望を持って、信仰の生活を大切にしていって喜んで歩

んでいきましょう。

3. パンの奇跡は全員が充分満たされるように行われました。

イエス様はいよいよパンの奇跡を行います。それは、秩序正しく、皆が満腹するように行いました。さらに今日、パンを使う教会の聖餐式との豊かなつながりを教える仕方で行ったのです。

まず、秩序正しく行ったところから見ましょう。五千人給食が行われた時期は、10節で「そこには草がたくさん生えていた」とありますように、葦草が生える春で、大草原には、成人男性だけでも約五千人もの多くの人々がいました。人々は草の上に秩序正しく座らせられました。立っている人もいれば草の上に座っている人もいるというのではなく、全員を草の上に秩序正しく静かに座らせました。五千人の集団が自分勝手に動くのであれば、バラバラで何もできないでしょう。

次いでイエス様は、少年が持っていた大麦の五つのパンを持って来させました。たぶんその一つと思いますが、両手でそのパンを取り天に顔を向け、神に感謝の祈りをし、それからパンをどンドン奇跡によって出し、弟子たちによって運ばせ、人々に与え、食べさせました。ここで、重要なことは、11節で「……イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。」と言われていることです。パンを取り、感謝の祈りを唱え、分け与えるという用語表現は、明白に教会の聖餐式を思わせる仕方となっています。

特に「感謝の祈りを唱えて」というのは、もともとユーカリステオーと言いますがこのユーカリステオーという言葉から聖餐式を表すユーカリステシアという言葉が生まれました。さらに、英語で聖餐式を表すユーカリストという言葉もここから生まれてきたのです。

イエス様の弟子のヨハネは、教会のパンを使

う聖餐式を重ね合わせてわざわざ記しているのです。1世紀の読者はすぐにわかったでしょう。五千人給食のパンの奇跡と、教会がパンを使ってイエス様の十字架の贖いの死を記念する聖餐式とが豊かなつながりがあるのだと感じたでしょう。後に、人々はパンを使う聖餐式を通して霊的に満腹し、満ち足りることになるのです。

また、この五千人給食は、全員が満腹するものでした。ある人々だけではありません。早い者勝ちではありませんでした。弱肉強食で強い人々だけが満腹したのでもありませんでした。老いも若きも子供も、また男も女も、また職業や社会の立場にかかわらず、そこにいた人々が全員もれなく一人ひとり、どの人も皆満腹し満たされました。

まずパンが分け与えられました。次いで魚も同じようにして欲しい分だけ分け与えられました。さらに12節では「人々が満腹したとき」とあります。そこにいた人々全員どの人ももれなく例外なく「満腹した」とはっきり記されています。まさにこんな素晴らしいことができるのは、イエス様が測りしれない偉大な力を持った神の御子であり、神と等しいお方であり、全能の神御自身だからです。

さて全員が食べて満腹したとき、イエス様は、祝福と恵みを無駄にしないで大切にすることを教えるため、また、イエス様が神の子として行った奇跡の偉大さをもう一度教えるため、パン屑を集めるように命じました。パン屑は十二の籠にいっぱいになりました。パン屑の多さからパンの多さをイメージする、想像するという巧みな仕掛けになっています。

13節に、「十二の籠がいっぱいになった」とあります。十二の籠がいっぱいになったということで、十二は聖書で完全数です。完全を表すので、イエス様による五千人給食の奇跡はイエス様が神の子であることを表す奇跡として完全であった、完璧であった、パーフェクトであったということを意味しています。

こうしてイエス様は五千人給食の奇跡を行いました。五千人給食の奇跡は根本的に何を教えようと意図しているのでしょうか。イエス様は、どんなに多くの人々がいても全員一人ひとり、この人もあの人も皆霊的に完全に満腹させることができる偉大な神の御子であることを教えようとしているのです。

実際今日もそうなっています。日本にクリスチャンは112万人います。112万人のクリスチャンを救いの恵みと祝福で霊的に満腹させ満たしています。また、世界の人口は60億人でクリスチャンは約20億人ですが、20億人のクリスチャンを救いの恵みと祝福でどの人も霊的に満腹させ、満たしています。さらにもっともっと増えても大丈夫です。日本でイエス様を信じる人々がもっともっと増えても、救いの恵みと祝福は無尽蔵の豊かさがあり、一人ひとりには減ることはないのです。

この世の物はどんな価値のある物、素晴らしい物、すぐれた物であっても、受ける人が増えれば一人ひとりには少なくなるのです。しかし、イエス様から与えられる救いの恵みと祝福、永遠の命は受ける人が増えても一人ひとりが受ける分は減ることが全くなく、必ず一人ひとりが霊的に満腹し、満たされ、潤され、喜んで歩むことができるのです。

なぜでしょう。イエス様はくめども尽きることのない無尽蔵の豊かさを持っておられる偉大な神の御子であり全能の神だからです。これが答えです。

4. 結び

わたしたち一人ひとりが神の御子イエス様からの救いの恵みと祝福で霊的に満腹し、満たされ、潤され、喜んで信仰の道を大切に歩いていきたいと思えます。聖霊なる神が、わたしたちの心に働いて、神の御子イエス様に対して信頼を強く大きくしてくださるように祈りましょう。

宝塚教会教会学校の紹介

富井 篤 (宝塚教会教会学校教師)

1. はじめに

宝塚教会は阪神間のちょうど中程に位置する教会です。大阪からも神戸からも45分程度で来ることができます。最寄駅は阪急今津線仁川駅で、駅から西へ10分程度です。初めてこられる方は少しわかりにくいかもしれませんが、甲山という小さな山から武庫川という大きな川へ至る仁川が近くを流れる住宅地の中にある教会です。昨年40周年記念式典を行いました。会員は現住陪餐会員が50名ほどです。大きくもなく小さくもなくという感じで、家庭的な教会だと言われます。教会学校には毎週子ども10人程度が集まります。教師も含めると20人程で礼拝を守り分級に分かれます。契約の子が中心ですが、行事の際にはそうでない子も結構集まります。神戸改革派神学校から比較的近いので毎年のように神学生を受け入れ、共に交わり学ぶことができるのは大変感謝すべきことと感じています。

2. 教会学校の礼拝と分級

1) 礼拝

礼拝は毎日曜の9:20から20分程度行います。説教は牧師を含め教会学校の教師の中で担当できる5人位が順番に担当します。神学生にもお話ししていただいています。説教のテーマは中部中会教育委員会発行の教案誌にそって行っています。この教案誌は昨年2004年度から採用しました。2004年度は2003年度発行分の救済史を学び、今年2005年度に2004年度発行分の教理に取り組んでいます。うまくできるかどうか様子を見ながら進めているというところです。この教会は、長い間『成長』にお世話になってきましたので、そこから脱皮するのにおそろおそろの

面があったためです。しかし、国方先生のご指導の下、どうやらペースをつかんできたところと言えそうです。説教の準備には教案誌の説教展開例の学びのほかに、教師会で教案研究をする際に意見交換をします。それでもなかなか思うような説教はできませんが、子どもたちと共に成長していきたいと願っています。

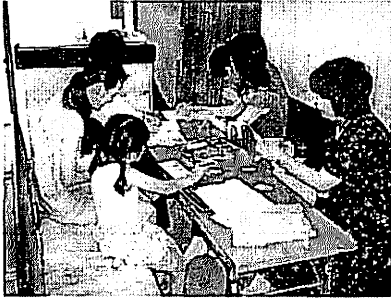


礼拝風景

2) 分級

9:40頃から30分程度が分級の時間です。分級は幼稚科、小学下級、上級、ジュニア科(中高生科)と分かれます。ご多分にもれず、年齢が上がって中高生になると教会から足が遠のいてしまうのが悩みです。この教会では幼稚科が最もにぎやかで活発であり、小学科がそれに続き、ジュニア科は教師と参加している子どもの健闘にもかかわらず、ちょっと寂しい状況です。

幼稚科は、聖書箇所簡単な学びをした後、元保育士の牧師夫人のアイデアあふれる工作をしています。小さな子どもたちが礼拝終了後走ってやってきてちょこんと椅子に座って待っている雰囲気です。これから幼稚科に入ってくる赤ちゃんもいて、まだまだにぎやかになりそうです。



幼稚科分級

小学下級は母子室で寺子屋のように机を出して学んでいます。契約の子でない女の子がいて一生懸命学んでいます。

小学上級は会堂で独自のプリントを毎週用意して分級をやっています。女の子ばかりで脱線することも多々ありますが、楽しくやっています。

ジュニア科は別棟の会議室に移動します。教案誌で学んでいるテーマの他に、月に一回バイブルクラスと称して元英語教師により英語で聖書を学ぶことをやっています。聖書を学びながら英語もできるようになるとすばらしいのですがどうでしょうね!?

3. 年間の行事と活動

①ジョイフル・タイム (2、6、10月)

上に書いたような中高生の教会離れに何かできないかと昨年秋から始めた土曜学校です。なかなか好評だったので、今年は2、6、10月と、イースター、夏季学校、クリスマスの合間に年三回企画しました。先日行われた6月の時は、皆でクレープを作ったり、スライムを作って遊んだり楽しいときを過ごしました。子ども11人を含め21人の参加でした。その他、これまで、たこやきを作ったり、ゲームや紙芝居、カルタやパソコンなどいろいろなものを用意してやっています。普段礼拝にはなかなか姿を見せない子が、いつもと違う顔で参加してくれるのを見ると、やって良かったなあと思います。



ジョイフルタイム

②ジョイフルタイム・パート2 (12月)

これも初の試みで昨年行ったものですが、中高生や大学生を対象に宿泊しての修養会を開きました。年末の二泊三日琵琶湖のほとりに宿泊しましたが、近隣の教会の若者も含めて21人の参加があり、交わりについて学び、実際に良い交わりの場となりました。今年も同じ時期に継続して行う予定です。機会を重ねる中で若者たちが大きく成長してくれることを期待しています。

③夏季学校 (7月)

数年前から宿泊で行うことが定着しました。最初は少し離れた宿泊施設などを利用していましたが、昨年からは教会で宿泊しています。昼間は礼拝・分級の他、近隣の施設に行って活動します。教会に泊まって共に食事をしたり、近くの銭湯に行ったり、すいか割りや花火をするのも、将来いい思い出になるのではないかと思います。

④クリスマス祝会 (12月)

大人のクリスマスとは別に行っています。ここ数年はオペレッタ形式の劇をやっています。

降誕劇や取税人ザアカイの話などです。その他ゲームやプレゼント交換、婦人方中心のハンドベルや青年会のリコーダー演奏などもあり盛りだくさんです。

⑤ピクニック（5月）

近くの甲山などに行っています。今年は皆で「だるまさんがころんだ」をしたのが意外と新鮮でした。



ピクニック

⑥イースター（4月）

前日にイースターワークと称して集まり、イースターエッグの用意などをします。

※教会ホームページに夏季学校やクリスマスの写真や紹介があります(少々古いですが……)。よろしければご覧ください。URLは <http://www.geocities.jp/takara53jp/> です。

4. 教師会

毎月第四主日の午後に行っています。各行事の準備・反省の他、教案検討にずいぶん時間を費やします。1:00から始めますが、議論が沸騰して4:00からの夕拝開始直前までかかるようなことがしばしばです。

5. 課題

現在総勢10名の教師はそれぞれ多忙な中皆さん良く奉仕をされていますが、それでも仕事の一部の人に集中し、特に牧師夫人に頼る面が多くあるのが現状です。(月刊教会学校だより「天のだから」も夫人にやってもらっています。)一人一人の奉仕が支えられるようにお祈りください。教師が信仰に堅く立って奉仕に励む中で、子どもたちも何かを感じ学んでくれることを確信しつつ、今後も研鑽を積んでいきたいと思えます。

また、上にも書いたように、中高生が在籍は多くいるものの週毎の礼拝・分級になかなか定着できません。いろいろ試みをしているところですが、それらが実を結ぶように期待しています。

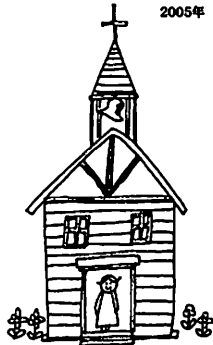
この教案誌を採用したのも試みの一つで、まだまだ使いこなせているとは言い難いですが、堅実な改革派信仰に立っているという安心感とやりがいを感じて使わせていただいています。編集者の皆さんに敬意を表すると共に今後の一層の充実をお祈り致します。

月間教会学校だより 「天のたから」

教会学校だより

天のたから

2005年 7月



日本キリスト改革派宣道教会
教会学校

〒665-0062 宝塚市仁川高台1丁目8-65
☎ 0798-53-5319
宣道教会ホームページ <http://www.gpocitica.jp/takara3.jp>

(1)

「イエス・キリストは神さま」

神さまはどのような御方でしょうか。まず何よりも神さまは死んだ神さまではなく、生きて働いておられる神さまです。人間が考へたり、造つたりした偶像の神さまはどんなに立派でも生きて働いて下さる神さまではありません。次に大切な教えは、聖書の神さまは三位一体の神さまであるということです。何か難しく聞こえますが、私たちが御言葉を聞いて信じていることです。父なる神さまは私たちの救いのために、ご自分の独り子イエス・キリストを私たちの救いのために送って下さいました。イエス・キリストはこの父なる神さまの御いのご計画を行うために、この地上に来て、苦しみを受け、十字架に死に、墓に葬られ、天に昇られました。聖霊はこのイエス・キリストの御いの御言葉を私たちの心にまで届けて下さって、信じる心を与えて下さいます。この父なる神さま、子なるイエス・キリスト、聖霊なる神さまがそれぞれに救いの役割をもちつつ、一つの神さまであるということです。そこに救いのご計画とその実現に対する三位一体の神さまの深いご計画と豊かな愛が表されています。それですから、私たちが信じている救いは誰かから命に預けられているのです。

7月のカリキュラムの予定

☆幼稚園・小学科・ジュニア(中学・高校科)

＜礼拝＞

	＜分級＞
(9時20分～40分)	(9時40分～10時10分)
7/3 問10「三位一体の神」	お話:木村隆平先生
7/10 問10「三位一体の神の交わり」	お話:富井 篤先生
7/17 問11「主権者なる神」	お話:窪政公平先生
7/24 問12「天地創造」	お話:四方敬治先生
7/31 問13「摂理の神(一)」	お話:富井 篤先生

⑤ 報告・案内

☆5月の礼拝献金は、5回の日曜日で合計12,335円でした。感謝をもってご報告します。

(2)

☆6月11日にジョイフル・タイムをしました。参加者は子ども11名、大人10名でゲームやクレープ作り、スライム作りなど楽しく遊びました。

☆夏季学校のお知らせ

日時：7月21日(木) 午前10時 教会に集合
22日(金) 午後1時30分 教会で解散予定

場所：今年は教会でお泊まりをします。

内容：1日目 宝塚市立少年自然の家に行きます。
2日目 教会で分級、ゲームなどをします。

参加費：子ども(3才以上) 1000円

※7月10日に夏季学校のしおりを配り、簡単な説明をします。よく読んで忘れ物のないように準備しましょう。わからないことがあれば教会までお尋ね下さい。

☆西部中会連合中高生会夏期修養会のお知らせ

日時：7月26日(火)～28日(木)

場所：同志社琵琶湖リゾートセンター

テーマ：「キリストへの信仰を他人に伝える」

講師：スチュアート・ワウ先生 (神戸改革派神学校教授)

参加費：10,000円 〆切 7月13日

☆西部中会合同夏期学校のお知らせ


日時：8月2日(火)～4日(木)

場所：YMC A 六甲研修センター

テーマ：「私たちの教会－キリストのからだ」

参加費：15,000円 〆切 7月10日

☆大西良嗣神学生ご一家は、夏期伝道のため、7-8月は担賀浸道教会に出かけられます。



(3)


⑥ こどものための 福音のおしえ

問10 私たちの神さまには、いくつもの位格がありますか。
答 真の神さまには、三つの位格があります。
御父なる神さまと、
御子なる神さま(イエスさま)と、
御霊なる神さまです。
この三位は同質であり、三位一体の神さまです。

問11 私たちの神さまの全徳、主権とは何ですか。
答 私たちの神さまが、
すべてのものを神さまの栄光のために造り、保ち、支配しておられることです。
神さまの力の及ばないところは、宇宙のどこにもありません。

問12 神さまの創造のお働きとは何ですか。
答 私たちの神さまが、
ただ御言葉によって、
世界とその中にあるすべてのものを、
きわめて良いものとして造られたことです。

問13 神さまの摂理のお働きとは何ですか。
答 今、私たちに働く、神さまの御いのお力のことで、
神さまのお祈りがなければ、
葉の毛一本も落ちることができないほどに、
神さまは私たちの父として、
私たちを守ってくださいます。
ですから、輪廻も病氣も、嬉しいことも悲しいことも、
すべてのことが、
私たちに立つよう働くのです。



(4)

第七回 子どものための説教と礼拝

相馬伸郎（『教会学校教案誌』編集長）

引き続いて、子ども礼拝式における説教とその重要性についてなお一緒に考えてまいりたいと思います。議論と主張が重複する箇所が多々出てまいりますが、忍耐してお付き合いくださいませ。

聖書、聖書朗読、そして説教

一語りだされる神—

私ども日本キリスト改革派教会に生きる者として、説教について論じるとき、先ず覚えておきたいことは、ウエストミンスター大教理問答の問155です。「神のみたまが、み言葉の朗読・特にその説教を」して、「救いに有効な手段」としてくださるとの信仰が表明されています。

最初から横道にそれますが、ここで、聖書朗読の重要性がどれだけ重要であるのか、現代の私どもの実践において、極めて深刻な反省を迫るものがあります。日曜学校の礼拝式では、聖書をまだ購入していない地域の子らもいるはず。子ども礼拝式にとって、聖書朗読は、決定的に重要な意味を持つと思います。

もともと人間のことばは、文字ではなく、音声でした。私どもの信仰からすれば、「ことば」とは、神の御言葉にその根拠があります。神は、その御言葉をもって人間に語りかけ、応答する者として創造してくださいました。人間は神と、ことばをもって交わることができるようになりました。そのときも神の御言葉は、文字ではなく、音声として響いたのです。聖書の言葉は神の御言葉ですから、もともと語られた言葉なのです。その意味でも、朗読されることを求めるのです。

しかも生ける神は、聖書の時代で語ることを

おやめになったわけではありません。（もとより、啓示は完結されています。新しい聖書の誕生はありません。）つまり、聖書朗読自ら、さらに説教されることを求めているのです。むしろ、説教のために聖書朗読されることを聖書自身が要求しているといった方が良くもかもしれません。

聖書、説教、そして教会

—説教の射程—

さらに聖書が自ら求め、かつ創り出すのは、朗読と説教を聴く「神の民」です。彼らが集まり生きる場所、礼拝共同体です。神は御自身の御言葉を個人にではなく、御自身の民に向けてお語りになられます。（もとより、聖書の中には、預言者個人に語られた言葉があります。しかしそれは、常に民へと語らせるためでした。）

ここでも、ウエストミンスター大教理問答問154を確認したいと思います。「救いの有効な外的な手段」は「キリストが彼の教会に分ち与えられる」（松谷好明訳、一麦出版社）もの、つまり、神の御言葉の説教とは、「彼の教会」（神の民の祈りの家・礼拝共同体）を形成するためにあり、なされるものなのです。その意味では、聖書を礼拝のための書物として見るのが重要です。（もとより、個人で、家庭でも読まれるべきことは言うまでもありません。しかしその個人も、家庭も、主の日の礼拝式と結ばれています。個人の礼拝や家庭礼拝もまた、主の日の礼拝式と結ばれていることによって真実の生命を持つのです。）礼拝によって教会は生命を得ます。「教会の生命は礼拝にある」（20周年宣言）からです。また、主日礼拝式においてこそもっとも鮮やかに「キリストにおいて神ひとと共に

住みたもう天国の型」としての教会は姿を明らかにします(20周年宣言)。キリストの体の輪郭が鮮明になるのです。これらは、日曜学校の礼拝式においてもまったく変わりません。

説教の本質

—神の言葉の説教—

説教の本質を論じるときほとんど必ずとりあげられる有名な定義に、「神の言葉の説教は、神の言葉である」(第二スイス信条)があります。説教とは、神が人間(説教者)を通して語られる、神の言葉であると信じるのです。読者の皆様のなかで、既に説教奉仕を担ったことのある方は、あの説教が「神の言葉」なのです!改めてそのように考え直すとき、どのような気持ちになられるでしょうか……。「わたしの説教はそのようなものではありません……」しかしあくまでもそう主張し続けるなら、説教を担うことは許されていません。これが私どもの信仰なのです。この説教の定義によって分かることは、逆に言えば、説教を自分で神の言葉にする必要はないし、その可能性もまったくないということです。わたしの説教の言葉を神の言葉としてくださるのは、神御自身なのです。

その意味で、「神の言葉の説教」としての大前提とは、それが、記された神の御言葉である聖書の解き明かし(釈義)であるということです。つまり、決して、自分の信仰的な考え、体験を「お話」することではありません。あるいは、自分が伝えたいと思う聖書的メッセージや教理を、与えられたテキストに押し込むことでもありません。

説教の機能

—礼拝を成り立たせることば—

しかし同時に、単に「聖書の解説」で終わってもなりません。それだけなら、聖書の新しい翻訳をしてみせたということではかないのです。前回学びました「説教作成までの道のり」を

思い出してください。説教者には、第一に祈禱。第二に聖書をよく読む。第三に本誌による学び(聖書・カテキズム研究)。つまり、正しい解釈を求めてする営みです。最後の第四として、説教原稿の作成としました。しかし、ここで弁えていたことがあります。それは、ただ単に、自分が学びとった事柄を子ども向けに分かるように優しく説明することだけでは、いまだ良い説教になっていないということです。

実はこの第四の前の段階、あるいは、ある方にはそのなかで同時にすることもあるかもしれませんが、通常、「黙想」と呼ばれる営みが不可欠なのです。これは、「神学すること」と言うても良いかと思います。ここで、御言葉との対話を深めるのです。同時に子どもとの対話が求められます。つまり、与えられた御言葉が子どもたちに何を語るのか、意味するのかを問うのです。言い換えれば、子どもの現実に「届く言葉」を求める作業をします。単に、聖書の言葉を子どもに上手に説明してみせても、神の言葉の説教にはなりません。説教の課題は、説教をして真実に説教たらしめること、つまり、子どもたちに届く言葉、さらに言い換えれば、分かる言葉を獲得することです。

それなら、分かったとき、何がそこに起こるのでしょうか。それは、神礼拝です。キリストとの出会いです。第二スイス信条で確認したとおり、私どもの語る言葉は神の言葉ですが、それは、ひとえに子どもたちをして、神礼拝を成立させる限りにおいてのものなのです。

神礼拝、つまり、臨在のキリストとの出会いがそこで起こらなければ、日曜学校の営み全体に、「生命」が枯渇して行きます。致命傷となります。礼拝こそ生命なのです。だから、届く言葉、分かる言葉としての説教の言葉を獲得することこそ、私どもの常に真剣な課題となること分かります。それは、子どもたちにとっての礼拝のリアリティーを豊かに味あわせる道をたずね求め続けることなのです。

説教の権威

しかし、このことがいかに困難な営みであることか、説教をなさった方は、既に途方にくれる思いで、知っておられるのではないのでしょうか。よい説教とは、おそらくこの現実には打ち碎かれる人から生み出され、与えられて行くと思います。

しかし、そこでこそ、改革（派）教会の福音理解が光となります。私どもは、敬虔主義的教会のように毎週のように信じる決心を促すような説教をしません。回心だけを目指した説教や、分級をしないのです。なぜなら、「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける」（ヨハネによる福音書第10章27節）からです。つまり、そこで私どもは、自らの力（操作）で、回心させること、キリスト者を産み出すことはできないし、してはならないのです。予定の信仰に立ってこそ、より事柄にふさわしい、正しい仕方では説教に仕えることができるのです。

ここでもウエストミンスター信仰告白第7章「人間との神の契約について」の6項を確認することが大切です。「実体であるキリストが提供された、福音の元では、この契約が実施される規定は、御言葉の説教と、洗礼および主の晩餐の聖礼典の執行である。」（松谷訳）つまり恵みの契約の本体であるキリスト御自身の救いの恵みが私どものものであるのは、第一に御言葉の説教によることが明らかにされているのです。神の契約のうちにある選びの民であれば、必ず、御霊が有効に召命して下さるのです。

横道にそれますが、第14章「救いに導く信仰」

の一項にも注目したいと思います。「信仰という恵みの賜物は～通常は御言葉の宣教によって生み出される。」ですから、地域の子どもたちをなんとしても、礼拝式に招き入れ、説教を届けたいのです！

このような信仰の理解のあるところ、既に説教の「語り口」、説教者の「立ち位置」も規定されます。つまり、説教者が子どもたちを単に、生徒としてだけ見るのではなく、信仰の「幼い仲間」と見ながら、語りかけるのです。つまり、「君たちは・皆さんは」よりむしろ、「（僕たち）私たちは」と、説教者と聴衆とが一つになって御言葉の前に共に出ていることを明らかにするのです。そこで、説教者自身、契約の子はもとより、地域の子らをも新しいまなざしで見目を開いていただくのです。ここに私どもの日曜学校の営みの基本線があると信じます。（誤解のないように付言すれば、「君たち！」と、神の権威をもって告げるべきときもあるはずです。）ここで改めて、子どもたちの礼拝式の中に占める、契約の子の重要性を思わざるを得ません。

神は、私どもを御自身の説教者としてお立てくださり、その拙い説教をお使い下さって、子どもに届く、聴き取れる、分かる神の声を語らせてくださいます。これは、神の約束であり、奇跡です。ですから、あなたの説教は必ず実ります。説教の主なる神、契約を実施なさる神の権威に基づく確かな約束だからです。今月も、この約束を信じ、光栄とおののきとをもって、子どもたちの前に立たせて頂き、神の権威に基づき語らせて頂きましょう。

第八回 主イエスと説教そして分級

相馬伸郎（『教会学校教案誌』編集長）

予定では、「牧会する場としての分級」として語るつもりでしたが、なお、先回の議論を深めるところからはじめます。

日曜学校の「魅力」とは

何故、子どもたちは、日曜学校が好きなのでしょう。たとえば、私どもの教会には、教会が置かれている学区以外の遠くからの小学校からも、自転車で乗って、あるいは歩いて通ってくる地域の子らが少なくありません。会堂建築に共なって、それまで教会堂として使用してまいりましたビルがあった学区からの移転が決定したとき、日曜学校には、地域の子がほとんどいなくなり、ゼロからの再出発のようになることも真剣に考えました。その意味で当初は、学区外への移転に対して、あまり積極的になれない思いすらありました。しかし、あれから3年。なおそこから続けて通ってくる子どもたちがいるのです。（ただし可能なかぎり、車で送迎しています。）それなら、私どもは、いわゆる福音派のような、特別楽しいプログラムをしているのでしょうか。違います。ごくごく普通の日曜学校です。皆様に「このようにすれば、子どもたちを集められます」と、取り立てて紹介すべきものはありません。だから、不思議に思うのです。何が楽しいのだろうか。どこに魅力があるのだろうか。教師たちの魅力だろうか。それは十分に考えられます。しかし、結局、ここに行き着きます。子どもたちをひきつけるのは、福音そのものの魅力です。主イエス・キリスト御自身の魅力に他ならないということです。

説教の内容

—主イエス・キリストの紹介—

そうなれば、日曜学校の営みの鍵となるのは、どのようにこの主イエス・キリストを正しく、豊かに、紹介できるのかという一点に収斂させることが可能です。

しかしもともと改革（派）教会は、聖書の包括的な教えを重んじる教会です。一つの教理を突出させるようないわゆる教派主義（型）の教会ではありません。それだけに、主イエス・キリストに集中するというあり方に違和感を持たれるおそれもあるかもしれません。

ここでも前回と同じ、ウエストミンスター信仰告白第7章「人間との神の契約について」の6項を確認したいと思います。「実体であるキリストが提供された、福音の元では、この契約が実施される規定は、御言葉の説教と、洗礼および主の晩餐の聖礼典の執行である。」（松谷訳）ここでは、主キリストこそ、恵みの契約の「実体」であること、「福音」そのものであることが明らかにされています。

またたとえば、ローマ・カトリック教会で、「福音」といえば、それは、「福音書」を意味していることをも覚えてもよいと思います。そもそも、新約聖書の最初の部分に収められたのは、四福音書でした。聖書が礼拝成立のための根本的な書であれば、そこで、主イエスを中心に語らざるをえないと教会は考えたからです。

「役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えました。神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを」（使徒言行録第20章20-21節）。博学なパウロが、エフェソの教会

の長老たちに別れの説教を告げて、「役に立つことは一つ残らず」と言ったとき、旧新約聖書の全体を余すところなく語ったというのではなく、「主イエスに対する信仰」でした。これは、主イエス御自身の説教の中核である「悔改めて、福音を信ぜよ」とまったく同じです。何より、復活の主御自身が、「聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された」(ルカによる福音書第24章27節) のです。

その他いくつも挙げる事ができるでしょう。「神の秘められた計画を宣べ伝えるのに優れた言葉や知恵を用いませんでした。なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまい」(コリントの信徒への手紙一第2章冒頭)。いささか乱暴な議論ですが、要するに、彼の説教は、主イエス・キリストに集中するものであったのです。なぜなら、このお方が、福音の主人公であられ、この救い主を信じることへと招き、勧め、教会を形成することが説教者、伝道者パウロの狙いであったからです。(もとより、「信仰に成熟した者達の間では、知恵を語ります」とも申しております。)

子どものためのカリキュラムと主イエス

先回、子どもに分かる説教を求めるとき、説教の「語り口」まで規定されるのではないかと、いささか、大げさに申しました。しかし、それ以上に自明となることがあります。それは、教える内容、カリキュラムもまた規定されるということです。

改めて問います。私どもが語り、伝えるべき相手は、誰でしょうか。幼稚科から中高生までの子どもたちです。子どもたちにとっての魅力が、主イエス御自身であれば、日曜学校のカリキュラムもまた、このお方、福音の実体、本体であられるキリストを子どもたちに紹介し、出会いへと招くことに全力を注ぐべきことは当然ではないでしょうか。もとより、福音書以外は

語らないというのでは決してありません。ただし、旧約聖書でも使徒書でも、この福音の主なるイエス・キリストを紹介する視点で、読み解くことが求められているのです。

ちなみに弊誌は、現在、子どもカテキズムを軸とした二年カリキュラムの二巡目となりました。これまで少なくとも、編集方針としては、教理をできうる限り、福音書において語ることを目指してまいりました。

分かる(届く)説教と主イエス

先回、説教は神礼拝を成立させるための要であり、礼拝式こそ、日曜学校の営みの生命線であると学んだことを改めて思い出してください。そうなれば、分かる言葉、届く言葉を求めてなす説教は、単に教理の「説明」ではなく、生けるキリストの物語(説教、出来事)を、「物語る説教」を目指すことになります。聖書(テキスト)の固有の真理を告知しながら、主イエス(神)を生き生きと紹介する説教(お話)です。そうなれば、必然的に、神を賛美する礼拝の言葉、頌榮的な言葉としても整えられてくるのです。何よりも、そのときには、主イエス御自身が子どもたちの最も深いところにまで届き、訪ねてくださいます。

日曜学校教師は、たとい牧師のように聖書の広く深い知識、教理の包括的な知識においてなお貧しくとも、子どもに分かる、魅力ある説教を語れるはずです。今「どなた」を紹介するために、子どもたちの前に立っているのかというヒントがあってれば、良いのです。蛇足ですが、牧師は、よき模範を見せ、教師を訓練する責任が教会の主から課せられています。

説教者と主イエス

そのためには、まず、説教者自身、御言葉によって、主イエスとの交わり(礼拝)の喜びを味わい続けていることが求められます。説教者自身の礼拝経験、説教(御言葉)経験、霊的生

活の深まりが求められます。もとより、説教準備は、大変な奉仕です。重圧があるのはその通りです。しかし万一、いやいやするようであれば、説教になりません。逆に、説教する（伝える・紹介する、分かち合う）喜びがあるなら、どれほど拙い言葉であったとしても、そこで既に神の言葉が働いておられるのです。伝える喜びにあふれる説教とは、すでに説教者自身が聖霊による喜びに巻き込まれている（生かされている）はずです。聴く子どもたちにも、同じ聖霊が働いてくださることを信じ、言葉を整えるのです。

もとより、それは感情的な語り口を持たなければということではありません。聖霊のお働きを人間の感情で操作できるはずはありません。しかし、喜びの調べになっていない説教は、なお、説教未満であるでしょう。あわせて繰り返しますが、子どものための（分かる・届く）説教なのですから、説教の言葉から聴いている子どもたちの姿が見えてこないようであれば、同じように説教未満となるでしょう。

分級と主イエス

私どもは分級で、何をしようとするのでしょうか。しているのでしょうか。それは、礼拝説教とまったく関係のないことなのでしょう。一方で「違う」といわなければなりません。分級固有の視点があるからです。この点は、次回に学びます。しかし他方で、その本質から言えば、「同じ」です。説教であれ、分級であれ、教師が伝え、紹介し、分かち合うべきことは、福音であり、その主人公、主イエス・キリストに他ならないからです。説教と分級ではその仕方において異なるのです。

分級では、ひとりひとりの子どもたちとまさに膝をつきあわせるような仕方で個別に向き合っています。繰り返しますが、届く説教においても、すでに説教者と子どもたちとは対話し、向き合っています。その意味では、日曜学校の営みとは、子どもに向き合うこと、そして御言葉の恵み、喜びを響かせることにあります。しかし、分級では、それを全体にではなく、ひとり一人個別になすのです。

もとより、分級でも複数の子らがいるでしょう。しかし必ず求められることは、担任教師は、子どもの名前を呼ぶことです。そのようにしてその子の現実のなかに、主イエスを紹介してあげるのです。そこで何が起きているのでしょうか。子どもたちの真の羊飼いなる主イエス御自身が、具体的な状況のなかに生きている彼らを「訪問」しておられるのです。私ども教師とは、この御業の「道具」となるのです。その意味で教師は、子らの牧師（牧会者）そのものとなっています。私どもはその全存在をもって、主イエスの魅力、その御力の証人として用いられることができるし、用いられているのです。

繰り返します。私どもの務めは、生ける主イエス・キリストを紹介することに尽きます。ですから、私どもは与えられた分級において、「準備した知識をすべて教えなければならない」などというプレッシャーは捨てて良いのです。むしろ、「こなせた」と言う自己満足こそ、教師の最大の誘惑なのかもしれません。

皆様の労苦は、主が見ておられます。主イエスこそ、子らのために、祈り、語り、お守り下さっているのです。今月も互いのため、子らのために執り成し祈りましょう。

第九回 分級とは何か

相馬伸郎（『教会学校教案誌』編集長）

連載第三回におきまして、「カテキズム教育」という教育方法論こそは、教会が自らの福音理解にもとづいて生み出した、教育の基本形であると申しました。それは、単に、教理の言葉を覚えさせるという教育方法を意味しているのではなく、顔と顔とが向き合う（膝を付き合わせる）関係を要請し、互いに御言葉を共鳴させる（響き合わせる）姿となるべきものであると学びました。教師とは、子どもたちに先立って、神に御顔を向けられた人（神の顧み＝牧会を受けた）であり、教師は、神の「牧会」を受けた喜びをたずさえて子どもに向かうものであると申しました。これこそ、日本キリスト改革派教会の日曜学校の教育イメージ、教会教育の基本形なのだと言いました。ここでは、先回の最後の項ともあわせ、改めて言い直すことになりま

キリストの三職と日曜学校教師

キリストの「三職」とは、預言者職、祭司職、王職のことです。主イエスは、今も教会を通し、聖書と説教において語っておられ、また、十字架の主は今も、天上で神の民のために執り成し祈っておられ、また、王にして勝利者なる主は、今も、神の民を治め、守り続けていて下さいます。（「子どもカテキズム」問25、26、27参照）

日曜学校教師の奉仕とは、意識する、しないにかかわらず、この三職に対応してなされているものなのです。つまり、教師は、一人一人に、①御言葉を届け、②執り成し祈り、③魂を配慮するのです。教師が、自覚的に行えればより事柄にふさわしい働きが担えるはずです。生ける主イエス・キリストは、今、まさに、この

三つの御働きを力強く、子らになしておられます。私どもは、先立って働いておられるこの主の御業を認めることからこそ、その務めを正しく担えるはずです。自分の能力で、この聖なる奉仕を担うことはできません。

分級は知識の伝達が第一？

分級、それは、通常、年齢別のクラスのことです。それなら、何のために行うのでしょうか。私どもは、日曜「学校」と称しておりますが、小中学校では、必ず発達年齢に即した「授業」が行われます。それなら、私どもは、それと同じ理解のもとに分級を行うのでしょうか。ここでも一方で同じであるということが出来ます。子どもたちの発達年齢に即して、つまり、生徒の視点に立って、福音を語りこむことが求められ、当然、語り口、教える内容（範囲）も異なります。

しかし、私どもの営みにおける分級とは、「知識の伝達」がもっとも重要な目的ではないのです。「本誌の基本方針」には、「分級はオマケ」で構わないとまで記したほどです。私どもが目指しているのは、子どもたちの礼拝共同体の形成であって、どこまでも礼拝式が中心となるからです。しかも私どもの教会理解とは、「神の言葉の説教と聖礼典（聖餐）が正しく執行される場所に教会がある」（アウグスブルク信仰告白他）というものですから、日曜学校においてはとりわけ、説教が最重要となるはずなのです。礼拝式におけるキリストの臨在、生けるキリストとの出会いが子どもたちに起こることこそ、日曜学校の「魅力」「生命」となるからだと言えました。

①預言者職

先回、「子どもたちの真の羊飼いなる主イエス御自身が、具体的な状況のなかに生きている彼らを『訪問』しておられるのです。私も教師とは、この御業の『道具』となるのです。その意味で、教師は、子らの牧師（牧会者）そのものとなっています。」と申しました。ここに既に、分級の狙い、教師の目標が明瞭に語られています。

主イエス・キリスト（神）は、その説教を通して、子どもたちの全人格、心と体と魂にまで深く届けてくださいます。主が訪れてくださるのです。それなら、説教が届く（分かる）とは、いかなることでしょうか。それは、子どもたちの生活のなかに、主イエスがともにいてくださること、主イエスが働いていてくださることを、主のご訪問を認めさせられることです。そうすると、牧会者である教師は分級の場でもなお、語られた御言葉を目の前にいる子どもたちに届けようとするはずで、子どもたちの立場に立って、神の言葉が子どもたちに届くとはいかなることであるのかを考えるはずで、そこでもなお教師にとって、説教者（預言者）としての視点が働いています。しかし、分級では、牧会者の視点をこそ明瞭にして、個人的、具体的に御言葉を届けようとの働きを担うのです。

②祭司職

説教を正しく聴き取る力は、人間の能力に基づくのではなく、聖霊の賜物以外のなにものでもありません。ですから、教師は、聖霊の働きが子どもたちに豊かになされることを待ち望み、執り成し祈らざるを得ません。それは、子どもたちが御言葉を信じ、豊かな慰めを受け、喜んで従って生きて欲しいと祈り願う、祭司として働くのです。分級の奉仕においては、不可欠の視点です。

祭司の視点に立って働きを担う教師であれば、「日曜学校の目標をもし一言で言い表すなら、『祈りの生活へと導くこと』（自分の言葉で祈れるよ

うになる）となります。」（「本誌の基本方針」3より）に賛同してくださるのではないのでしょうか。そのためにこそ、神の御言葉を届けるのです。御言葉が、祈り（の言葉）を生み出す（与える）からです。子どもカテキズム問76に、「信じることは祈ること」とあります。それだけに、分級では、祭司としての牧会者として、子らの「ため」、また子らの立場に立って「共に」祈ることができたら、すでに分級は大成功なのです。

③王職

この、主の働きに即応することが、分級の最大の目標、つまり牧会の固有の視点となります。主イエスが子どもたちを顧み、治め、守っていて下さることを信じる教師は、主の「道具」となって、この御業、つまり、「牧会＝魂への配慮」をなすのです。

教師は、子どもたちに主イエスのご訪問をより深く受けさせるため、何よりも先ず、子どもたちのことを深く知りたくするはずで、彼らを知らずして、彼らの魂を配慮することはできないからです。ときには、子どもたちに手紙を書く、あるいは実際に家庭を訪問する必然性も生じてまいります。彼らと真実に「向き合うため」にです。このようにして既に、教師は主イエスのお働きをなぞるように働き、子どもたちのための小さな牧師（牧会者）となっているのです。

分級の教師とは、何よりも牧会者です。上述の①②③の働きを牧会者として重層的に担っているのが教師なのです。自分がそこで、何をしているのか、それを意識的になしえている人は、熟達した教師です。

牧会とは何か

①真の牧会者イエス

それなら、改めて問いましょう。「牧会」とは何でしょうか。御言葉を読みましょう。先ず、ヨハネによる福音書第10章11節「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨

てる。」そして、詩篇第23編1節「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。」さらに、エゼキエル書第34章12節「牧者が、自分の羊がかりちりになっているときに、その群れを探すように、わたしは自分の羊を探す。」

なかでも決定的に大切と思われるのは、マタイによる福音書第9章36節以下です。「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。また、深く憐れまれた。そこで、弟子たちに言われた。『収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。』」

ここで、主イエスは、一生懸命、預言者としての視点で働かれ、また牧会者としての視点で、魂の配慮ばかりか、肉体の配慮、癒しをしておられます。「牧会とは何か」と問うとき、主イエス・キリスト御自身、神御自身こそ、真の牧会者であられることを弁えることが大切です。

②牧会者のまなざしと心

それなら、真の牧者の目に、人間（子ども）たちはどのように映っているのでしょうか。ここで主イエスは、「群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれている」と見ておられます。子どもたちの現実、今、「弱り果ている」者として主の御目に映っているのです。そして「深く憐れ」んでおられます。これは、もともとの言葉の意味は、内臓をぎゅっつつかまれるかのような激しい痛みを表現するものです。

牧会者なる主イエスは、御自身の目に映る彼らの悲惨な姿を、私どもにも同じように見なさいと招いておられます。さらに、ご自身の痛切な御心をも私どもに分ち合って下さいます。

そのようにして私どもを、主の弟子、主の働きの同労者となること、つまり子どもたちを牧会することへと激しく招き、求めておられるのです。

ヨハネによる福音書第21章において、復活の主イエスは、裏切った罪人のペトロに、あらためて主への愛を問うて下さいました。そこで、彼に「わたしの羊を飼いなさい。」と言明されました。主は、私どもにも、子どもたちを主イエスの羊として「見る」ようにと招き、そして何よりも「飼う」ことへと命じておられるのです。

途中ですが、既に、紙数が尽きてしまいました。次回に譲ります。

ある人は、子どもたちには、まだ、主イエスの救い、牧会など必要ないのではないかなどと、まったくの見当違い！な発言をします。あるいは、心のどこかでそのような思いをぬぐいきれない教師はなお、おられるかもしれません。弱く、小さく、しかも罪人に他ならない子どもたちこそ、主イエスなしでは、健やかに生きれないのです。ですから主は、「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」（マルコによる福音書第10章14節）と憤られたのです。

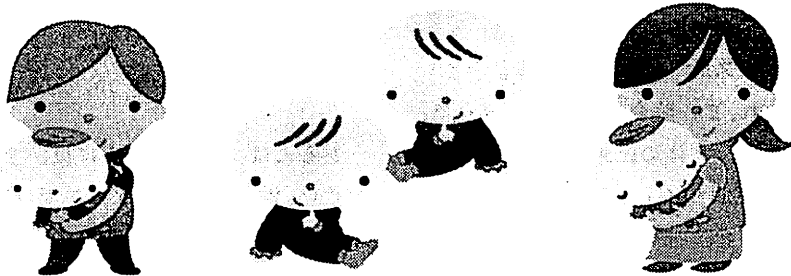
子どものとき受けた「傷」が、大人になって突る、つまり、自他を大きく傷つける問題を生じさせてしまうことになることは、明らか過ぎるほどではないでしょうか。

子どもたちを主のところに導く、私どもの働きがどれほど尊いものであるのかを思わざるを得ません。共に励みましょう！

教会学校教師研修会のご案内

主催 中部中会教育委員会

「魅力ある日曜学校を目指して —教師会の形成—」



日 時 11月23日（水・休日）

午前10時30分～3時30分

場 所 名古屋教会 西区浄心本通 3-37-1 TEL052-531-9768

主 題 講 演 「魅力ある日曜学校を目指して—教師会の形成—」
講 師 相馬伸郎（名古屋岩の上传道所宣教教師）

シンポジウム主題 「日曜学校教師会について」
発題者 漆崎教師・木下教師・伊藤治郎長老
（教育委員会委員）
岐阜加納教会・多治見教会日曜学校教師（予定）

日曜日の朝、地域子ども達は、どこで、何をしているのでしょうか……。
地域子どもたちには、主イエスや教会が必要でしょうか……。
主イエス御自身が、子どもたちを求めておられます。どうしたら、良いのでしょうか。
今年は、「充実した教師会の形成が鍵となる」との講師の声をもとに、皆で語り合います。
一人でも多くの日曜学校の奉仕者を、主が必要とされています！

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

テキスト エフェソの信徒への手紙4章12～16節

【宣教の裏り】

「こうして」(12)とあります。つまりこれは、前節において「使徒、預言者、福音宣教者、牧者、教師」が教会に与えられたことの理由が示されているのです。それは立場を代えて語りますと、彼らによって宣教された結果与えられるべき教会の姿が12節以降において語られているのです。

「聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき」(12)とある言葉は、新改訳聖書において、「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり」と訳されているとおり、福音宣教によって「聖なる者たちを整える」ことが第一のことであり、それに付随しその結果として、「奉仕の働きを行う者」とされ、「キリストのからだを建て上げる者」とされるのです。

【教会の目標】

続けて、聖なる者たちをどの様に整えていくのかということが語られます。「神の子に対する信仰と知識において一つのものとなる」(13)。これは、同じ聖書を用いても、解釈がバラバラであれば、教会は一つとなることが出来ないであり、教会を一つにするために、神の真理に基づいて教会において信仰告白が告白され、さらに教会に集う全ての者に対して教理教育がなされていく必要が、求められているのです。

こうした教理教育がなされていくことにより、教会が一つとなると同時に、一人一人のキリスト者が、「成熟した人間(全き人:口語訳)」となり、「キリストの満ちあふれる豊かさにまで成長するのです」。つまり神の子の知識と信仰が蓄えられ

ていくことにより、日々聖化の歩みを遂げていくのです。ただ、完全に罪のない「全き人」となるためには、神の国の完成を待たなければなりません、それに向かって歩み続け、日々近づけられていくのです。

【聖なる者として整えられることにより】

教理教育により神の子に相応しい信仰と知識が身に付けられていくことにより、未熟な者ではなくなる(14)のですが、それは同時に、教会やキリスト者に対してサタンが働きかけるどのような攻撃(偶像と異端、その他)に対しても防備することが出来るようにされていくのです(参照:エフェソ6:10～18)。

そして、神の真理に基づいた歩みを行う者とされ、神の愛を实践するものとされていくのです。これこそ頭であるキリストに向かっての歩みそのものであり、キリストに倣うことにより成し遂げられていくのです。

【補い合う教会】

また、信仰と知識における一致が保たれた上で、一人一人の信徒が成長させられていくことにより、それは結果として、キリストにより、体全体、つまりキリストの教会が、成長を遂げていく結果をもたらします。つまりキリストの体の一つ一つの部分であるキリスト者一人一人は、各々与えられた個性があり、賜物があります。これらは別々の働きをなしていくこととなりますが、それらが信仰と知識において一致した教会においては、互いに補い合い、協力し合うキリストの体を形成していくのです。(辻 幸宏)

カテキズム 子どもカテキズム問65

問65 神さまの戒めを守ることができない罪人が、
どうして十戒を喜んで生きることができるのですか。

答 聖霊なる神さまが、私たちを造り変えて
主イエス・キリストと一つに結び合わせ、
キリストの体なる教会として建て上げてくださいます。

私たちに、教会において、
罪から救い出され、十戒を喜んで生きる道が与えられています。

参考教理問答 『ハイデルベルク』64、『ウ信仰告白』第17章

問65と66の解説として、既に、2002年、第7号で試みていますので、ご参照くださいませ。今回は、なるべく重複しないようにと書き下ろしました。

十戒を喜んで生きる道については、既に問63で扱っています。しかし敢えて、重複をいとわず、しかもここでは、問いの中にも、答えの中にも、「十戒を喜んで生きる」という言葉が躍ります。信仰生活とは喜びの生活であるということが、このカテキズムの確信であるのです。その秘密、神秘、俗な表現で言えば、秘訣をたずねるのがこの箇所です。

エフェソの信徒への手紙第2章10節に、「わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。」とあります。口語訳では、「わたしたちは神の作品」と翻訳しました。この作品は、「キリスト・イエスにおいて」、言葉を換えれば、「キリスト・イエスと一つに結び合わせ」ということによってなされたものです。つまり、このあるがままの自分が、紛れもなく神の作品であり、神がそのように見てくださるのです。その神のまなざしをもって自分自身を見る目を開く教理、言わば明るい信仰へと導く教理がこの箇所なのです。

しかしそこで直ちに、一方の現実を見ざるを得ません。つまり、私どもには、十戒を生き抜くことができない弱さ、悲しみ、苦悶の只中にありま

す。むしろ、キリスト者だからこそ、知らされる悲しみ、苦しみがあるのです。

「聖徒の堅忍」の教えをここで思い起こしてください。私どもは自分の力で、神の作品になったわけではありませんし、作品を完成させる力を持っているわけでもありません。父なる神が、その御子において、聖霊によって、私どもを、神の子として「罪から救い」、保ち、つまり「喜んで生」かし、のみならず完成して下さるのです。神の作品は、三一の神の全力が注がれた傑作なのです。ですから、信仰の失敗を恐れて一步も踏み出さないような生き方ではなく、創造者、主権者なる神の選びを信じて、安心して、全力を注いで、喜んで努力して戦うことができるのです。

しかも、この御神の恵みの御業は、教会と「共に」、教会に「おいて」、教会を「通して」私どもに継続してなされるのです。つまり、キリスト・イエスと一つに結ばれた作品は、個としての作品である以上に、常に、キリストの体なる教会という大きな作品の一部としての作品なのです。キリスト者とは、徹底的に、共同体的な存在、神の民の一員なのです。聖化の歩みは、この民と共に歩む歩みであり、(問34参照)共にキリストの体として建て上げられる喜びに生きる道なのです。

キリストの御業のおかげで、もはや、十戒は、私どもを、「お前は神の作品ではない、駄作ではないか」とは、責め立てません。聖霊の御業のおかげで、私どもは、自分自身の将来を明るく望み、戦えるのです。 (相馬伸郎)

テキスト エフェソの信徒への手紙4章12～16節

カテキズム 子どもカテキズム問65

〔単元のねらい〕

十戒の解説の続きということで、まずは戒めを完全には守れなくても、主のみ栄えをあらわすに足る者としていただけていることを押さえたい。次に、子どもたちに、「教会では、一人一人が、そして自分も大切にしてもらえるんだ」との理解を持ってもらうことをねらいとしたい。

「二人は一人よりも勝っている」

これまで、神様が下さった戒めの一つ一つについて学んできました。

さて、ではその尊い戒めを完全に守れる人はいのでしょうか。そう、ただ一人だけおられます。私たちの救い主イエス様がその方です。けれども、イエス様を除くと、私たち全人類は誰一人として戒めを守ることが出来ません。戒めが求めていること、つまり神と人愛することに背いてばかりです。

そこで、一つ質問です。戒めに背いてばかりの私たちでも、主の栄光、つまりイエス様の素晴らしさをあらわすことが出来るのでしょうか……？

どうぞ安心して下さい。聖書はこの問いに「大丈夫、出来る」と答えてくれているからです。

その証聖句となるヨハネ17章を開いてみましょう。ここには、十字架に架かれる前にイエス様が祈られた、その祈りの言葉が記されています。イエス様は、祈りの中でこう言っておられます。「わたしは彼らによって栄光を受けました」(17:10)。イエス様から直々に栄光を受けたと評価してもらっているこの彼らとは誰のことでしょうか。この彼らとは、主イエス様の弟子たちのことです。主に従いながらも、この中で誰が一番偉いかと、謙遜とはまるで正反対の議論を繰り返した弟子たちです(マルコ9:34、ルカ22:24)。また、数時間後には皆そろって主を見捨てて逃げ出すことになる弟子たちです。しかし、主ははっきりと言っておられるのです。「わたしは彼らによって栄光を受けました」。主は彼らの罪や欠点を

ではおられません。罪や欠点はありつつも、主は彼らが喜び従って来たことにこそ目を留めて下さっているのです。主は、ご自分の弟子たちをその様に見て下さっているのです。

ですから、戒めに背いてばかりの私たちではありませんけれども、それでもイエス様が大好きで、しばしば失敗するのですけれども、それでもイエス様に喜んで従って行きたいと願い志している私たちにも、主はきっと言って下さいます。「わたしはあなたによって栄光を受けました」。

何と嬉しいことでしょう！

さて、私たちはどのようにしたら、主の栄光をますますあらわして行けるのでしょうか。それは、私たちが十戒を喜んで生きる者と益々なっていくことによってです(ヨハネ13:34～35,15:8)。

では、十戒を喜んで生きる者とますますなっていくために、私たちはどこに行ったらよいのでしょうか。どこで、私たちは義に生きる力を得ることが出来るのでしょうか。それは教会です。今、皆と顔を合わせ集っているこの場所こそ、私たちが常に来るべき所です。

そこで、次に教会について考えてみましょう。まず、教会とはどういう所でしょうか。教会はイエス様の恵みを特別豊かに受け取ることが出来る世界中で唯一の場所です。

イエス様は、私たちを教え、慰め、力づけるために、今もご自分の生きたみ声を私たちに聞かせて下さいます。私たちは主の語り掛けを聞くこと

が出来ます。そして、主がご自分のみ声を私たちの心に届けて下さるために選ばれた方法は、み言葉とその説き明かしをする人の言葉(説教)を用いるという方法でした(コリントー1:21)。また、イエス様は讃美と祈りを通して、私たちの心に平安と力を満たして下さいます。

このみ言葉、説教、讃美、祈り、これらが皆揃っているのはキリストの教会以外にはありません。

ですから丁度、喉の渴きを癒すために水のある場所に行くように、私たちは週ごとに教会とその礼拝に行かなくてはなりません。イエス様は、私たちの渴きを癒し、新しい力で満たすために教会を建て、働き人を備え、十字架のみ傷の残る両腕を広げて常に招いて下さっているのです。

さて、教会にはもう一つ大切なことがあります。それは、教会にはイエス様を信じる人、イエス様に喜び従っている人が必ずいるということです。イエス様を信じる人がいなくては、教会は成り立ちません。では、イエス様を信じる者同士はどういう関係にあるのでしょうか。

イエス様を信じる人は大人も子どもも皆、神様の子供です(ヨハネ1:12)。一人一人、神様に愛され守られ、時に懲らしめられ、しかし見捨てられることはありません。そして、イエス様を信じる者は、唯一人にいます天の父の子ども同士でありますから互いに兄弟姉妹です。皆互いに無くてはならない神の家族の一員です。バラバラであってはならない、元々親しく結び合わされた関係にあるのです。

私たちは、誰も一人ではやって行けません。仲間の助けが必要です。そして、教会には信仰の仲間がいます。及ばずながら、教会学校の先生もその一人です。

旧約聖書のコヘレトの言葉に次のように書かれています。「一人よりも二人が良い。共に労苦すれば、その報いは良い。倒れれば、一人がその友

を助け起こす。倒れても起こしてくれる友のない人は不幸だ。一人が攻められれば、二人でこれに対する。三つよりの糸は切れにくい」(4:9-12)。友がいることは、何と良いことでしょうか。

教会に集う一人一人は、互いにこの友となるために、イエス様によって集められたのです。互いに神の家族の一員だからです。

ですから、もしも、あなたが倒れてしまった時は助けを求めて声を上げて下さい。教会は、あなたを助け起こし、主の助けを共に祈るためにこそあるからです。間違っても、黙って教会を去るということはしないで下さい。それでは、残された者たちが深い悲しみに追いやられてしまうことになるからです。また、誰かが倒れているのを見付けたら、教会の仲間を呼んで下さい。力弱くとも皆で駆け付けましょう。一人では立ち向かえなくても、主のみ名によって力を合わせれば、きっと立ち向かえます。御名のみ栄えのため共に労苦しましょう。良い報いを与えると主が約束しておられるからです。

なるほど、教会は神様の戒めを完全には守れない者たちの集まりでもあります。そのため、時には酷いことも起こってきます。仲間割れをして、互いに悪口を言い合うことも起こります。富める者が貧しい人々に恥をかかせることも起こります(コリントー1:10~17, 11:17~22)。偽りの教えが入り込んで混乱することもあります(ガラテヤ1:6~9)。それでも、主イエス様は教会を通して、ご自分の栄光をあらわすことを良しとておられるのです。

ですから、私たちも互いに励まし合って教会に集い続けましょう。イエス様から恵みを一杯に受けて、信仰の仲間と共に進んで行きましょう。

イエス様は約束して下さいました。「二人または三人がわたしの名によって集まる所には、わたしもその中にいるのである」(マタイ18:20)。

(小野田雄二)

[今週の暗唱聖句] 一人が攻められれば、二人でこれに対する。

三つよりの糸は切れにくい。

コヘレトの言葉4章12節

〈ねらい〉

キリストの体として成長する喜び。

〈展開例〉

①キリストの体なる教会として共に成長する

生まれたばかりの赤ちゃんはまだ首がふらふらで目もよく見えません。でもお母さんのおっぱいを飲んでだんだん大きくなっていきます。首もしっかりしてきて、目もよく見えるようになってきます。もう少しすると立ったり歩いたりできるようになります。手や足も強くなり、しっかりしてきます。手や足や頭やおなかはみんなつながっているの、体全体が一緒に大きくなっていきます。

教会も同じです。神様の恵みによって一緒に大きくなっていきます。私たちは一緒に神様の御言葉を聴き、お祈りしたり賛美歌を歌ったりします。教会はキリストの体ですから、それぞれの部分が

一緒に強められ、一緒に大きくなっていくのです。

②一人でないことの強さと喜び

私たちは体のどこかが怪我をしたらすぐにお薬をぬったり、包帯を巻いたりします。怪我をしたところが早く治るように、手がお薬をぬったり、足が病院まで歩いたり、口がお薬を飲んだり、体のそれぞれの部分が助け合います。

教会の中で困っている人がいたら、教会の人たちはその人を助けてあげます。お祈りをしてあげます。誰かが倒れそうになったら、誰かが支えてあげるのです。私たちは一つの体だからです。

また、うれしいことがあったときには、一緒に喜んで喜びます。私たちは一つの体だからです。

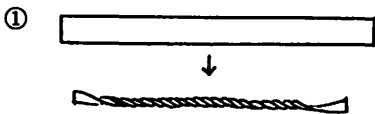
〈折り〉(輪になって手をつないでお祈りしよう)

一緒に礼拝し、祈ったりできる教会のお友達が与えられていることを感謝します。みんなが仲良く助け合うことができますように。

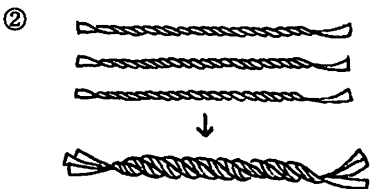
三つよりの紙テープは切れにくい？

三つよりの糸は切れにくい(コヘレトの言葉4章12節)の実験

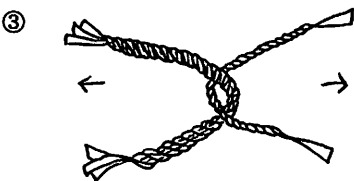
まず、同じ長さの紙テープを何本か用意する。(ティッシュペーパーでも代用できます)



紙テープの1本だけをねじって強くする



3本の紙テープをそれぞれ1本ずつねじり、3本合わせてさらにねじって1本の太いこよりを作る



①と②で紙相撲をしてみよう。3本のほうが強いかな。どっちが切れてしまうかやってみよう。

さらに……どっちが強いかわかったら、1本ずつので紙相撲の勝ち抜きなどをして遊ぼう！

〈聖書のお話を確認してみよう〉

- ①キリストの体とは何のこと？（→教会）
- ②体はバラバラになってもいい？（→よくない）
- ③教会という体はどのようにして一つになれる？
（→イエスさまに対する同じ信仰と知識によって）
- ④体である教会の頭はだれ？（→キリスト）
- ⑤体の部分はどれも同じ働きをする？（→それぞれ違った働きをする）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ①戒めを守れない私たちを変えてくださるのはだれ？（→聖霊なる神さま）
- ②聖霊なる神さまは私たちをだれと結び合わせてくださる？（→イエスさま）
- ③イエスさまと結ばれているなら一人でいてもいい？（→教会でみんなと生きる）
- ④戒めはいやいや守るもの？（→喜んで守ることができるもの）

〈考えてみよう〉

この半年で、身長はどれぐらい伸びたでしょうか。体重はどれぐらい増えたでしょうか。みんなはこれからもどんどん大きくなっていくと思います。それでは、この半年、教会学校ではどれぐらいのことを学べたでしょうか。新しく知ったことや、覚えた聖書の言葉など、言えるでしょうか。また、お祈りができるようになったとか、お友達と仲良くできるようになったとか、教会学校で学んだことを守れるようになったことはあるでしょうか。まだまだできないこともたくさんあるかもしれませんが、体がいきなり大人の人のように大きくはならないように、信仰も少しずつ成長していきます。これからも教会学校で聖書のお話を聞き、みんなと一緒に成長していきましょう。

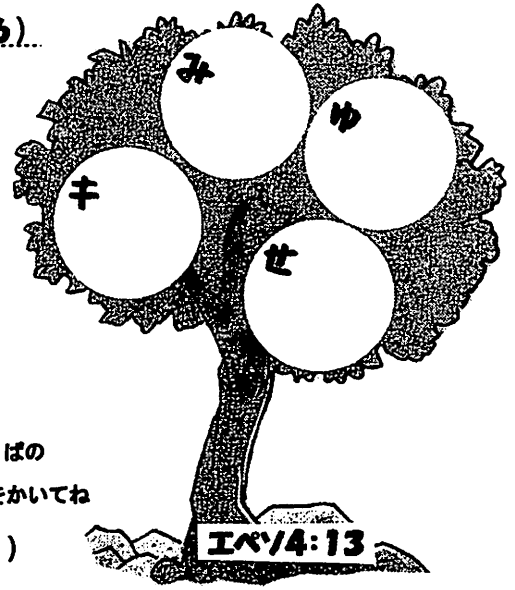
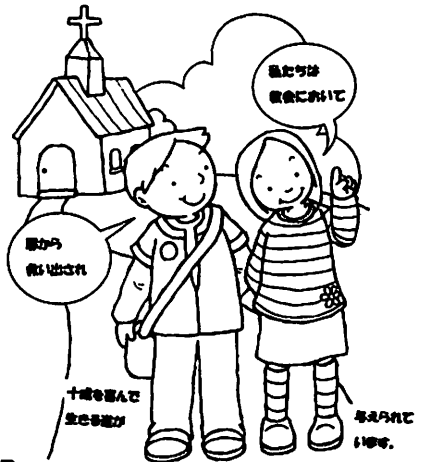
〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。今日も教会学校に来て、みんなて神さまを礼拝することができてありがとうございます。これからもイエスさまのことをたくさん知って、大きく成長していくことができるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



✂ ワークシート ✂

✚ 聖書をひらいて (エペソ4:12~16)



✚ 考えてみよう (質問に答えてあげてね！)

- ☒ ぼくは、十戒を守ろうと思っても、弱い心に負けてしまってなかなか守ることができません。こんなボクは、もう日曜学校に、行かない方がいいのかな……？」(Aくんのつぶやき) エペソ4:12-13
- ☒ 「わたしの友達みんな、テレビや雑誌にのっている「占い」を信じています。ワタシも、時々は、信じていいのかな……？」(Bちゃんの相談) エペソ4:14-15

✚ 言ってみよう

問 65 神さまの戒めを守るのでできない罪人が、どうして十戒を喜んで生きることができるのですか？

答え 聖霊なる神さまが、私たちが造り変えて、主イエスキリストと一つに結び合わせ、キリストの体なる教会として建てあげてくださいます。私たちは教会において、罪から救い出され、十戒を喜んで生きる道が与えられています。

✚ 今週の暗唱聖句

一人がせめられれば、二人でこれに対する。三つよりの糸は切れにくい。
コヘトの言葉 4章12節

【目標】

教会がキリストの体と言われるのはどういうことなのかを考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？(分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である)

②改めて御言葉に取り組む

→エフェソの信徒への手紙4章12～16節を改めて生徒と読む。

【ポイント】

御言葉から、自分が今集められている教会とは、どのような交わりなのかを確認したい。平和のきずなで結ばれる、霊による一致。一つの希望にあずかり、一人の主を一つの信仰によって信じている(4章3～5節)。歯車が噛み合い、分に応じて働き、補い合い、一致した成長を目指し、一つの原因力である愛によって作り上げられていく交わり(16節)が、キリストの体なる教会であると言われている。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとって、キリストの体なる教会の一部とされている体験、経験、実感があるかどうか？ それを生徒と分かち合う。

Q. 仮に自分が聖書を手にとってそれを読んで理解するには、少なくとも自分の体のどこどこ結び付きが必要でしょうか？ 自分の体を見ながら考えてみましょう。

Q. 教会は、キリストによって組み合わされた体です。そのように見えますか？

Q. 体の一番重要な頭は、牧師や長老ではなくキリストであると言われています。このことは新しい発見でしたか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 自分がというキリストの体の一部になるとは、具体的にどういうことでしょうか？

Q. 教会というキリストの体の中で、自分はどんな働きができそうですか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト エフェソの信徒への手紙4章17～24節

〔異邦人の歩み〕

パウロは「異邦人と同じように歩んではなりません」(17)と語ります。キリストを信じ、キリスト者となった者は、霊的なイスラエルであり、主なる神の救いを知らない異邦人とは区別されています。

主なる神を知らない異邦人の歩みについて、パウロは6つ語っています(17～19)。

- ①愚かな(むなしい：口語訳、新改訳)考えに従って歩む。
- ②知性は暗い。
- ③無知で心が頑なである。
- ④神から遠く離れている。
- ⑤無感覚で放縱な生活をする。
- ⑥あらゆるふしだらな行いにふける。

つまり真理は、創造主であられ贖い主であり、全知全能なる主なる神にあります。そして、主なる神の被造物である人間は、この主なる神によって生かされており、主に栄光を帰し、喜んで生きることこそ、人の第一の目的(ウエストミンスター小教理問1)なのです。

しかし、主なる神を知らず、信じることなく歩むことにより、主なる神がお示し下さる知恵がなく、本来与えられるべき喜びもないために、むなしく(愚かに)なるのです①。

そして②～⑥において並列されている事柄は、真理である主なる神からの知恵である聖書や、そこから導き出される教理の教えに聞くことがない無知の故になされる様々な行為です。

〔キリストについて学ぶ〕

しかし、「あなたがた＝キリスト者」(20)は、すでに、「キリストについて聞き、キリストに結ばれて教えられ、真理がイエスの内にあるとおりに学んだ」のです(21)。つまり、キリストについて学ぶことにより、私たち人間は、むなしい(愚かな)生活から脱却し、被造物として本来あるべき生きる目的を知り、キリストと結ばれていることを確認することが出来るのです。

このキリストについての知識を得るために、主は、私たちに旧新約聖書をお与え下さったのです。そして私たちがこの聖書を学ぶことにより、キリストについての知識を得ることが出来、信仰と生活の正しい知恵が与えられていくのです。

「盲人が盲人の道案内をすることができようか。二人とも穴に落ち込みはしないか。弟子は師にまさるものではない。しかし、だれでも、十分に修行を積めば、その師のようになれる」(ルカ6：39-40)のです。つまり、聖書こそ、私たちが賢く、正しく生き、神の命を得るために道案内をする唯一のものであり、この世の知恵においては得ることの出来ないことなのです。

〔新しい生き方を求めよ〕

だからこそ、私たちは、正しい道を歩むことが出来ずに、滅びへ向かっていた以前の様な生き方(古い人)を脱ぎ捨て、神が人を創造して下さった時に神にかたどりつくられたように、主なる神の被造物として本来あるべき姿を取り戻し、神の命にいたるように、神の御言葉である聖書に聞き従う、新しい生き方(新しい人を着ること)が、求められているのです。(辻 幸宏)

カテキズム 子どもカテキズム問66

問66 罪から救い出されるために、

神さまが私たちに求めておられることは何ですか。

答 イエスさまが勝ち取ってくださった祝福を与えていただくために、

教会に与えられた恵みの手段を用いて、

イエスさまを信じ、いのちに至る悔い改めをすることです。

参考教理問答 『ハイデルベルク』65、『ウ信仰告白』第14章

「神さまがわたしたちに求めておられること」を問う、その前提として、神こそが、私共を罪から救い出したいと願い、求めておられるという根源的事実を常に、鮮やかにわきまえていたいと思います。神の御心は、私どもを罪から救い、神の子とすることです。これが、「イエスさまが勝ち取ってくださった祝福」なのです。この祝福の中に招き、現実にあずからせるために、神は、私共にもこれを求めるようにと、求めていて下さるのです。

この「祝福」を勝ち取る手続きは、既に、御子イエス・キリストにおける贖罪の事業（御業）によって成し遂げられています。御父が計画し、聖霊の導きと助けとによって、御子が実現したもうたのです。つまり、三一の神の全力を傾注しての御業であります。

聖霊なる神は、この御子の事業を、今、この私に、当てはめてくださる救い主です。聖霊のお働きにあずかるとき、私どもの中に、信仰と悔い改めとが与えられます。信仰と悔い改めを通して、私どもは主イエス・キリストとの交わり、結合へと導き入れられるのです。（ヘブライ人への手紙第9章14節参照「永遠の“霊”によって、～生ける神を礼拝するようにさせないでしょうか。）ですから、第三部、「生活の道」は、聖霊の御業をたずねる道となり、その三「教会に生きる道」は、聖霊論の枠組みの中で語られてまいります。

そうであれば、この單元において、キリスト者として言わば、切なるうめきを伴う問いが発せられてしかるべきでしょう。「どうしたら、聖霊の恵みに深くあずかることができるのでしょうか。どうしたら、聖霊に満たされた生き生きとした、

喜びにあふれた信仰生活、教会生活へと飛躍できるのでしょうか。保ち続けることができるのでしょうか……」

第一世代のキリスト者は、比較的、このような「体験的」祝福を受けている人は多いように思われます。その点、契約の子たちには、「救いの体験」なるものははっきりせず、それだけに、信仰に徹底することが困難となる事例は少なくありません。もとより、これは、第一世代であっても同じ課題があります。

実はそこで、しばしば諸教会は、あやしげな、つまり人間的な、宗教的な操作をもって聖霊体験を創出することへと転落、逸脱いたしました。しかし私ども改革派教会は、聖書の教えに固く立ちます。「教会に与えられた恵みの（外的）手段を用いて」、信仰と悔い改めという「恵みの（内的）手段」にあずからせて頂けばよいのです。外的手段とは、神がキリストにおいて定めてくださった「全規定」（ウエストミンスター大教理問答問154）であり、特に、「御言葉と礼典と祈り」です。

喜びの生活は、神こそが私どもに与えることを求めておられる恵みです。何よりも、それは、神の主権の御業によるのですから、主の設定された道をたどれば良いのです。

礼拝式と分級、毎回毎回がまさに真剣勝負です。教師自ら、祈りをもって、聖霊に満たされることを求め、かつ信じて子らに向き合ひましょう。同時に、一発勝負ではありませんから、こつこつと、聖霊が既に子らに働いておられることを信じ、そのように子らを見てあげて、奉仕に与りたいものです。

（相馬伸郎）

テキスト エフェソの信徒への手紙4章17～24節

カテキズム 子どもカテキズム問66

(単元のねらい)

信仰生活の鍵は「悔い改め」にあると思われます。そして、悔い改めに進むためには、自分自身の無力さを悟ることがどうしても必要です。今回の単元では、自分自身の無力さを悟ることと、無力であり、時にずるく醜くあっても、それでも義に生きるように招かれていること、この二つを伝えることをねらいとしたい。

「新しい人を身に着けよ」

10月になり、だいぶ涼しくなってきました。もう夏服ではなく、暖かい服が必要です。

さて、減多にないことでしょうかけれども、皆も新しい服を買ってもらったことがあることでしょうか。真新しい服は、バリッとしていて、良い匂いもします。最初に袖を通す時には何となくワクワクして、ボタンを留め終わると背筋がシャキ!としてきます。

実は、聖書は私たちに古い人を脱ぎ捨てて、新しい人を着なさいと命じているのです(エフェソ4:17～24)。

えっ、新しい人はどこに売っているのかって?

新しい人は、洋服屋さんにも、どこにも売っていません。新しい人とは、神と人とを愛し通された、最も清く正しいイエス様のことだからです。

イエス様を着るの? その通りです。イエス様は、御名を呼び求める一人一人といつも共にいて下さいます。そのイエス様に袖を通すかのように、いつもピタッとくっついていなさい。イエス様をいつも想っていなさい、と聖書は私たちに命じているのです。そして、その様にますます出来たならば、新しい服に袖を通す時以上に、心はワクワク、背筋はシャキ!としてきます。たとえ辛いことが起って来ても、義に生きる力が満ち溢れて来ます。神様は、その様に約束して下さいなのです(ヘブライ12:3)。

では、この聖書の教えをより良く理解するために、一つの事件を取り上げてみましょう。その事

件には、古い人——つまり、罪に支配されている、本性の腐敗した生まれながらの人——を着込んだ人たちがかりが登場して来ます。その事件を手掛かりに、新しい人、イエス様を着るということがどういうことかを考えてみたいと思います。

旧約聖書の列王記上21章を開けて下さい。

ここには、北イスラエル王国7代目の王アハブ王の記録が記されています。

ある日のこと、アハブ王はたいへん不機嫌になり、食事も取らずにふて寝していました。イズレエル人ナボトが王の求めを拒否したからです(1-4)。心配してやって来た妻イゼベルは、事情を聞くと王に言いました。「今イスラエルを支配しているのはあなたです。起きて食事をし、元気を出して下さい。私がイズレエル人ナボトのぶどう畑を手に入れて上げましょう」。

イゼベルはどの様にしてナボトのぶどう畑を手に入れようというのでしょうか。8節から、彼女の計画と、それが実行に移されて行った次第が記されます。

イゼベルは王の印を押した手紙をナボトのいる町に住む長老と貴族に送ります。手紙にはこう書かれていました。「断食を布告し、ナボトを民の最前列に座らせよ。ならず者を二人彼に向かって座らせ、ナボトが神と王とを呪った、と証言させよ。こうしてナボトを引き出し、石で打ち殺せ」。手紙を受け取った町の人々はどうしたのでしょうか。

「その町の人々、その町に住む長老と貴族たちはイゼベルが命じた通り、すなわち彼女が手紙で彼らに書き送った通りに行った」(11)。

こうして、断食が布告されて後、ナボトは公の法廷に引き立てられ、ならず者たちの偽りの証言によって有罪の判決が下され、町の外に引き出され、石で打ち殺されてしまうのでした。イゼベルはナボトの死の知らせを受けて王に言います。「さあ、あのぶどう畑を自分のものにして下さい。ナボトはもう生きていません。死んだのです」。

何とも痛ましい、ぞっとする事件です。人のぶどう畑を手に入れるため、その所有者に無実の罪を着せ、公の処刑により命まで奪い去り、そして、誰もそれを止めようとしなかったからです。

この犯罪の中心人物イゼベルは残忍な人です。しかし、悪いのは彼女一人ではありません。いったい、町の人たちや長老たちはどうしたのでしょうか。彼らはナボトが無実であることを知っています。ならず者たちの証言が嘘であることもはっきり知っています。しかし、誰も「王様、それはいけない」と声を上げてはいないのです。確かに、送られてきた手紙には王の印が押してありました。もしも言い逆らったのなら、死をもって罰せられるかもしれません。彼らは従順に命じられた通りのことを行いました。

この事件の登場人物の中で、「この人はいいなあ」と感じられる人がいるのでしょうか。いいえ、いません。ナボトを除く全員、罪がどれ程醜いかは教えてくれますが、それだけです。

さて、ではもしも、この町に自分がいたならば、どうしたでしょうか。「王様、間違っています！」と言えたでしょうか。残念ながらそうは思えません。「仕方ないよ、相手は王様だ。ナボトは本当に気の毒だとは思うよ、だけど他にどうしろというんだ。恨むならイゼベルを恨んでくれよ……」。こう言って裁判の傍聴席に何食わぬ顔で座り、偽りの証言に、そうだ、そうだと言いつつやり過ごそ

うとする自分、必ずやそうするであろう自分が思い描けてしまいます。私も醜い有罪者です。

古い人を着込んだ人たちとは、この人たちのことです。ナボト殺人事件の関係者一同と、彼らと同じく抗議の声を上げることの出来ない私たちのことです。

主イエス様は、そんな私たちを救し、きよめ、新しい命に生きる者とするために、十字架に架かって死なれ、そして復活して下さったのです。イエス様を信じる信仰を与えられている者は、もう既に古い人を脱ぎ捨て新しい人を着せていただいているのです。今はまだ、体にピタッとしていないかもしれません。しかし、イエス様をしっかりと着込んだのなら、人は変わることが出来ます。あの偽りの裁判の場でも、きっと声を上げることが出来ます。「ナボトを殺してはならない!」と。

主イエス様をしっかりと着せていただいていた使徒たちは勇敢でした。国家権力による宣教禁止令にも、脅かしにも屈することがありません。大胆に宣教を続けました。捕らえられ尋問された時も使徒たちは答えました。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」。そして、御名のために辱めを受けるほどの者にされたことを彼らは喜んだのです(使徒5:17~42)。

一人一人悔い改めましょう。

罪を悲しみ憎んで捨て、自分には良いことを成し遂げる力のないことを認めて、主イエス様のもとに立ち返り、力ときよさを着せていただけるよう、主に祈り求めましょう。イエス様を信じる信仰を与えられた者たちが、黙ったままでいてはならないからです。神様は、何と既に、おくびょうの霊ではない、力と愛と思慮分別の霊を私たちに与えて下さっています(テモテニ1:7)。背筋をシャキ!と伸ばして、共に進んで参りましょう。

(小野田雄二)

[今週の暗唱聖句] テモテへの手紙二1章7節

神は、おくびょうの霊ではなく、
力と愛と思慮分別の霊を私たちにくださったのです。

〈ねらい〉

古い人を脱ぎ捨て、新しい人を着る。

〈展開例〉

①古い人とは？

買ったばかりのお洋服は最初はピカピカですが、ずっと着ているとだんだん古くなって傷んできます。ボタンが取れたり穴があいてしまったりします。

そんな古いお洋服より新しいお洋服の方が私たちは好きですよ。

でもいくら新しいきれいなお洋服を着ていても、心が汚れていたらどうでしょう。それは……

- ・自分勝手、わがまま。
- ・何が正しいことなのかわからない。
- ・ごめんなさいと素直にあやまらない。
- ・悪いことをしても平気。

のような心のことです。だれでも新しく生まれなければ、このような古い心のままです。あなたはどうか。おかあさんから叱られたら、素直にごめんなさいといえるかな。わがままをいってお母さんを困らせたことはないかな。お友達が悲しんでいるのに知らん顔していることはないかな。このような人を古い人といいます。

②新しい人を着るとは？

そんな古い自分のままじゃいやだよ。でも古い人を脱ぎ捨てるためには、自分が神様の目からは、ポロポロなんだとわかることが大切なんです。こんな自分はいやだなあ、脱いでしまいたいなあと思わなければ、新しい人を着たいとは思わないでしょう。

どんなに自分で穴をふさごうと思っても、すぐに破れたり、また別の穴があいてしまいます。そんな古い自分を脱ぎ捨てて、イエス様がくださる新しい人を着たいと思いませんか。

イエス様を信じると、神様は私たちにお友達に優しくできる心、悪いことを憎む心を与えてくださいます。神様の喜ばれることが何なのかを教えてください。

イエス様によって新しい人につくりかえていただきますよう。

〈折り〉

古い人を脱ぎ捨て、イエス様のくださる新しい人を着ることができるよう。大好きなイエス様に似たものとなることができますように。

すてきにファッションショー (図版は124ページに掲載しています。)

用意するもの

- ・ゴミ袋 (空色・ピンクなどカラフルな色の方がよい)
- ・ハサミ・腰に巻くひも・両面テープ (またはセロテープ)
- ・飾り (あらかじめ作っておいたものを両面テープかセロテープを輪にしたものでつける)

- ① ゴミ袋の底に首をとおす穴をあける。子どもの体に合わせて両端、すそを切っておく。
- ② 飾りにするものを用意しておく。(材料は紙・リボン・フェルト・布など)
ポケット・模様を切り抜いたもの・リボン・ネクタイ・えり・ボタンなどを作っておく
- ③ 子どもたちにまずゴミ袋を頭からかぶってもらい、自分で服にいろいろな飾りをつけてステキな服にアレンジする。腰をひもで縛ると服らしくなる。ゴミ袋の余った部分を切って襟やフリルなどを作ってもよい。
- ④ できたら一人ずつファッションショーをする。

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ① 神さまから遠く離れていることを何と言う？
(→罪)
- ② そのような罪の中にある人は新しい人、古い人？ (→古い人)
- ③ 神さまの近くに行くためにはだれのことを学ばなければならない？ (→イエスさま)
- ④ イエスさまは古い人？ (→新しい人)
- ④ イエスさまを身に着けるとはどういうこと？
(→イエスさまを信じて罪を悔い改め、イエスさまと一つになること)

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ① イエスさまの祝福を私たちに与えてくださるのはだれ？ (→聖霊なる神さま)
- ② 聖霊なる神さまが働いてくださるといことは、私たちは何もしなくていいということ？ (→ちがう)
- ③ 神さまは私たちに何をを用いるように求めておられる？ (→恵みの手段)
- ④ 恵みの手段を用いて何をする？ (→イエスさまを信じて、悔い改めをすること)
- ⑤ それは自分だけの力をするの？ (→聖霊なる神さまが働いてくださることによってできる)

〈考えてみよう〉

古い人とは、どういう人のことでしょうか。具体的に考えてみましょう。神さまなんか知らないと言ってしまうこと(無知)、お父さんやお母さんの言うことを聞かずにわがままでいること(かたくなさ)、友達の気持ちが分からないままいじわるをしてしまうこと(無感覚)など、いろいろあるでしょう。昨日までの自分にそういうところはなかったでしょうか。もしあったなら、悔い改めて、神さまに、またお友達に、ごめんなさいと言いましょ。そして、昨日の服は脱いで今日は新しい服を着ているように、今、イエスさまという新しい服を身に着けましょ。心からイエスさまを信じて新しい一週間を過ごましょ。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。私たちの悪い心や行いを、どうかゆるしてください。イエスさまを信じて、新しい心で、聖書の言葉に従って歩いていくことができますように。どうぞお守りください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



✂ ワークシート ✂

✚ 聖書をひらいて (エペソ4:17~24) (口の中に、みことばを入れてね)



ほろびに向かっている

□□□□□を□□□□、

心の底から新たにされて、

神にかたどって造られた

□□□□□□□□を□□□□、



✚ 考えてみよう

- ①聖書は、すべて どなたを指し示していますか？ (エペソ4:20)(ヨハネ5:39)
- ②その方は、ぼくたち、わたしたちに何を望んでいますか？

✚ 直ってみよう

問 66
罪から救い出されるために
神さまが私たちに求めてお
られることは何ですか？

答え イエスさまが勝ち取ってくださった祝福を
あたえていただくために、教会にあたえ
られた「恵みの手段」を用いて、イエスさ
まを信じ、命にいたる悔い改めをすること
です。

✚ やってみよう

10月に入り、衣替えの季節になりました。イエスさまを信じる信仰を与えられている私たちは、もうす
でに古い人を脱ぎ捨てて新しい人を着させていただいているのです。今はまだブカブカかもしれません。
でも、大丈夫！イエスさまの御言葉の糧をいただいて成長します。「おくびょうの霊ではなく、力と愛と
思慮分別の霊」を与えられているのですから。食欲の秋、読書の秋……どんな秋にしますか？話してね。

✚ 今週の暗唱聖句

神は、おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊を
わたしたちにくださったのです。 テモテの手紙二1章7節

【目標】

どういう人が、キリストの体なる教会を構成するのか考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？(分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である)

②改めて御言葉に取り組む

→エフェソの信徒への手紙4章17～24節を改めて生徒と読む。

【ポイント】

キリストの体なる教会には、ひとつの統一されたユニホームがある。それはキリストによる新しい人という共通のユニホームである。古い人とは、キリストを知る以前の生き方、考え方、犯している罪である。新しい人とは、25節以下に要約されているように、何が主に喜ばれるかをいつも考えて、あらゆることを主に感謝して生きる人のことを指す。その生き方のガイド・道筋となるのが、聖書であり、祈りであり、礼典である。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身にとっての、「神にかたどって造られた新しい人」を身に着けることによる祝福を生徒と分かち合う。

Q. 「古い人を脱ぎ捨てる」(22節)とは、どういうことでしょうか？ どんな自分を捨てることでしょうか？

Q. 「新しい人を身に着ける」ということは、どうすれば可能ですか？ それはファッションセンスを磨いたり、ダイエットをしたりして見栄えを良くすることで身に付けられるものでしょうか？ 何が変わる必要があるのでしょうか？

Q. 教会に集まっている人や先生たちの共通点は？ 皆が身に着けている共通のユニホームとは何でしょうか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 自分にとっての古い人とは、自分の中のどんな部分だと思えますか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト 使徒言行録26章12～18節

このパウロの回心の記事は、他の二つのもの（使徒9：1～19、22：6～16）と比べると一番短いものです。しかし、他のところには見られない点もいくつかあります。

1. 光の中に顕れる主

他の二つのものでもそうですが、主イエス・キリストは光の中に顕れます。しかし、このところではパウロの同行者も倒れるほどの強烈な光であったことが記されています。その強烈な光の中に主は顕現なさるのです。その中で、パウロだけが主の語りかけを聞くのです。その語りかけは主御自身が用いておられたであろう「ヘブル語（おそらくアラム語）」によってなされています。まさに主の呼びかけがそこでなされたのです。

2. とげの付いた棒をけると、ひどい目に遭う

おそらくこの言葉は、格言や教訓の一つだと思われれます。当時の農夫はとげの付いた棒で牛を御していたそうです。牛は逆らえば痛い思いをしなければならなかったのです。そのようにパウロがこれ以上逆らい続けて、御者のとげのある棒を蹴れば、パウロ自身が痛い目に遭うだろうということです。つまり、キリストに対するあらゆる反抗は致命的であり、また無益であるということを示しているのです。それによって、彼が迫害を繰り返すことで、自らを痛めつけている事実を明かに示しているのです。

3. 主による派遣

パウロの「主よ、あなたはどなたですか」との問に対して、天の声は「あなたが迫害しているイエスである」と答えます。主と教会の一体的関係がここで示されています。そして、主の教会を迫害することは、主を迫害することだということが

明かにされているのです。言い換えれば、パウロはキリストを迫害するキリストの敵であったのです。

その敵であったパウロに「起き上がれ。自分の足で立て。」と主は命じます。これは主の奉仕者として生きることへの召命です。しかも主の復活の証人として、他の使徒たち同様にキリストの顕現を目撃した証人として立てられ、復活の使信を伝える者へと召されたのです。

この召しに際してパウロは自分の「民と異邦人の中から救い出」され、「彼らのもとに違わ」されました。彼はこの時、この世から救われ、この世に派遣されたのです。この時から彼はキリストを迫害するためのユダヤ教の使者から、キリストを証しするために神様に違わされた者となったのです。

4. 闇から光に

18節にパウロが違わされて行く働きがどのような結果をもたらすのかが記されています。これは神様がキリストを通して私たちになしてくださる救いのみ業そのものです。

第一に罪によって閉じられた目が開かれます。第二に罪の闇のなかを手探りで進み、行くべき方向すらも定まらなかった状態から光の中に移されます。第三に罪の支配、罪の奴隷の状態から解放され、キリストによって神様のみもとに立ちかえらされます。そして、信仰が与えられ、罪の赦しが与えられ、神の子とされ恵みの分け前、つまり御国を相続する者とされる祝福を受けるのです。

これは罪の中に留まっている限り与えられることのない真の命の豊かな喜びであり、キリストにあって、信仰と悔い改めが与えられて初めて得ることのできるものなのです。（春名義行）

カテキズム 子どもカテキズム問67

問67 信仰と悔い改めとは何ですか。

答 聖霊のお働きによって与えられる、救いの恵みです。

イエスさまを救い主として受け入れ、信頼することと、
罪を認め、罪を憎み、神さまに向かって歩むことです。

証拠聖句 使徒11：18、ヨハネ16：8、コリント一12：3

参考教理問答 『ウ信仰告白』第15章、『ウ小教理』86,87

1. 聖霊の働きによって

聖霊は、キリストが十字架の死と復活によって獲得して下さった贖いの恵みを、私たちに与えてくださいます。

聖霊は、罪と、罪過の内に死んでいる者を新しく生まれ変わらせます。神は、新しく生まれ変わらせた者（再生した者）を信仰と悔い改めに導きます。

2. 信仰

信仰は、神からの恵みであって、聖霊が、御言葉の朗読と御言葉の説教を通して罪人の魂のうちに生じさせて下さるものです。「事実あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは自らの力によるのではなく、神の賜物です。」(エフェソ2：8)

まず、信仰とは、キリストへの信仰です。聖書において、神がキリストを私たちの唯一の救い主であると教えておられる、つまり、福音において提供されているままに、キリストを受け入れ、信じる信仰です。「実に信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。」(ローマ10：17) 自分の救いについて、

キリストのみを信頼し、彼を愛することです。

3. 悔い改め

悔い改めも、神によって与えられる救いの恵みです。本来、私たち、生まれながらの自然のままの人間は、霊的な事柄について受け入れませんし、自分の罪を認めることはできません。「自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊によって初めて判断できるからです。」(コリント一2：14)

救いに至る信仰は、罪を悔いる信仰であり、命に至る悔い改めは、信仰による悔い改めなのです。

聖霊が、罪人の私たちの心を捉え、開いて、イエス・キリストの十字架の死と復活による贖いの恵みについて理解させて下さるとき、私たちは、真に自分の罪を憎み、悲しむようになります。

悔い改めは、単なる後悔とは異なります。悔い改めとは、方向転換です。これまで、神に背を向けて生きてきた生き方から、神の方に向き直って、罪に背を向けて、キリストに信頼し、キリストに仕えて生きる生き方へと転換することなのです。

(久保浩文)

テキスト 使徒言行録26章12～18節
カテキズム 子どもカテキズム問67

〔単元のねらい〕

私たちの人生において必要なものとして信仰と悔い改めを挙げる。パウロの回心経験を通して、信仰とは主に従うこと、悔い改めとは自らが神様の背く罪人であることを認め、神様に立ち返る決意をすることであることを示す。そして両者の共通の基盤として、神様への絶対的な信頼があること、信仰も悔い改めも神様から与えられた恵みであることを確かめ、主に委ねる信仰へと導く。

「神様に向かって歩む」

〈導入〉まず、聖書のエピソードを頭に入れることで、全体のイメージを付ける。

皆さん。おはようございます。今日も聖書のお話を読んで参りたいと思います。今日は、皆さんも良く知っているパウロさんのお話を読んで参りましょう。

イエス様のことを伝えていたパウロさんは、ユダヤの祭司長たちに嫉まれて、捕まえられ、裁判にかけられました。パウロさんはそこで、王に自分がどうしてイエス様を信じるようになったか話し始めました。

元々パウロさんは、イエス様を信じる人たちに反対して、イエス様を信じる人たちを捕まえていました。イエス様を信じるのが間違いで、悪いことだと思っていたのです。イエス様を信じるのが悪いことなのですから、一生懸命イエス様を信じる人たちを捕まえることが、善いこと、正しいことだと思っていたのです。ところが、そうやって、イエス様を信じる人たちを捕まえようとダマスコの町に向う途中で、まぶしい光がパウロさんを照しました。そしてその光の中からイエス様がパウロさんに語りかけてきたのです。その時に、パウロさんはわかったんです。自分が一番正しいと思ってやっていたのですが、実は全く間違っていたのです。

〈展開1〉聖書から離れ、具体的に自分自身が罪人であることを理解させる。

パウロさんだけでなく、私たちは、心の中にどうしても無くすことの出来ない悪い思いが残っています。その私たちが自分だけでどんなに善いことをしようとしても、どうしても間違っていること、悪いことをしてしまうのです。そんな私たちが、正しいこと、善いことをするにはどうしたらよいのでしょうか。この世の中で、一番善いお方、決して罪を犯さない正しいお方は神様だけです。ですから私たち人間が正しい善い人になるためには、神様が教えて下さるようにするのが一番よい方法なのです。

ところが、パウロさんが自分のことを正しいと思い込んでいたように、私たちは自分が一番正しいと思い込んでしまっています。誰でも、自分が正しいと思っている時に「あなたそれは間違っているよ、こうするのが正しいんだよ」なんて言われると、腹が立ちます。そんなことを言われたら、それがどんなに正しかったとしても、むしろ聞きたくなくなってしまうでしょう。私たちも神様から「間違っていますよ。こうしなければいけませんよ」と言われると腹が立ってくるんです。「そんなことない、僕のやり方が正しいんだ！」とか「そのやり方で善くなるかどうか分からないじゃないか！」とか、「逆ギレ」してしまうんですね。

でも本当はやっぱり神様が一番正しいのです。

私たちは自分が正しいと思っていても、神様と比べてみると、神様がおっしゃることの方が正しいのですし、神様が「あなたは間違っていますよ」とおっしゃるのは、その通り私たちが間違っているのです。

〈展開2〉再びパウロの事例に戻りながら、悔い改めの必要を確認し、信仰へと導く。

そこで私たちは、神様の前できちんと、自分が間違っていることを認めなくてはなりません。それが「悔い改め」です。ただ間違っていることを認めるだけではありません。皆さんも叱られた時に言われたことがあるかもしれません。「ただごめんなさいじゃなくて、一度叱られたことはもう二度と繰り返さないようにしなきゃダメよ」。そうなんです。悔い改めるといのは、ただ自分が悪かったというだけではなくて、その悪かったことを、もう二度と繰り返さないように、間違っただけの人、悪い人ではなくて、正しい人、善い人になるように心に決めることなのです。パウロさんも、イエス様から「あなたのしていることは『とげの付いた棒をける』ようなことで、あなた自身が『ひどい目に遭う』ことなんですよ」と言われて、自分の間違いに気がつきました。そしてパウロさんは、イエス様を信じる人たちに迫害することを止めました。それどころか、逆にイエス様のことを信じるように人々に教えるようになったのです。

ただ自分が間違っていたことを認めただけでは、イエス様のことを教えるようにはなりません。パウロは、自分に語りかけて自分が間違っていることを教えてくれたイエス様が、自分のことを本当に大切に思っ下さり、愛して下さり、本当にパウロが「ひどい目に遭う」ことがないようにと語りかけて下さったことを知ったのでした。ですか

らパウロは、イエス様のおっしゃることを信用し、それに従っていこうと思いました。つまりイエス様を信じたのです。

〈展開3〉パウロにとって信仰と悔い改めが神様の恵みであったことを確認し、私たちもその中に居ることを伝える。

こうして、イエス様を信じて、自分の罪を悔い改めて、イエス様に従っていこうと願うこと、それがパウロさんが選んだ道でした。パウロさんが悔い改めたのは、パウロさんが偉かったからではありません。特別に頭が良かったからでもありません。イエス様がパウロさんのことを大切に思っけて、「ひどい目に遭う」ことがないように語りかけて下さったのです。こんなふうには、私たちは何にもしていないのに、神様の方から一方的に大切なものを下さる。これが神様の恵みです。パウロさんが救われたのは、神様が恵みによって語りかけて下さり、それによってパウロさんが悔い改めてイエス様を信じたからです。

神様は、パウロさんに語りかけたように私たちにも語りかけて下さっています。もちろん、パウロさんと全く同じように突然天から光が差し込んで来て、私たちを照して、急にだれかの声がしてなんてことがみんなに起こるわけではありません。けれども、私たちが聖書を開いてみると、その中で神様は私たちに何が間違っただけで、何が正しいことなのかを教え、私たちが悔い改めて神様を信じなければならぬことを教えて下さっています。私たちはその恵みに満ちた神様の言葉を聞いて、自分の罪を悔い改めて、神様を信じることで神様に救っていただけるのです。聖書の言葉をきちんと聞いて、自分の罪を悔い改め、神様を信じましょう。(長田詠喜)

〔今週の暗唱聖句〕 使徒言行録26章17節

わたしは、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのもとのに遣わす。

〈ねらい〉

悔い改めとは何かを学ぶ。

〈展開例〉

①罪ある私たちの性質

叱られたとき、どんな言葉が口から出てきますか。

〇〇ちゃんもしてるよ。

証拠がある？見ていたの？

だって、先に〇〇ちゃんがしたんだもの。

いつも私ばかりおこられる。

どうしてすぐにごめんなさいと言うことができないのでしょうか。腹を立てるのでしょうか。

私たちの中には罪があるので、素直にごめんなさいということができないのです。私たちの中にはある罪がそれをさせないのです。

②聖霊の働きによって

聖霊が私たちの心を開き、イエス様を信じさせ

てくださるとき、固い心がやわらかくされます。自分のした悪いことを悲しむようにされます。もう罪を犯したくないと思うようになります。神様ごめんなさいと謝れるようになります。

③悔い改めとは方向転換

神様からはなれていた私たちが、今度は神様の方に向かって歩き始めるようになります。

それは真っ暗なところから明るい光へと向かう歩みです。

(Uターンを矢印で書きながら説明するとよい)

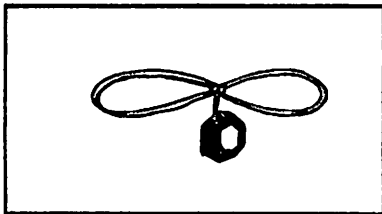
〈折り〉

神様、私たちが悪いことをしたとき、それを悲しむことができますように。もう悪いことはしたくないという思いが与えられますように。イエス様のみ名によってお祈りします。アーメン

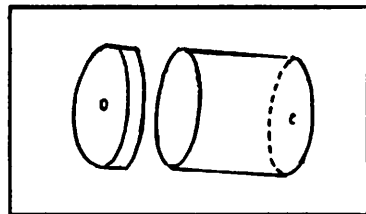
方向転換する車？

用意するもの

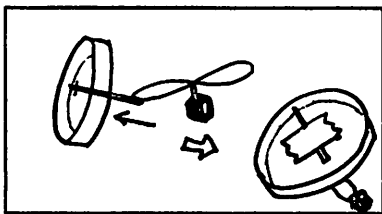
- ・ガムのプラスチック容器や綿棒の容器などの円柱状の容器・輪ゴム1本、ひも
- ・ガムテープかセロテープ・ハサミ、きり、つま楊枝、おもりにするナット



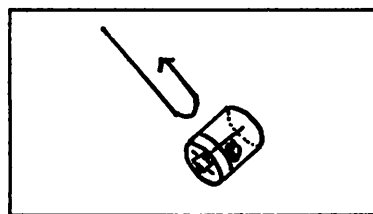
①輪ゴムの真中にナットをひもで縛って取り付ける。



②容器のふたと底の中心にきりなどで穴をあける。



③輪ゴムの先につま楊枝をセロテープで止める。容器のふたと底の穴につま楊枝を内側から通す。外側につま楊枝が出たら、つま楊枝を半分折り輪ゴムの中に入れてねじり、ガムテープで容器のふたと底の外側につま楊枝を貼り付ける。



④車をそーっと転がせば、途中からころと転がってもどってくる。

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①パウロは何をするためにダマスコに行こうとしていた？（→迫害）
- ②そのとき光と共にだれの声が聞こえた？（→イエスさま）
- ③「とげの付いた棒をける」とは何のこと？（→教会を迫害すること）
- ④イエスさまはパウロを滅ぼすために現れた？（→救って証人にするため）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ①信仰と悔い改めは自分の力ですること？（→聖霊の働きという恵みによって）
- ②イエスさまを信じるとは、昔イエスさまがいたということを信じること？（→救い主として信じ、信頼すること）
- ③イエスさまは私たちを何から救ってくださる？（→罪）
- ④私たちは罪に対して何もしなくていい？（→罪を認め、憎む）
- ⑤それだけ？（→罪から離れ、神さまに向かって歩む）

〈考えてみよう〉

パウロのような人をどう思うでしょうか。迫害していた人がイエスさまを伝える人になるとは驚きです。光の中でイエスさまに出会い、イエスさまの声を直接聞けたということも、うらやましく思うかもしれません。それでは、私たちはどのようにしてイエスさまに出会うことができるでしょうか。私たちも、聖書を読むこと、教会で聖書のお話を聞くことによって、イエスさまの声を聞き、イエスさまに出会うことができるのです。

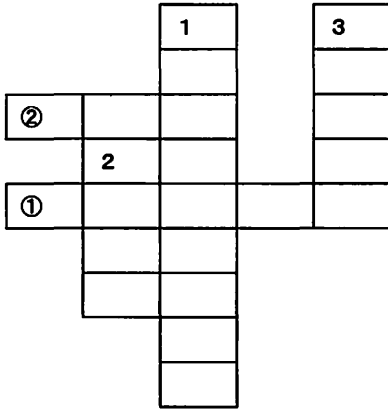
〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。いつもイエスさまを信じて、どんな小さな罪も認めることができますように。パウロがイエスさまを信じて伝える人とされたように、私たちもイエスさまをお友達に伝えることができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



✂ ワークシート ✂

✚ 聖書をひらいて (使徒言行録26:12-18) たてと、横をまちがえないでね!



たてのカギ

- 1 イエスさまが、パウロに(16節)「OOOOO OOOO」!
- 2 罪人は、神にOOOOしています
- 3 弓矢が、当たらないこと

よこのカギ

- ① イエスさまが、パウロに(16節)「OOOO O」!
- ② やみの支配者(18節)

✚ 考えてみよう

① サウルが、迫害していたのは、教会と、キリストを信じる人々でした。なぜ、イエスさまは、「サウル、サウルなぜわたしを迫害するのか」(14節)「あなたが迫害しているイエスである」(15節)と、いわれたのでしょうか?

✚ 言ってみよう

問 67
信仰と悔い改めとは、何ですか?

答え 聖霊のお働きによって与えられる、救いの恵みです。イエスさまを救い主として受け入れ、信頼することと、罪をみとめ、罪をにくみ、神さまに向かって歩むことです。

✚ やってみよう

○にことばを入れてね! 反対ことばだよ。

「それは、かれらの目をひらいて、○○から○○○に

○○○の支配 から○○に立ち帰らせ……」(使徒26:18)

✚ 今週の暗唱聖句

わたしは、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのもとにつかわす。
使徒言行録26章17節

【目標】

悔い改めとは何か、信仰とは何かを考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→使徒言行録26章12～18節を改めて生徒と読む。

【ポイント】

悔い改めとは方向転換であり、自分で罪を後悔して悲しむということではなく、自分の罪を認めて、それがキリストによって担われる以外に赦される道はないことを知り、罪をキリストに告白して担っていただき、赦されて歩む生き方へと向き直ることである。信仰はその中に既に働いており、信仰とは、罪からの救い主としてキリストを信頼し、愛することである。尊い事とは、罪を後悔して聖さを目指すことにあるのではなく、罪人のままで、キリストのもとに罪の赦しがあることを信頼して、キリストの赦しに身を寄せることにある。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身の、悔い改めの経験とその恵みを分かち合う。

Q. 悔い改めは方向転換であるという意味を、使徒パウロの悔い改めに見てみましょう。彼はどれほど変わったのでしょうか？

Q. それまでの自分の向かっている向きをグルッと変えてしまう悔い改めとは、なかなか簡単にはできない難しいことです。なぜ難しいのだと思いますか？ 何が悔い改めを邪魔するのだと思いますか？

Q. 真心から悔い改めると、それは反省したときとは違い、心が重くなるどころか格段に軽くなります。何がなくなると、重い心が軽くなるのでしょうか？ 考えてみましょう？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. あなたには悔い改めは必要だと思いますか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？



テキスト 使徒言行録2章37～47節

このところは、ペンテコステに起こった聖霊降臨によってなされたペトロの説教を聞いて悔い改めに導かれた人々の反応と、その後の信者の生活が記されているところです。

「わたしたちはどうしたらよいのですか」

このところでは、ペトロの説教を聴いて最初のキリストの教会を形成した人々について記されています。彼らは「ペトロの言葉を受け入れ」た人々です。この「受け入れる」との言葉は、ペトロによって語られたことが「あなたがたが」とペトロによって言われているとおり、まさに自分のこととして受け入れたということなのです。彼らは、ペトロの語る言葉を受け入れたからこそ「大いに心打たれ」たのです。この言葉は「刺された」とか「心を痛めた」と訳すことのできる言葉で、非常に強い意味を持ちます。つまり、ペトロの説教を聴きそれを受け入れた人々は、感動して心打たれたのではなく、心を刺されたのです。彼らは救い主を自分が十字架につけて殺したとの罪の自覚をし、そのことに心を刺され、心を痛めたのです。人々が福音に触れそれを受け入れる時、その痛みも同時に受けるものなのです。その痛みの中で彼らは「わたしたちはどうしたらよいのですか」と問うています。彼らはキリストの十字架における自らの罪過と終末的な裁きの狭間に置かれ、絶望感と神様への希望が入り混じる中でこのように問うのです。

ペトロは人々に悔い改めと受洗を勧めます。悔い改めは、これまでの態度、つまり神様に敵対する態度からの方向転換です。その過去の在り方から「イエスは主である」と告白し、神様の憐れみに向かって行く方向転換なのです。

洗礼は罪の赦しに見える徴なのです。その洗礼は主イエス・キリストの名によってなされなければ意味がありません。主の御名によって、つまり

主の権威と御力によってなされるとき、罪の赦しに見える徴となり、罪の赦しの確証となるのです。

この約束は「主が招いて下さるものなら誰にでも、与えられ」る者なのです。つまり、主が招いてくださるから救いがあり、洗礼を受け罪の赦しが約束されるのです。

「仲間に加わった」

このようにして悔い改めに導かれた人々が仲間に加わったと記されています。これはある仲間意識を持った集団であり、「皆一つになる」、「ものを共有し、分け合う」、「心一つにする」と言われるほど、強く結びついた仲間なのです。しかし、この仲間意識は単なる寄り合い的な結びつきによるではありません。「主に招かれた」人々の集まりなのです。主に呼び出された、神の民の集まりなのです。主に結ばれた主を頭とする神の民の集まりであり、その結びつきによる仲間なのです。

この主の民は「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」といわれています。「使徒の教え」・「パンを裂くこと」・「祈ること」はまさに礼拝の要素であり、また恵みの外的手段です。彼らは神礼拝を重んじる生活をしていました。これらをとおして、主は御自身を示し、主の恵みを人々に注がれたのです。

また、このことを通して、神様との交わりと主にあるものたちとの交わりをなしていたのです。つまり、そこで聖徒の交わりがなされていたのです。

このような神様と人に対する愛に満ちた集まりを示していたからこそ、民衆全体から好意を寄せられていたのも事実でしょう。恵みの外的手段を正しく用い、教会の交わり、つまりは聖徒の交わりが深められ、そこに生かされるとき、教会はキリストの教会としての輝きを増すのです。

(春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問68

問68 恵みの手段とは何ですか。

答 御言葉と礼典とお祈りです。

父なる神さまは、

聖霊のお働きによって、特にこの三つを通して、

私たちに、イエスさまがいっしょにいてくださることを信じさせてくださいます。

こうして、私たちはイエスさまと一つに結び合わせられ、

キリストの体なる教会として建て上げられます。

証拠聖句 マタイ 28：19-20、使徒 2：42, 46-47

参考教理問答 『ウ信仰告白』第14章、『ウ小教理』88

1. 内的手段と外的手段

イエス・キリストは、私たちの救いのために、十字架での贖いの死によって、神の義を満たされました。私たちが、キリストの贖いの恵みに与るためには、まず、私たちの内側に聖霊が働いて下さって、キリストへの信仰と悔い改めを生じさせて下さることが必要です（内的手段）。次に聖霊は、私たちにキリストの恵みを与えて下さる手段として、御言葉と礼典とお祈りを用いられます（外的手段）。

2. 御言葉と礼典

聖霊は、御言葉を通して私たちの心を開いて下さって、信仰を生じさせて下さり、罪の悔い改めを起こし、イエス・キリストを神の子、救い主であることを信じさせて下さって、救いに至らせて下さいます。

そして、私たちの信仰が成長するにつれて、その途上でぶつかる様々な弱さを外的に支えてくれるのが、礼典です。

礼典（洗礼と聖餐）は、キリストによって制定されたものです。礼典において、キリストと新しい恵みの契約の祝福が、感覚的なしるし（洗礼においては水、聖餐式においてはパンとぶどう酒）によって信じる者に表わされ、それを信じて受け取る者には、礼典が表わしている祝福、恵みが与

えられることを保証するのです。

しかし、礼典それ自体が効力を持つのではなく、それを有効なものにしてくれるのは、聖霊の働きです。

3. お祈り

お祈りも、御言葉と礼典と共に、キリストの贖いの恵みを私たちに伝達する外的な手段です。聖書は、私たちに祈りの大切なこと、絶えず祈ることを教えています。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。」（テサロニケー5：16）。

私たちは罪人であって、本来神の前に立つことのできないものです。しかし神は、限りない恵みと憐れみによって、「祈り」という神との交わりを道を開いて下さいました。

私たちは、聖霊の助けととりなしによって、御言葉をもって神のご意志、御心を知らされ、御心に一致した、御心に適った祈りをする事ができるのです。キリストは「わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう」（ヨハネ14：13）と言って下さいました。

私たちは、祈りを通して神と交わり、イエス・キリストと一つに結び合わされるのです。

（久保浩文）

テキスト 使徒言行録2章37～47節
カテキズム 子どもカテキズム問68

〔単元のねらい〕

私たちが救われるための具体的实际的で、私たちが「通常」期待できる方法として、恵みの三つの手段「御言葉」「礼典」「祈り」を挙げる。それぞれの詳細な説明は次週以降なされるため、今日は、聖書箇所との関連でそれぞれを簡単に説明し、この三つの手段が教会において実現することを指摘する。教会を強制するのではなく、むしろ教会にこそ恵みが存在していることを強調するように心掛ける。

「礼拝に出よう」

〈導入〉クリスチャンホームの子どもたちを主な対象として、信仰を養うということについて、問題意識を喚起する。

皆さん。おはようございます。今日も聖書のお話を読んで参りたいと思います。今日の聖書の箇所では、ペトロさんからイエス様のお話を聞いた人たちが、「(それでは) わたしたちはどうしたらよいのですか」と尋ねている箇所です。

皆さんも、毎週教会に来て聖書のお話を聞いたり、お家でお父さんやお母さんから、聖書のお話を聞いたりしてでしょう。でも、教会やお家で聖書のお話を聞いて、それからわたしたちは「どうしたらよい」のでしょうか。

中学生や高校生になると、お父さんお母さんや牧師先生から「そろそろ信仰告白をしたら」と言われるかもしれません。でも、どうしたら信仰告白をすることができるのでしょうか。教会に来て、イエス様のことを信じている人たちのことを「クリスチャン」と言います。みんなのお父さんもお母さんも、先生もみんなクリスチャンです。わたしたちもクリスチャンになるには「どうしたらよい」のでしょうか。

〈展開1〉聖書から、まず、クリスチャンになるための手段としての洗礼について理解させる。

この質問に対して、先ほど読みましたペトロさんの答えは、ずいぶんたくさんを言っているようですが、まとめてみると一つのことを

言ってるだけです。つまり「洗礼を受け(なさい)」ということです。クリスチャンになるには洗礼を受けなければなりません。みんなのお父さんもお母さんも、先生も、それから牧師先生や、長老さんや執事さんも、教会のクリスチャンの人はみんな洗礼を受けています。実は、みんなも、生まれた時、まだ赤ちゃんだった頃に洗礼を受けています。幼児洗礼と言いますが、先生も幼児洗礼を受けました。お父さんやお母さんが、みんなに、イエス様を信じてクリスチャンになってもらいたくて、洗礼を授けたんですね。だから、実はもうみんなはクリスチャンなんです。何か一生懸命テストを受けて、100点をとって合格したからクリスチャンになるわけではありません。悔い改めてキリストの名によって洗礼を受ければ、わたしたちはクリスチャンになるのです。大人になってから始めて教会に来る人もいます。子どものうちから教会のことを知っていて、お父さんやお母さんに連れてきてもらって、礼拝に出ることが出来るみんなのような人もいます。大人になってから教会に来た人は大人になって始めて洗礼を受けてクリスチャンになりますが、子どものうちから教会に来ている人は、もう洗礼を受けてクリスチャンになっているのです。ずいぶん簡単ですね。私たちが一生懸命苦勞しなくてよいように、神様が全部準備して、聖霊なる神様が私たちの代わりに全てを整えて下さるから、わたしたちは本当に簡単なのです。

〈展開2〉具体的な「試み」の状況を設定し、それに対する信仰を養うために、教会における「恵みの手段」が必要なことを理解させる。

でも、そうやってクリスチャンになることは簡単なんですけれども、それだけというわけにはいきません。みんなも教会に行っているとかいうと、友だちに「教会ってどんなところ」とか、「神様を信じるってどういうこと」って聞かれることがあるかもしれません。だんだんと大きくなっていくとそんなことが必ず出てきます。そんな時に、答えることができるように、準備しておかなくてはなりません。そして、幼児洗礼を受けたみんなは、今度は自分で信仰告白をしなくてはなりません。どうすれば信仰告白をすることができるようになるのか、教会について聞かれたときにきちんと答えることができるようになるのか、それには私たちが教会に来ることが一番大切なんです。

教会では何をしようか。さっき読んだ聖書の箇所ではこんなふうに書いてありました。「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」とあります。

「使徒の教え」とは、聖書を読んで、イエス様のことについて教えていただく、つまり礼拝の説教のことです。わたしたちは教会の説教で、神様の御言葉について教えていただきます。聖書のお話は、時には難しいかもしれませんが、ちゃんと聖書を読んで、ちゃんと聞いていると、聖霊なる神様が、神様のことを分かるようにしてください。

その次に、「相互の交わり、パンを裂くこと」という二つのことが書いてあります。相互の交わりというのはちょっと難しい言葉かもしれませんが、「パンを裂くこと」というのは分かるでしょう。大人の礼拝に出ていると、時々、牧師先生が礼拝の中でパンを裂いて配ることがあります。「聖餐式」

です。さっき言いました「洗礼式」とこの聖餐式を併せて「礼典」と言います。教会のみんなが一緒になって、洗礼式をしたり、聖餐式をする。そして御言葉の説教を聞く、そうやってみんなが一緒になって礼拝をすることが「相互の交わり」です。みんなはまだ聖餐式を守ることができませんけれども、その聖餐式や礼拝に大人の人と一緒に出ていることで「相互の交わり」になるのですから、そこでも聖霊なる神様が私たちに働いて下さって、わたしたちはここでも少しずつ神様のことが分かるようにしてもらえます。

そして、最後は「祈ること」です。礼拝の中では何回もみんなでお祈りします。お家でも、食事の時、寝る前と何回もお祈りします。お父さんやお母さんがお祈りしたり、みんなが自分でお祈りしたりします。そうやってお祈りすることで、また聖霊なる神様が私たちの中で働いて下さって、私たちが神様のことを本当によく分かるようにして下さるんです。

〈展開3〉恵みの手段を用いて信仰を養うことの大切さを覚えて、礼拝への熱心を促す。

私たちが、教会のことが分かるようになる、イエス様のことを信じるようになるためには、「御言葉」つまり礼拝の説教を聞くこと、「礼典」つまり聖餐式や洗礼式にみんなと一緒に出ることに、そして「祈り」を一生懸命することによって、聖霊なる神様から私たちの信仰を養っていただくことが大切なのです。

野球選手でもサッカーの選手でも、試合のために毎日トレーニングをします。毎日少しずつトレーニングをしていけば、試合の時上手に、バットを振ったり、シュートを打ったりできます。信仰をトレーニングするために、教会の礼拝を大切にしましょう。(長田詠喜)

〔今週の暗唱聖句〕 使徒言行録2章42節

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

〈ねらい〉

神様のくださるプレゼント（恵み）を受け取るための三つの方法が何かを学ぶ。

〈展開例〉

神様からのプレゼントを受け取るには

みかちゃんはある日、プレゼントをもらいました。それはおばあちゃんからのプレゼントでした。何が入っているのかなどドキドキしながら箱を開けてみると、みかちゃんが前からほしかったブロックのおもちゃが入っていました。

また箱の中にはお手紙も入っていました。「みかちゃん、お誕生日おめでとう。おばあちゃんはみかちゃんのことを大好きです。」と書いてありました。

みかちゃんはとでもうれしくなりました。

さて、おばあちゃんはみかちゃんが大好きだということを、どういう形で届けましたか。おばあちゃんはその気持ちを手紙を書いて伝えました。それから目に見える形でプレゼントを贈りました。

神様はどういう方法で私たちに恵みを届けてくださるのでしょうか。

1. 聖書は神様からのお手紙です。

まだ小さくて字が読めないお友達は、おうちの人や教会の先生が聖書のお話をしてくださいませ。神様からのお手紙である聖書のお話を聞きましょう。

2. 大人の礼拝で洗礼式や聖餐式を見たことがありますか。これも神様が決められた恵みのしるしです。

神様は水やパンやぶどう酒などを用いて神様の恵みを見える形で私たちに教えてくださいます。私たちは目で見、手でさわり、口で味わうことで神様が共にいてくださることを知るのです。

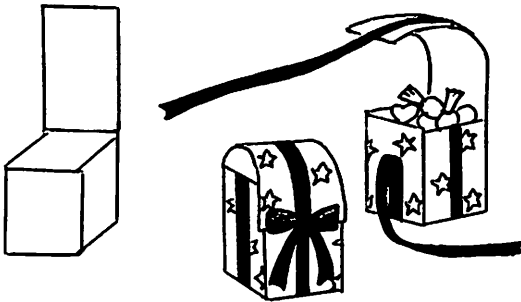
3. 三つめはお祈りです。天のお父様と呼びかけ、祈ることを神様は喜んでくださいます。神様は小さなお祈りをも喜んで聞いてくださいます。

これらの三つは教会の礼拝の中で行われます。礼拝はこれらの三つの恵みを一度に受け取ることのできるすばらしい場所です。

〈祈り〉

天のお父様、礼拝を通して神様からたくさんのお恵みをいただくことができることを感謝します。

牛乳パックのギフトボックス ……あなたはどんな形で思いを伝えますか？



(材料)

牛乳の紙パック（1リットルのサイズ）

布または包装紙、リボン

はさみ、カッター、接着剤

(作り方)

1. 牛乳の紙パックをよく洗って乾かしておく。
2. 1の側面のうち、長い1面はそのままのサイズを生かし、他の3面は底から8cmの高さになるように、はさみやカッターで切る。（ここまでは教師が準備しておく）
3. 好きな布や包装紙を2の表面に貼る。
4. 結ぶ分の長さを残し、リボンを3の表面に貼る。

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①人々は何の話に心を打たれた？（→イエスさまの話）
- ②それからどうした？（→悔い改めて洗礼を受けた）
- ③その日、何人の人が洗礼を受けた？（→三千人ほど）
- ④洗礼を受けた人たちは何をした？（→聖書の話の聞き、聖餐式を守り、お祈りした）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

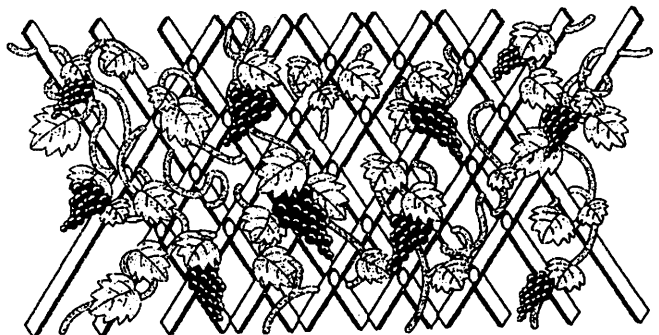
- ①恵みの手段には何がある？（→御言葉と礼典と祈り）
- ②御言葉はどこに書いてある？（→聖書）
- ③聖書は自分で読むだけでいい？（→教会で聖書のお話を聞く）
- ④礼典には何がある？（→洗礼と聖餐）
- ⑤お祈りすると、イエスさまとどのようになれる？（→一つになれる）
- ⑥恵みの手段は特にどこで用いることができる？（→キリストの体なる教会）

〈考えてみよう〉

教会を建てるのに何が必要でしょうか。柱、屋根、床、窓などはもちろん、イスやテーブル、オルガン、マイクなども必要です。でも、教会を建てるというのは、ただ建物のことだけではありません。その建物の中で、イエスさまを信じる人たちが、イエスさまが教えてくださった手段を使うことで、本当の教会は建て上げられるのです。そして、それが、御言葉と礼典と祈りです。立派な建物なら、町にいくらでもありますが、これらのことが行われているのは教会だけです。みんなも、教会をしっかりと建て上げるために、聖書を読み、お祈りしましょう。そして、大きくなって信仰告白をし、聖餐のパンとぶどうジュースをいただくことができるように、今から準備していきましょう。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。今日も教会学校に来て、神さまを礼拝することができて、ありがとうございます。神さまが用意してくださった恵みの手段を使って、イエスさまのことをもっとよく知ることができそうですように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



✂ ワークシート ✂

✚ 聖書をひらいて (使徒言行録 2 : 37~47)

最初の教会・

エルサレム教会

使 ○ ○ ○ ○ ○

相 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

バ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

祈 ○ ○ ○ ○

(2 : 42)

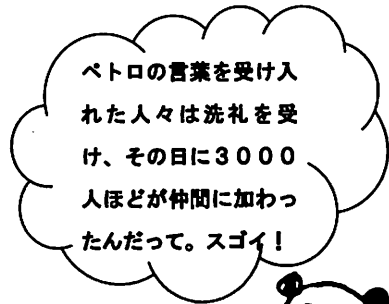
2000年後の私たちの教会

⇒

⇒

⇒

変わってないんだネ!



ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に3000人ほどが仲間に加わったんだって。スゴイ!



✚ 考えてみよう

① 神さまは、私たちにどうして、「恵みの手段」(みことば・礼典・祈り)をあたえてくださったのですか?

✚ 書いてみよう

問 68

恵みの手段しゅん とは、何ですか?

答え 御言葉と礼典とお祈りです。

父なる神さまは、聖霊のお働きによって、特にこの三つを通して、私たちに、イエスさまがいっしょにいてくださることを信じさせてくださいます。こうして、わたしたちはイエスさまと一つに結び合わされ、キリストの体なる教会として建てあげられます。

✚ やってみよう<カードゲーム> 人数×3=カードの枚数(3種類。文字でも絵でもどちらでも。)



ア、「三枚神経衰弱」(裏返して、ばらまいたカードの中から3枚選び取り、3種類選ぶことができれば、もらえる。

手持ちのカードの多い人が勝ち)

イ、「カード合わせ」(カードをよくきって、一人3枚づつ配ります。相手に見えないように、3枚を、扇子状に

手に持ち、1枚引いてもらい、自分は、次の人のカードを1枚引く。早く3種類そろった人が勝ち)

✚ 今週の暗唱聖句

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに、熱心であった。
使徒言行録2章42節

【目標】

教会とは、何が行われるところなのかを考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→使徒言行録2章37～47節を改めて生徒と読む。

【ポイント】

教会で行われることの中核は、御言葉の説教と、洗礼と、聖餐であり、そこでは神様を中心とした、お互いを支え合い、お互いに与え合い、祈り合う関係が持たれる。それらは恵みの手段と呼ばれる。この呼び名が示す通り、教会の中で行なわれるひとつひとつのことは、神様が私たちに恵みを注いでくださる手段となるのである。子供たちは教会という所に、義務的な強制力によって足を運ぶのではなく、神様からの恵みを受けるために、神様が自分を愛してくださっているという喜びを与えられるために、神様から招かれている。この点を

伝えたい。

③生徒と一緒に考える

→まず教師自身が教会を通して与えられている恵みを分かち合う。

Q. ペトロさんの説教を聴いて、人々は何をしましたか？

→悔い改め、洗礼、御言葉の学び、相互の交わり、パン裂き、祈ること（38～42節）。

Q. それは何のために教会で為されるものなのでしょうか？

Q. あなたは教会に何のために来ているのでしょうか？ 教会に来るとどんないいことがありますか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 日曜日に教会で与えられる恵みは、週日にどんな影響を与えますか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？



テキスト ルカによる福音書8章4～8節

(1) 主イエスの解説付きのたとえ話です。ルカ福音書8章4～8節で「種蒔き」のたとえが語られ、少し進んで11～15節に、主イエスご自身の解説があります。この全体をお読みいただいて、聖書の学びの時をお持ちください。礼拝では、この全体を二回に分けて取り扱うこととなります。

このたとえは、少々取り扱いにくい御言葉です。まず、たとえの焦点が一つではありません。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った」(5)とあり、「種を蒔く人」に焦点があるように思えます。しかし、続いて蒔かれた種と畑が描写され、蒔かれた畑に焦点があるようにも思えます。11節以下でも、「種は神の言葉である」とあり、種そのものに焦点があると思えるのですが、その後、畑について解説されます。「種を蒔かれた畑」に焦点が当たっているのです。突のところ、どれか一つではなく、どれにも焦点が当たっています。種を蒔くとは、蒔く人と種そのものと畑、そのすべてが共に相働いてこそ、豊かな実を結ぶからでしょう。

もう一つ、種が蒔かれた土地が道端であった、石地であった……と言われ、読む者が「自分は道端であろうか、石地であろうか」と問うことが起こります。「自分はどのような畑であろうか」。大切な問いですが、ここには律法主義に陥る危険があります。自分は良い畑ではないと考えて、自分を裁くことが起こるのです。律法主義的ではなく、福音を聞くよう心がけることが大切です。

(2) このたとえの焦点は、まず「種を蒔く人」にあります。種を蒔く人とは、主イエス・キリストご自身です。もう一つの焦点は「種」そのものであり、種は神の御言葉です。ここには、神の御言葉を宣べ伝える主イエス・キリストご自身がおられます。種を蒔かれた畑とは、福音を聞く私たちであり、主イエスは、私たちに、またすべての人に、福音を宣べ伝えておられます。福音を宣べ伝える主イエスの姿のたとえなのです。

このたとえで、種蒔きの仕方が問題になり、し

ばしばバレスチナの種の蒔き方が説明されます。種を畑に蒔くときに道端に蒔くことがあろうか、石地に蒔くことがあろうか、よく耕された良い畑にのみ蒔こうとするのではないだろうかと思うからです。しかし、ここでは農業としての種の蒔き方を教えているではありません。

これは、主イエスの福音宣教の姿です。土地を選びません。道端であっても石地であっても茨地であっても蒔いてくださる。突のところ、私たちのだれ一人として良い畑ではありません。しかし、主イエスは、土地が良くても悪くても、罪人への愛の故にひたすら種を蒔いてくださる。人に踏みつけられ、空の鳥についばまれ、水もなく、そのような多くの妨げがあります。しかし、あきらめることなく種を蒔いてくださる。多くの労苦と困難を引き受けて、種を蒔いてくださる。それ故に、その種が実り、信仰者が起こされ、百倍の実を結ぶ祝福が生み出されるのです。主イエスは、福音を宣べ伝える労苦を耐え忍んでおられます。

この主イエスの忍耐の背後には、神の御言葉に対する信頼があります。人を造りかえる御言葉の力を信頼しているのです。御言葉を信頼しているから、たゆむことなく、疲れることなく、あきらめることなく、御言葉を宣べ伝えることができます。種は土に落ちて、一見死んだように見えて、しかし、時が来れば確実に芽生え育ち、成長し、実りを生み出します。神の御言葉には、死を克服して実りを生み出す命の力があるのです。

(3) 主イエスの宣教の労苦、また御言葉の持つ命の力によって、私たちが教会に集められ、信仰者とされています。私たちは、主イエスの福音宣教の実りです。そのことに感謝しましょう。そして、御言葉に力があるから、いま私たちも、主イエスにうながされて、伝道することができます。私たちは、主イエスにならって、土地を選ぶことなく、忍耐強く伝道するのです。(望月 信)

問69 御言葉とは何ですか。

答 生ける神の言葉、イエス・キリストです。

書かれた神の御言葉である聖書と、

聖霊なる神さまが語られる神の御言葉としての教会の説教を通して、

私たちは、イエスさまと一つに結び合わせられます。

証拠聖句 ヨハネ1:1-5、ヨハネ1:1-4

参考教理問答 『ウ信仰告白』第1章

1. イエス・キリストを証しする聖書

神の人格的な御言葉であるイエス・キリストは、人間となられ、御自身のこの地上での生涯、十字架の死と復活によって、神の御心、真理をこの世に十分に啓示された、生ける神の言葉そのものです。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」(ヨハネ1:1)。

旧約時代、新約時代を通して私たちの救いの歴史の中心にイエス・キリストがおられます。旧約の信仰者たちは、皆キリストの日を望み見たのです。「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ」(ヨハネ5:39)。聖書はイエス・キリストを証ししているのです。

2. 聖書すべてが神の御言葉

イエス・キリストご自身がお自身の聖霊を通して預言者や使徒たち、いわゆる聖書記者たちに

り書かれた全聖書がキリストの言葉です。ですから、旧新約聖書はすべて、そこにおいて神が、御子イエス・キリストを通し、聖霊によって私たちに今語っておられる、神の生ける御言葉です。「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です」(テモテニ3:16)。

3. 御言葉の説教

信仰は、聖書に基づいてなされる御言葉の説教によって生み出されます。説教者によって説き明かされた神の御言葉は、聖霊の導きによって、御言葉を聞く人に、罪と悲惨の中にある自分たちの姿を自覚させてくださり、キリストへと導き、回心させ、霊的生命を与えて、キリストにのみ希望をおく信仰と感謝と喜びをもって、キリストに従うものへと成長させてくださるのです。

(久保浩文)

テキスト ルカによる福音書8章4～8節
 カテキズム 子どもカテキズム 問69

〔単元のねらい〕

日曜学校の礼拝は、神の言葉によって子どもたちの心を耕し、そして聖霊のゆたかで創造的なちからによって、子どもたちの心が御言葉を受け入れ、育つことを、信じつつ期待しつつ、献げられている。御言葉の種をまくのは、教師たちであるが、種を育て、実りを与え、成長させるのは、神ご自身である。御言葉という種じたいに秘められた、育ち、実る力を、なによりも心から信じて、この単元に取りくみしたい。世の中に満ちている、種々の言葉が、圧倒的な力で子どもたちの心を席卷しているようにみえる。けれども、それらの言葉は、結局は、しばらくの間、ひとの心に取り入って、頼みにもならない幻想で心をかき乱し、やがて疲労と空虚さだけを残して消えてゆく。いのちを与え、いのちを支える、そのような神の言葉の種まきに、共同で取りくみしたい。種がまかれる子どもたちの心への信頼が、教師たちのうちにいっそう確かにされるように祈る。

「御言葉の種をまくイエスさま」

皆さんは、農家のひとたちが種をまく様子を、見たことがあるでしょうか。地面に指で穴をほって、ひとつぶ、ふたつぶの種を入れるような種まきもあります。そうかと思うと、たいらにならされた畑ぜんたいに、小さな種をバラバラとまくこともあります。ちいさな家庭菜園で、お母さんが少しの野菜を育てたりすることもありますね。どんなやりかたでも、種はとても大切にされて、少しでも無駄にならないように注意します。なぜでしょうか。それは、一粒一粒の種には、いのちがやどっているからです。

イエスさまの今日のお話には、むかしのユダヤの農家の人たちが、種をまく様子がえがかれています。ちょっと、みなさんも、その様子を心に描いてみてください。目をとじて、ひろい畑が広がっている様子を、思い浮かべることができそうですか？ ユダヤの土地は、私たちのまわりにある畑とはだいぶちがいます。ひとや家畜が踏み固めた道が、畑の真ん中を通っています。大小の岩や石ころが、そこらじゅうに転がっているところもあります。畑のそばには、刺のはえた「いばら」のような強くてしぶとい植物も、しげみをつくっているようです。「エッ、こんな畑に種をまく

の？」とびっくりするような畑なのです。（さあ目をひらいて）

畑が畑なら、種をまくやりかたも、ちょっとびっくりですよ。ユダヤの昔の農家の人たちは、種をひとつぶひとつぶ、ていねいに地面にうずめるようなことはしなかったそうです。背筋を伸ばして、遠くまで種をバラバラと投げ飛ばす。それならまだ良いほうです。種をいれた袋に穴をあけ、ロバなどの背中に乗せて畑のなかをどんどん歩かせることもあったそうです。そういうやり方では、種が芽をだして成長することはどんなにたいへんだったろうと思います。そんなユダヤの農家のくるしさ、たいへんさを、イエスさまは小さい子どものころからずっと見てこられたのでしょね。

イエスさまのまわりには、おおぜいの人びとが、神さまのことば、神さまの国の喜びと恵みをもとめて集まっています。その大勢の人びとの耳や、人びとのところに、神さまの恵みのことばを、なんとかして伝えたいと願って、イエスさまは語りつづけておられます。

保育園や学校で、先生のことばを聞くときのことを考えてみてください。おなじように先生のこと

とばを聞いているようでも、それぞれ聞き方にちがいががあります。となり同士でふざけあって聞いていて、ほんとうに大切なことを聞き逃したことはありませんか。こころのなかで、なにか別のことを考えているために、先生のことばが半分しかわからなかったこともあるでしょう。よく聞いていても、先生のことばに内心、反発していたりすると、やっぱり大切なことを聞き逃していたり、誤解してしまうこともないとはいえません。

イエスさまのお話には、種が、いろいろな土地に落ちてゆくようですが、生き生きとえがかれています。道端に落ちる種があります。人や家畜などが通る道端に落ちた種は、いったいどうなるでしょう。踏みつけられたり、空の鳥がみつめてついでにしまいでしまいます。ほかの種は、「石地」に落ちてしまいました。石のうえに、ほんのすこしだけ土がかぶさっているのです。種は、すこし芽を出しはじめますが、水気がなくてすぐ枯れてしまうのです。またほかの種は、いばらの中に落ちてしまいます。いばらは、とても強くてすばやく伸びてきますから、せっかく芽をだした種は、いばらに押し付けられて伸びることができません。

ところが、ほかの種は「良い土地」に落ちました。そこは柔らかい土があり、水分も日当たりも申し分なく、種が芽を出し、大空にむかって日光を浴びて伸びてゆくのを、なにも邪魔するものがないのです。しっかりと根をおろし、すくすくと伸びて、やがてたくさんの実をつけました。まかれた種は一粒なのに、なんと100粒もの実がなったのです。

イエスさまは、「聞く耳のある者は聞きなさい」といわれます。聞くということは、こころのなかの本当に大切なはたらきですから、どんな聞き方をしているかで、ひとりひとりの考えや信仰に、

おおきな違いがうまれてきます。種は、道端や、石の上や、いばらの中では、成長して実をむすぶことができませんね。「あなたがたは、どんなふうに、わたしの言葉を聞いているか、どうかよく考えてください！」。イエスさまは、そんなお気持ちで、大きな声で、「聞く耳のある者は聞きなさい」とおっしゃったのかも知れません。

イエスさまは、種をまく人です。神さまのみ国を、私たちの中に広げるため、そして私たちが、神さまの恵みを一杯にうけて、神さまのためにたくさんの実をむすび、神さまに喜んでいただけるよう、希望をもって種をまかれました。「種をまく人が、種まきに出て行った」と書かれていますね。イエス様こそ、私たちの心と、そして世界の人びとの心に、うつくしい種、愛の種、喜びと感謝の種、平和とやさしさの種、そして神さまを信じる信仰の種を、まいてくださいました。いままきつづけておられます。

日曜日の礼拝は、イエスさまが、種まく人として、いまま私たちの間に立ってくださる時です。聖書が開かれ、そして日曜学校の先生が、それを朗読してくださるとき、イエスさまという、種まくひとが、私たちのあいだを歩いておられるのです。ここに集まる、私たちじしんが、それぞれの畑です。イエスさまは、人びとの心が、たとえ石ころだらけでも、あきらめずに種をまいてくださいました。私たちの心にも、石のような固い畑がありますね。神さまの恵み、イエスさまの愛が、わからなくて悲しいときがあります。でも、イエスさまという、種まく人は、いつでもどこでも、私たちの中で種をまいてくださるのです。今朝、私たちがイエスさまのことばを、よろこんでしっかり聞けば、100倍の実をむすぶすばらしい畑は、私たちじしんです。 (小野静雄)

〔今週の暗唱聖句〕 ルカによる福音書第8章8節

また、ほかの種は良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。

〈ねらい〉

種を蒔いてくださるのはイエス様であり、種は神様の御言葉であることを理解する。

〈展開例〉

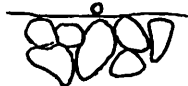
1. 4つの種のたとえをふりかえる

(教師が絵を描きながら)

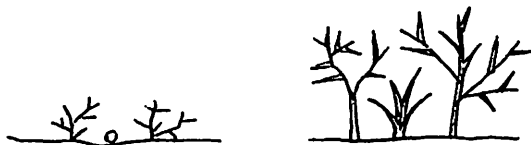
ある人が種を蒔きに出かけていきました。



道端に落ちた種 → 空の鳥が食べてしまった



石地に落ちた種 → 枯れてしまった



いばらの中に落ちた種 → 伸びられなかった



よい地に落ちた種 → 100倍の実ができた

2. 考えよう

- ・種って何のことだろう？(神様の御言葉)
- ・種を蒔く人とは誰のこと？(イエス様)
- ・実を結ぶとは？(イエス様を信じて従うものとされる)

〈折り〉

神様の御言葉をよく聞くことができますように。
神様に喜んで従う子どもとしてください。

ペットボトルでラディッシュを育てよう! (図版は124ページに掲載しています。)

ねらい 種にいのちがあること、種が育って実る不思議を体験する。

用意するもの

- ・ラディッシュ (はつかだいこん) の種 (秋蒔き用)、有機質肥料、小石 (これらは100円ショップなどでも売られています)
- ・野菜用の土 (園芸用でもよい)、ペットボトル (500ml用)、カッターナイフ

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①道端に落ちた種はどうなった？（→踏みつけられ、鳥に食べられた）
- ②石地に落ちた種は？（→芽は出たが枯れた）
- ③茨の中に落ちた種は？（→茨が押しつぶさってしまった）
- ④良い土地に落ちた種は？（→百倍の実を結んだ）
- ⑤種とは何のこと？（→神さまの御言葉）
- ⑥種を蒔く人とは誰のこと？（→イエスさま）
- ⑦百倍の実を結ぶとは？（→イエスさまを信じて歩み続けるということ）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ①神さまの御言葉は何に書いてある？（→聖書）
- ②聖書に書いていることで最も大切なことは誰のこと？（→神の言葉そのものであるイエスさま）
- ③聖書からイエスさまのお話をしてくれる教会の先生の説教も神さまの御言葉として聞いていい？（→いい）
- ④説教している先生が神さまだから？（→聖霊なる神さまが聖書のお話をする先生を通して働いておられるから）

〈考えてみよう〉

遠くにいるお友達に伝えたいことがあるとき、どうしますか。電話をかける、手紙を書く、いろいろな方法があります。天の神さまは、地上にいる私たちにメッセージを伝えるために、何をしてくださったのでしょうか。神さまは、聖書を与えてくださいました。聖書を読み、その話を教会で聞くとき、神さまは遠くにいながら、すぐ近くにいてくださいます。そして、神さまの御言葉は種のように生きていて、私たちの中で信仰の芽を出してくださいます。毎日聖書を読んでいるでしょうか。少しずつでも、小さな種を植えるようにして聖書を読みましょう。いつか大きな実を結ぶはずです。

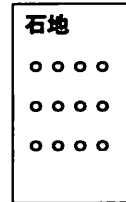
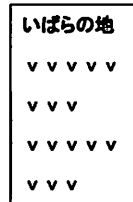
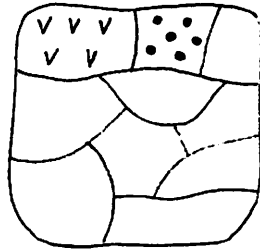
〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。聖書を私たちに与えてくださって、ありがとうございます。神さまの御言葉の力を信じて、毎日、聖書を読むことができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



✂ ワークシート ✂

✚ 聖書をひらいて (ルカ8:4~8)



が、隣り合わせにならないように、並べてください

✚ 考えてみよう

✪ 今朝の礼拝の中で、聖書のお話を聞きました。どんな心で、聞くことができましたか？よそ事を考えていたお友達の心の中には、カラスがやって来て御言葉をぜーんぶ食べられてカラッポかもしれません。お話は聞いていたけど、心の中は遊びのことでいっぱい！イエスさまのことを思うすき間はありませーん、と言うお友達はいませんか？それとも、イエスさまの御言葉にしたがって、神さまの庭で百倍の実がなっている自分を想像しているお友達がありますか？あなたは、どれですか？

✚ 言ってみよう

問69

御言葉とは何ですか？

答え 生ける神のことば、イエス・キリストです。

書かれた神のみことばである聖書と、聖霊なる神さまが語られる神のみことばとしての教会の説教を通して、わたしたちは、イエスさまと一つに結び合わせられます。

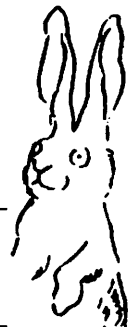
✚ やってみよう

『聞く耳リレー』(毎日、みことばを覚えよう！覚えたら口にマル！)

- (日) 「聞く耳のある人は聞きなさい」と大声で言われた。(ルカ 8:8)
- (月) リっぱな、よい心でみことばを聞き、よく守り (ルカ 8:15)
- (火) 「だから、どう聞くべきかに注意しなさい」(ルカ 8:18)
- (水) 「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行かう人たちのことである」(ルカ 8:21)
- (木) 「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」(ルカ 9:35)
- (金) 「この言葉をよく耳に入れておきなさい。」(ルカ 9:44)
- (土) マリアは主の足もとに座ってその話に聞き入っていた。(ルカ 10:39)

✚ 今週の囃唱聖句

また、ほかの種はよい土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。
ルカによる福音書第八章8節



【目標】

御言葉を与えてくださる主イエスを知り、御言葉の豊かな力を知る。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？(分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である)

②改めて御言葉に取り組む

→ルカによる福音書8章4～8節を改めて生徒と読む。

【ポイント】

種蒔きのたとえ前半の焦点は、種を蒔く方主イエスと蒔かれるその種自体(御言葉)に置かれる。今天におられる主イエスは、教会での礼拝において、そこでの説教において、御言葉の種蒔きをしてくださる。礼拝で行なわれる説教は、単なる講演や、先生の考えを伝える授業ではなく、天に生きておられる主イエスが、私たち一人一人に御言葉の種を蒔いてくださるその現場であることを伝

えたい。

③生徒と一緒に考える

→教師自身の説教が、生ける主の御言葉の種蒔きであることの恵みを覚え、それを生徒と分かち合う。

Q. あなたは種蒔きをしたことがありますか？
どんな気持ちで、どんな期待をもって種蒔きをしたいと思いますか？

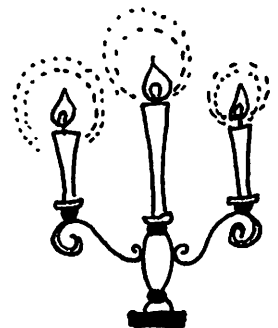
Q. 礼拝での主イエスの御言葉の種蒔きは、先生の説教は、どんな期待をもって為されていると思いますか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 説教が、生ける主イエスの御言葉の種蒔きの現場であるなら、それを聞く私たちはどのようにして聞くべきですか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？



テキスト ルカによる福音書8章11～15節

(1) 「種蒔き」のたとえの二回目です。今回は、「種を蒔かれた畑」に焦点を当てて学びます。御言葉を聞く態度、聴従の姿勢についてです。主イエスは、「聞く耳のある者は聞きなさい」(8)、「良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである」(15)とおっしゃっており、「御言葉への聴従」がこの箇所の最大のテーマです。

(2) 主イエスは、ご自身の福音宣教を決して簡単なこととは考えておられません。畑は良い畑ではないのであって、まるで道端であり、石地であり、茨の土地のごときなのです。種を蒔いても人に踏みつけられ、空の鳥についばまれ、茨に覆われて、さまざまな妨げがあります。しかし、主イエスは、その労苦を引き受けて、御言葉を宣べ伝えて忍耐されます。そして、ご自身が忍耐し、労苦されるからこそ、御言葉を聞く私たちにも労苦と忍耐をお求めになります。御言葉を聞いて実が実るとは簡単なことではありません。私たちが心を開いて御言葉を受け入れ、それを守り、忍耐してこそ実を結ぶに至るのです。主イエスは、私たちに実を結ぶに至る忍耐を求めておられます。

私たちは、主イエスのこの求めに誠実に応える者でありたいと願います。御言葉を聞くことに忍耐して、豊かな実を結ぶに至りたいのです。

(3) 第一に、私たちは道端のごときです。すなわち、地面が固く踏みしめられており、種をまったく受け付けません。それは、心かたくなで、新しいものを受け入れようとしないうる私たちの心です。外からのものを吸収することを拒む、保守的な性質です。御言葉を聞いても馬耳東風です。ですから、新しいものを受け入れる柔軟な心、開かれた姿勢が大切なのですが、開かれた姿勢を持つことができるならば、すでにそれは道端ではありません。実のところ、道端を耕し、かたくなな心を打ち砕き、心開かせてくださるのは、御言葉の力で

あり、御霊の働きです。御言葉と御霊の力に信頼して、祈ることが大切です。

第二に、私たちは石地のごときです。石地にはわずかながら土があり、芽を出すことができます。しかし、根を張ることができません。水気もないので育つに至りません。根を張り、幹と枝を伸ばして成長することができないのです。それは、信仰がしっかりと根を張らない、土台を据えて成長するに至らない、私たちの姿です。そこでは、聖書の御言葉に親しみ、教理を学ぶことが大切です。教会生活を重んじることも欠かせません。教会生活によってこそ、聖書に根差し、骨太な柱に支えられた信仰へと成長させられるからです。

第三に、私たちは茨に覆われた土地のごときです。茨がのさばると、土の養分や日の光を奪い取り、せっかく芽を出した草花が育ちません。そのように、多くの思い煩いや富、快楽が、私たちの信仰から力を奪うのです。茨はすべての養分を吸収して自分だけが成長していきます。そのように、自分の力を吸収してしまう何ものかがあるのです。信仰生活に割くべき力を削がれてしまう。これは、優先順位の問題でもあります。何を優先しているのか。「ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる」(ルカ12:31)。この御言葉が大切です。

(4) この三つは、信仰生活のステップまたステージではありません。道端から石地へとステップアップ……というものではありません。これらはいずれも信仰者の生涯の課題です。そして、百倍の実を結ぶ良い畑とは、これらの課題を克服しようと努めるところで与えられる祝福です。

私たちの信仰の歩みは決して平坦なものではありません。多くの困難と労苦があります。主イエスは、その困難をご存じです。このたとえによって、主イエスは、御言葉をよく守り、忍耐して実を結ぶようにと、私たちを励ましてくださっているのです。(望月 信)

カテキズム 子どもカテキズム問70

子どもカテキズム

問70 御言葉は、どのようにしてあなたに救いの恵みを与えるのですか。

答 私たちが、神の御言葉である聖書と説教に
正しく聴き従うことによってです。

御言葉をよく聴くことこそ、神さまへの愛と奉仕です。

証拠聖句 ネヘミヤ8:8、コリント一14:24-25、使徒20:32、テモテニ3:15、ローマ10:17、
ルカ10:38-42

参考教理問答 『ウ小教理』89,90

御言葉が私たちに救いの恵みを与えるために聖霊が用いる手段とは、神の言葉である聖書と説教です。

1. 聖書を読むこと

私たちは、御言葉が自分の救いに有効となるためには、勤勉、準備、祈りをもって、これに傾聴して、信仰と愛をもって受け入れなければなりません。

まず、聖書を読む時に、ただ通読するとか精読するのではなくて、私たち罪人のために神が与えてくださった、神の言葉として、敬虔と祈りをもって読むことです。

さらに私たちは、肉体のために一日に三度規則正しく肉体の糧が必要なように、私たちの魂にも霊なる糧を規則正しくいただくようにしましょう。勤勉(熱心)に常に聖書を手元に置き、規則正しく、御言葉に親しむのです。

そのようにして私たちは、絶えず神の言葉、キリストの言葉を心に蓄えて、その御言葉を生活の中で実践しなければいけません。「キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。……何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。」(コロサイ3:16~17)

2. 公同礼拝での説教

個々人の信仰生活において聖書に親しむだけでなく、キリストの臨在される公同礼拝において、御言葉に傾聴しましょう。

聖霊は、説教者によって説教された御言葉を聞く者の心を開いて届け、罪の自覚と回心を起こさせて救いに導き、キリストの恵みを私たちに与えてくださいます。

より多く、説教での恵みを受けるためには、聞く者の準備と祈りが必要です。主の日の前日には、静かに祈りと瞑想のときをもって過ごし、翌日の礼拝に差し支えるような極度な疲労は避けなければなりません。

聖霊が福音の説教によって、私たちの心を照らし導いて私たちの内に信仰を芽生えさせて下さるだけでなく、キリストを信じ、心から喜んで神に服従することができるように祈り求めながら、衆直に御言葉に傾聴しましょう。神への最大、最高の奉仕は、信仰をもって御言葉に耳を傾けることです。「主が喜ばれるのは 焼き尽くす献げ物やいけにえであろうか。むしろ、主の御声に聞き従うことではないか。見よ、聞き従うことはいけにえにまさり 耳を傾けることは雄羊の脂肪にまさる。」(サムエル上15:22) (久保浩文)

テキスト ルカによる福音書8章11～15節
カテキズム 子どもカテキズム問70

(単元のねらい)

主イエスは、御言葉の種をまくことに、まさにいのちを注いでくださった。御言葉の実りが、どれほどの困難を伴うかを、身をもって経験し、人々の拒絶や嘲りに遭いながらも、神の言葉の宣教に臆することはなかった。日曜学校の子どもたちに、御言葉がどのように届き、御言葉の結ぶ実りを見させていただくか。私たちの務めはそのところにかかっている。そして、言葉の届きにくさという壁にもぶつかっている。種まきの譬えは、神の言葉の結ぶ実りを、大きな愛と忍耐をもって見守っておられる主イエスの、深いまなざしから生まれた譬えである。聞く人々の中に聴従を生み出すこと。そのために、豊かに耕された畑を用意すること。それは、御言葉を語る私たち自身の、祈りや備えとも無関係ではない。畑と種の実りには、深い「相互関係（相互作用）」があるようである。日曜学校の教師は、御言葉と、子どもたちの心の間に起きるこの「相互関係」に奉仕する。神の言葉と、子どもの心や生活をつなぐ働きである。その意味で、御言葉を語ることは同時に「説教から教会へ」の道を歩むことでもある。

「実をむすぶために」

先週の礼拝で、どんなことを聞いたか、覚えていますね。種をまく人が、畑に行って種をまきます。でも種がまかれる畑は、ほんとうに色々でしたね。イエスさまは、4つの畑の様子を話してくださいました。「道端」のように、いつ人に踏みつけられるか分からないあぶない畑。「石地」のような固くて水分のとばしい畑。「茨」がはえて種を押しつぶすような畑。そして、4つ目が「良い土地」の畑です。4番目の、良い土地に落ちた種が、100倍もの豊かな実を結びました。イエスさまは、御言葉を聞く人びとが、どうか良い土地のように、100倍もの実を結ぶ人になってほしいと願われました。皆さんの願いもきっとそうでしょう。種は、ひとつひとつ、いのちをもっています。この種は、神さまの御言葉なので、天国のいのち、永遠の喜びといういのち、神さまと人を愛するといういのち、神さまを信じて生きるいのち……。すばらしいいのちが、いっぱいあった、いのちの種です。そんなすばらしいいのちの種が、実を結ばないまま、踏みつけられたり、枯れてしまったりは、悲しいことですね。

種がrippに実を結ぶために、どんなことに気をつけるのでしょうか。イエスさまは、種まきの譬えを、よくわかるように、教えてくださいました。

「道端」に落ちてしまう種がありました。それは、神さまの言葉を聞いているようでも、ここは上の空です。イエスさまの言葉を聞いていた人びとのなかにも、そんな人びとがいたようですね。おもしろい話を聞かせてほしい、珍しい奇跡を見せてほしい。そんな気持ちでイエスさまのまわりに集まってくる人たちもいました。そういう気持ちで聞いていると、すぐに悪魔が私たちのところに忍び込んで、せっかく聞いている神様のことばを、取り去ってしまうのです。イエスさまのことばの、ひとつひとつが、わたしに向かってくる神様の愛として、しっかり受けとめるようにしたいですね。

「石地」のようなところに種が落ちます。石地の上には、ほんの少しだけ土がありますから、種は芽を出すのですが、しっかりと「根」を下ろすことができません。根のない植物は、すぐに地面から抜けたり倒れたりしますね。石地のようなこ

ころがあります！ イエスさまは、そのように私たちに注意しておられますね。「聖書はいいナ」とか、「神さまの教えはなかなかためになるナ」とか、ちょっと気軽にイエスさまのことを信じるのですが、長続きしないのです。イエスさまのまわりにも、そのような人びとがいました。最初は、喜んでイエスさまの教えを聞いたのです。ところが、お役人などが「イエスの教えは間違いだ」「イエスは神さまの教えをゆがめている」「イエスを信じるようなものは、仲間はずれにしてやる」などという、おどかしや、うそのことばを聞くと、すぐにころがグラグラして、離れてしまうのでした。イエスさまを十字架につけた人びとの中にも、「石地」のような人がたくさんいたようです。私たちのころが石地にならないために、どんなことが大切でしょう。日曜日の礼拝のたびに、イエスさまは、私たちのころに種をまいてくださるのです。その聖書の言葉を、わすれず、ころにしっかり蓄えたいですね。日曜日の礼拝で、聞いているイエスさまの言葉を、まずひとつでもころに刻み付けてゆきましょう。

「いばら」の中に落ちる種もありました。神さまの言葉を、一心に聞きました。イエスさまを信じて生きて行こうと思ったのです。でも、ころを引き付けるものが、たくさんあります。学校の勉強は大切ですが、勉強のことで頭がいっぱいになって、イエスさまのことを忘れたらどうでしょう。イエスさまに従うよりも、クラブや塾のほうが大事だと思うことは、私たちにもよくありますね。ほんとうにそうでしょうか。神さまを信じて、天国の恵みをいただく。それ以上に大切なことなど、ほんとうはないはずです。大切なことの順序を、しっかりと学んでゆきましょう。まず、なによりも神さまを愛すること、そして神さまの言葉を信じて、天国の恵みを受けること。それが第一

です。この第一のことを第一にすることによって、神さまは、私たちのころから、「いばら」を取り除いてくださいます。

「良い土地」に落ちた種はどうなりましたか。100倍の実をむすびました。イエス様のことばを、しっかりと聞いたのです。日曜学校の先生が語ってくださる聖書の言葉を、喜んで聞きました。暗唱聖句を覚えて、毎日、身のまわりに起きるできごとを、神さまの教えによって考えました。イエス様にしたがうときに、いろいろと辛いこともありました。でもくじけずに、神さまにお祈りしました。そうするうちに、イエス様の御言葉が、ほんとうにいのちのことばだということが、いろいろと分かるようになったのです。

神さまがわたしをどんなに愛してくくださるかを、すこし信じることができました。お父さんやお母さんの言いつけにも、耳を傾けるようになりました。けんかやいたずらをして、叱られることもあります。が、「ごめんなさい」とあやまることもできます。

私たちが、実をむすぶようになるために、だれよりもイエス様が最初の一粒の種になってくださったことを、最後におぼえましょう。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」(ヨハネ12:24)。このように言って、イエス様は自分自身、一粒の麦の種になり、十字架で死んでくださったのです。イエス様が、わたしのために死んでくださったのです。そして、私たちにいのちをくださいました。100倍もの実をむすぶことは、わたしの力でできることではありません。でもイエスさまが、わたしの内におられて、実を結ぶようにしてください。(小野静雄)

〔今週の暗唱聖句〕 ルカによる福音書8章15節

良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。

〈ねらい〉

4つの種のたとえの意味を考え、どのように御言葉を聞くべきかを学ぶ。

〈展開例〉

- ① 4つの種の話、絵を見ながら振り返る。
- ② 種とは何か、種を蒔く人は誰かなどを復習する。
- ③ 畑とは何でしょう→御言葉を聞く私たちの心

「道ばた」とは

道のような固い心。鳥が種を食べてしまったようにすぐに神様の言葉を忘れてしまう心。

「石地」とは

少しだけ土があるので芽は出るが、石があって根っこが伸びられないのですぐに枯れてしまう。(根のついた草などを見せるとよい) 困ったこと、つらいことがあるとすぐに神様から離れてしまう心。

「いばらの中」とは

いばらにふさがれて伸びられなかった種のように

に、神様の言葉を聞いて喜ぶが、神様より大切なものや楽しいことができると、そっちの方に行ってしまう心。

「良い土地」とは

しっかりと御言葉を聞き、信じて従う心。神様の御言葉が私たちの中で実を結び、神様が喜ばれる生き方をするようになる。

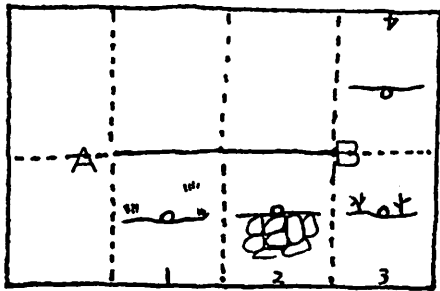
みんなは自分はどんな土地だと思いますか。神様のみ言葉が心にちゃんと残っていますか。

心をやわらかくしたり、石を取り除いたりしてくださるのも神様です。神様は種を蒔いてくださるだけでなく、私たちが良い土地となることができるようにいつも私たちを助けてくださいます。

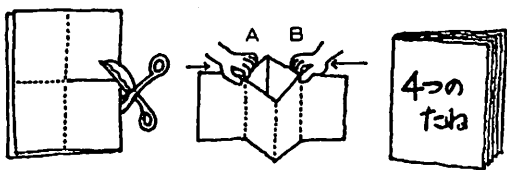
〈折り〉

心をやわらかくして神様の御言葉を聞くことのできる耳をお与えください。御言葉が私たちの中で実を結ぶことができますように。

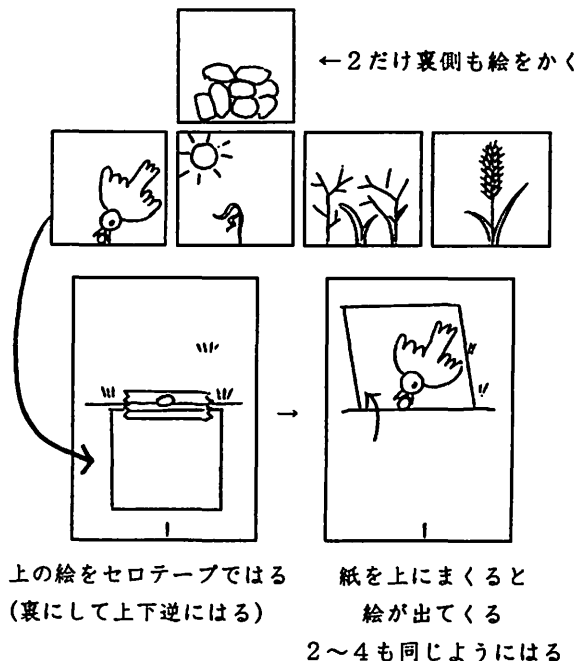
4つの種のしげ絵本をつくらう (絵は10月30日の分級を参照)



紙を図のように折り、AからBを切る。
ハサミで切る場合は折ってから切るとよい。



AとBをくっつけて折りたたむ



〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①道端のものところには誰が来た？(→悪魔)
- ②石地ものは、何が起ると信仰から身を引いてしまう？(→試練)
- ③茨の中ものは実を熟した？(→熟さなかった)
- ④道端や石地や茨とは、何のこと？(→神さまの御言葉を聞くけれど信仰が続かないものこと)
- ⑤善い心で御言葉を聞き、よく守る人のことは何とされている？(→良い土地)

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

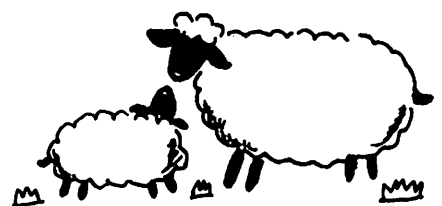
- ①聖書を持っていればそれでいい？(→読まなければいけない)
- ②自分一人で読めばいい？(→教会でみんなと読み、説教を聞く)
- ③時々でいい？(→いつも聴く)
- ④そうすると神さまから何が与えられる？(→救いの恵み)

〈考えてみよう〉

今日のお話をよく聞いていたでしょうか。となりのお友達とおしゃべりしたり、他のことを考えたりして、お話をあまり聞いていなかったということはないでしょうか。教会で一番大切なことは、聖書のお話をしっかりと聞くことです。今日のお話をよく聞けなかった人は、分級の時間に、先生やお友達からもう一度聞いてみましょう。また、よく聞いていた人は、まだよく分からないお友達に教えてあげましょう。教会学校は、誰が一番良い土地であるかを競うところではなく、みんなが良い土地になるところです。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。今日も聖書のお話を聞くことができてありがとうございます。いつも神さまの御言葉をしっかりと聞いて、また御言葉の教えを守ることができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



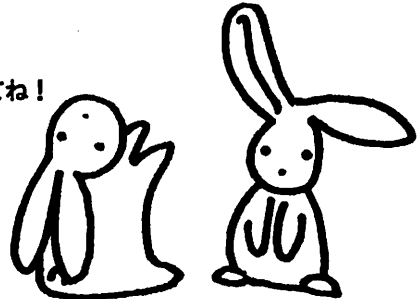
✂ ワークシート ✂

✝ 聖書をひらいて(ルカ8:11~15)

<漢字などなど> 漢字の足し算をして一つの漢字にしてね!

- ① 王 + 口 + 耳 =
- ② 耳 + 目 + 心 + 十字架 =

考えてみよう



わたしの友達は、クリスマスに来て、続けて日曜学校に来ません。もう、勝うのをやめようかな……?

✝ 言ってみよう

問 70

みことばは、どのよう
にして、あなたに救い
の恵みを与えるのです
か?

答え 私たちが、神のみことばである聖書と説教に
正しく聴き従うことによります。
みことばをよく聴くことこそ、神さまへの愛と
奉仕です。

✝ やってみよう <みことばミニすごろく>

用意するもの：サイコロ・コマ (消しゴム・鉛筆のキャップなど)

スタート	石地		よい地	いぼり		鳥に食	いぼり	よい地、		人に踏まれ	石地	ゴール
⇒	ふりだ しに	*	2つ進 む	1回や すみ	✿	べられ、 ふりだし に	1回や すみ	1回進む	*	て5こもど る	ふりだ しに	✂

ルール：スタートに、コマをおき、サイコロをふります。目の数だけ進み、止まったところの指示に従います。

✝ 今週の暗唱聖句

よい土地に落ちたのは、りっぱな よい心でみことばを聞き、
よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである。

ルカによる福音書 8章 15節

秋の稲穂は、実るとますます頭を下げて
神のことばを聴こうとしているようです……。



【目標】

種が一粒から多くの実りを生むようなことが、私たち自身の中で起こるといふ恵みを覚える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→ルカによる福音書8章11～15節を改めて生徒と読む。

【ポイント】

私たち自身が御言葉を受け入れる畑にたとえられる。良い畑として御言葉を受け入れることが求められている。「道端」や「石地」など様々な反面教師が語られ、それらの失敗例によって良い畑の条件が示される。教師はその良き畑を目指して生徒と共に歩む者である。今朝も御言葉の種をいただいていることを感謝し、自分たちが種なしの畑でないことを感謝し、私たち自身が百倍もの実

りを生む場所にされようとしていることに感謝と期待を覚えたい。

③生徒と一緒に考える

→良い耕された畑として御言葉を受けるために、私たちはどうすれば良いのか、このために教師自身が考え祈っていることを生徒と分かち合う。

Q. 「道端」、「石地」、「茨に覆われた土地」が、残念ながら御言葉の種を実らせることのできなかった訳はなぜでしょうか？

Q. 「耕された良い畑」は、何によって作られるのでしょうか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. あなたが良い畑となって実らせる実りとは、具体的に何だと思いますか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト ルカによる福音書24章28～35節

1. 不信仰という信仰

エマオに向かっていた二人は、そこへ何をしに行ったのでしょうか。「わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださいと望みをかけていました」。それは過去の夢、今はもう費え去り、望みを無くしたということです。もはやエルサレムにいる意味もない彼らは、故郷へと帰ろうとしていたのです。彼らは聞いたはずでした。主イエスが復活されたということを。彼らは主が復活されたことを知らずにエルサレムを出て来たわけではありませんでした。それを知りながら、彼らはエルサレムを出てきたのです。彼らは婦人たちに現れた天使たちの言葉も、空の墓も知っていました。復活の証言と共に、復活の明らかな証拠を見せられながら、それでも彼らはそれを信じるどころか、これは一体どういうことかと、ただ事態を当惑しながら見つめるばかりなのでした。主の復活の証言を聞きながら、彼らは「暗い顔をして」いたのです！ 何という不信仰。しかしこれが彼らの「信仰」でした。不信仰という信仰です。主の言葉を悟り理解することができず、その約束されたことを信じようとしないう不信仰、それが彼らの信仰なのでした。

彼らは、聖書の言葉を知らず、その約束を知ることがなかったから、主を信じることができなかったのでしょうか。いいえ！ 彼らは聖書を知っていましたし、預言者が語る約束を熟知していました。それにもかかわらず、約束の命の主を目の前にしながら、その方がどなたであるかを理解することができず、今ここで主ご自身に出会いながらも、それを主であると信じることはできなかったのです。ここに、人間の限界があるのです。聖書をどれほど良く知り、どれほど良く研究したとしても、それで主を知り、主イエスに対する信仰に至るわけではありません。「彼らの心には覆いが掛かって」いるからです(コリント二3:15)。それがとりのぞかれて、主イエスへの信仰に至るのは「主の霊の働きによる」(同18節) ことだか

らです。

2. 「不信仰」を突破させる神の働き

この「不信仰という信仰」を打破し、突破させるのは、ただ神の働きによります。ここでエマオに向かった二人の弟子たちは、常日頃交わりをしていた主ご自身を目の当たりにしながら、しかもそれを主だと気づきませんでした。「暗い顔」をして、絶望に心を閉ざされていた彼らは、心の目が閉ざされていたからでした。そして主を目の前にしながら、主に気づくこともできなかったのです。彼らが、主と出会い、主と気づいたのは、「二人の目が開け、イエスと分かった」ときでした。それは「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった」ときのことでした。これまで何度も共に味わった主との会食、それはかつて五千人を前にして人々が満腹したときのことであり、なにより十字架にかけられる前の夜、弟子たちと共にした最後の晩餐のことでありました。その時にも、主は同じ姿で、食事を共にされたのです。その時ハッと気づいたのでした。この方は主イエスだと。それは彼らの努力や熱心に基づくものではなく、ましてや彼らがそれを願っていたからでもありませんでした。暗い顔をして、主がいなくなってしまったことに当惑し、希望を失って故郷に帰る彼らに、主の方から出向き、出会ってくださった、そして彼らにご自身を現されたのでした。彼らが主に気づき、主と出会うことができたのは、彼らの心を主が開いてくださったからでした。「人間の信仰」という不信仰を打ち破るのは、復活の主です。わたしたちが、真実に主と出会うことができるのは、わたしたちの不信仰が打ち砕かれて、心の目が開かれていくことによるのです。わたしたちが真実に生ける主とお会いできるのは、わたしたちの不信仰が打ち砕かれ、心の目が開かれることです。

(三川栄二)

カテキズム 子どもカテキズム問71

子どもカテキズム

問71 礼典とは何ですか。

答 洗礼と聖餐です。

神さまは、聖霊のお働きによって、

目に見える物を用いて、私たちをイエス様と一つに結び合わせ、
教会の枝としてくださるのです。キリストの祝福のすべてを受けていることを表し、保証し、しるしづける、
目に見える御言葉です。

証拠聖句 創世17:10、出エ12:15、コリ11:23-24

参考教理問答 『ウ小教理』91-93、『ウ大教理』161-164、『ハイデルベルク』65-68

〈恵みの手段〉

私たちは、夏の間、十戒をずっと学んできました。一つ一つの戒めを注意深く学ぶことも大切ですが、同時に、私たちは、十戒全体の要約が「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして主を愛する」神への愛と、「隣人を自分のように愛する」隣人愛にあることも教えられました。このように十戒を学ぶ中で私たちは十戒を完全には守ることのできない自分たちに気がついてきました。

そのような罪深い私たちが神さまによって罪から救い出され、十戒を喜んで生きることができるよう神さまは道を備えて下さいました。それは教会生活の中で、イエス様を信じ、悔い改め、恵みの手段を忠実に用いて生きる道です。恵みの手段は御言葉（説教）と礼典と祈りです。

きょうからの三週間は恵みの手段として与えられている礼典について学びましょう。

〈主がお命じになった礼典〉

新約の礼典は洗礼と聖餐です。プロテスタントの教会では、主イエス・キリストが代々執り行うように教会にお命じになったこの二つを新約の礼典として今日まで守ってきました。主が直接御言葉においてお命じになった礼典ですから、私たち

はキリスト者として熱心かつ忠実にこれを守るのです。

また、主がお命じになった礼典ですから、これを正しく忠実に守る時、豊かな聖霊の祝福にあずかることができます。

〈礼典の二つの要素〉

『ウエストミンスター大教理問答』は、おおよそ礼典には二つの要素があると教えています。それは「外的な感覚的しるし」とそれによって表される「内的な霊的恵み」です(163)。

「外的な感覚的しるし」とは、洗礼の場合、水で洗うこと、聖餐の場合は、パンとぶどう酒(ジュース)を与えまた受けることです。それぞれの式文(制定の御言葉)が読まれるとき、聖霊がお働き下さって、それらの「目に見える物」が表している「キリストの祝福」即ち、私たちが信仰によってキリストと一つに結び合わされていること、また、そのことによって教会の枝とされていることを教え悟らせてくださいます。

また、聖霊は礼典に真面目にあずかる者が確かにそのようなキリストの祝福を受けていることを保証し、確信させてくださるのです。そのような意味で、礼典は「目に見える御言葉」と呼ばれることがあります。(宮崎彌男)

テキスト ルカによる福音書24章28～35節
カテキズム 子どもカテキズム問71

〔単元のねらい〕

単元のねらいは、カテキズム解説を主題とするなら、礼典にある。聖書箇所は、エマオ途上のキリストとの出会いが指定されている。二つを紡ぎ合わせないといけない。復活の主との出会いは、言葉によるだけでなく、夕食時のイエス様の所作によって起こった。この不思議さに、子どもたちを導くために、丁寧に物語っていただきたい。また、この聖書箇所を主日の聖餐式の出来事と結びつけることにより、今日においてもまた、目に見えるものを用いて復活の主が出会ってくださることに、思いを向けたい。その時、暗い顔が明るくなる。礼典に関する説明は、27日分をも参照していただきたい。

「目が開かれ、イエス様だと分かる」

「二人は暗い顔をして立ち止まった」(17節)とあります。イエス様の弟子たちです。彼らは暗い顔をしていました。「ちびまる子ちゃん」のマンガなら、顔に線が入っている状態です。見知らぬ人と出会って、「この人誰え？」と思いました。

二人の弟子は、イエス様が十字架で亡くなられ、とても悲しかったのです。これから先、イエス様なしでどのように生きていったらよいのか、悩んでいました。二人にとって愛するイエス様が亡くなったということは、皆さんが親しいお友だちを失うときに感じるのと同じほど、いや、それ以上に悲しい出来事でした。彼らは、落ち込んでいましたが、イエス様のことをお互いに話し合うことで、悲しみと向き合っていました。

そこに、見知らぬ人が近づいてきました。その旅人は、「何を話しているのですか」と彼らに聞きました。二人は「イエス様のことです」と答えませぬ。その旅人は、イエス様のことを何も知らないかのようでした。二人は、「あなたは、エルサレムにいたのに、イエス様のことを何も知らなかったのですか」と驚いて答えます。二人は、悲しくなりました。イエス様が亡くなられてショックを受けているのに、イエス様に無関心な旅人と出会って、二人の心はますます暗くなりました。

でも、二人はこの旅人にイエス様のことを伝えました。十字架で死なれたことだけでなく、仲間

の婦人たちがイエス様がよみがえったと語っていることも、伝えました。彼らは、婦人たちからイエス様のよみがえりを確かに聞きました。彼らの仲間は、イエス様の墓に行き、婦人たちの言うとおりに、イエス様の遺体がないことを確認しました。それらのことを旅人に伝えていますが、二人自身、そのことがよく飲み込めていません。二人は「本当かなあ、イエス様がよみがえられたとは……」と復活の知らせに戸惑っていました。

見知らぬ旅人は、イエス様のことに無関心に思われたのですが、実はそうではありませんでした。旧約聖書のことや神の民に与えられる救い主のことをよく知っていました。旅人は、救い主が苦しみを受けて栄光をお受けになることを、聖書から解き明かしました。二人の弟子たちの心は、話しを聞いている間に、熱くなってきました。

二人は、この見知らぬ旅人と出会ったときは、「暗い顔」をしていました。二人には、この旅人は、変な人のように思われました。しかし、話しを聞いている間に、何かが変わり始めました。

夕方になり、目的地に近づいてきました。道中の語りも終わりとなります。二人は、辿り着いた村で宿をとって泊まるつもりでしたが、見知らぬ旅人は、なお先を進んで行く様子でした。二人は、この旅人に一緒に泊まってくれるように、お願いしました。ここで別れると二度と会えないか

もしれません。別れる前に、もっと聖書のお話を聞きたかったのです。それで、無理を言って、泊まってもらうように何度もお願いしました。すると、旅人は承諾してくれました。

夕食の時間になりました。三人で食卓を囲んでいます。おかずはわかりませんが、机のうえには、主食のパンが置かれています。旅人はパンを取り、賛美の祈りを唱え、これを裂いて二人の弟子に与えました。これは、逾越祭等のお祭りのときに、お父さんが子どもや家族のものにパンを与えるときの所作です。見知らぬ旅人は、いつのまにか、イエス様の弟子を指導し養う役割を果たしています。二人は、父親からパンを受けるように、知らない旅人からパンの配餐を受けました。

するとその時、不思議なことが起きました。二人の目が開かれました。今まで見えなかった訳ではありません。目が悪かった訳ではありません。しかし、彼らの目には、今まで見る事ができなかったものが、今、見えるようになりました。開かれた目で見ると、見知らぬ旅人は、実は、主イエス・キリストご自身でした。それも、十字架で亡くなられ、死者の中から復活されたイエス様です。二人の弟子はビックリしました。仲間の婦人たちがよみがえったと言っていたあのイエス様が、彼らの目に前にいてくださったのです。

復活後のイエス様のお姿が以前のお姿と変わっていたので、気づかなかったではありません。同じイエス様です。でも、姿や形が同じであれば、最初に会ったときから、よく似た人だなあと気づくはずですが、彼らは全くそのようには感じませんでした。とても不思議です。復活のイエス様は誰かに変身しておられたのではなく、昔と同じお姿ですが、弟子たちはそれがイエス様であるとは気づくことができなかったのです。

では、なぜ、気づくことができたのでしょうか。聖書は、「二人の目が開け」と説明しています。イエス様かどうか分かるのは、イエス様のお姿に

よるのではなく、彼らの目が開かれるか否かにかかっていました。また、彼らは、「パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった」と説明しています。心の目が開いたのは、この見知らぬ旅人がパンを裂いて与えてくださったときです。パンを裂くとは、通常は家長の仕草ですが、イエス様の弟子たちにはもう一つ別な意味がありました。弟子たちの間で家長として振る舞っておられたイエス様は、十字架につけられる前にこのようにパンを裂いて弟子たちに与え、聖餐式を制定してくださいました。二人の弟子は、見知らぬ旅人がパンを裂いて渡したとき、聖餐式を制定してくださったイエス様の姿を見たのです。

二人の弟子たちがイエス様だと分かったと、イエス様のお姿はすぐ見えなくなりました。しかし、二人の弟子は、そのことを悲しむことはありませんでした。悲しむどころか、復活の主と出会ったという喜びで満たされました。このとき、復活の戸惑いは、「ハレルヤ！ 主はよみがえられた」という喜びの叫びに変わりました。

この体験は、教会が聖餐式を守る度ごとに特別に想起されました。聖霊なる神様が心の目を開いてくださって、パンとブドウ酒という目に見える物をとおして、そこに復活の主の臨在を見ます。キリスト者は、牧師や長老の配餐を通して、復活の主からパンとブドウ酒を受けとります。主イエス・キリストは、主が共にいてくださることが見えるしを通して明らかになるように、聖餐式と洗礼式を与えてくださいました。私たちは、洗礼式の水を受け、聖餐式のパンとぶどう酒をいただくことにより、主と結びついていることを感覚的に体験しています。心の目を開いて礼典にあずかるなら、そこにイエス様がおられることが分かります。キリスト者は、御言葉によって主の御声を聞くときと礼典にあずかるときに、主の臨在を覚えます。その時、私たちは明るい顔に輝きます。
(岩崎 謙)

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書24章33節後半～35節

十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

〈ねらい〉

洗礼式と聖餐式は目に見える御言葉であることを学ぶ。(ここでは説教のテキストに従い、聖餐式のみを扱う)

〈展開例〉

①大人の礼拝での聖餐式

大人の礼拝でぶどう酒を飲んだりパンを食べたりするのを見たことがありますか。それが聖餐式です。そのとき、どんなことを考えましたか。

- ・おいしそう
 - ・私たちにはどうしてもらえないのかな
 - ・どうしてこんなことをするのか……など？
- 不思議に思っていることをみんなで話し合う

②どうして聖餐式をするのでしょうか。

1. イエス様が行いなさいとおっしゃったからです。
2. イエス様の恵みがよくわかるために

・パンとぶどう酒は何を表しているのでしょうか。パンは私たちにかわって十字架の上で裂かれたイエス様の体をあらわしています。ぶどう酒はイエス様の流された血をあらわしています。聖餐式はそのことをあらわす、目に見える御言葉です。

- ・言葉で聞くだけのときと、聞いてからさらに目で見るときと、どっちがよくわかるかな。
 - ・イエス様のことを耳で聞くだけでなく、このしるしを見て、食べて、飲んでイエス様の救いと恵みが確かであることを味わうのです。
- まだ聖餐式を見たところがないお友達はぜひ一度、聖餐式が行われる日の大人の礼拝に出席してみてください。

〈祈り〉

目に見える聖餐式を通してイエス様の恵みがよくわかるようにして下さりありがとうございます。

あるのに見えない？ ……水の中に入れてと変わる不思議な絵

ねらい あるはずなのに見えない不思議を体験する。

用意するもの ・厚紙、ナイロンの袋、マジック、水、ガラス容器または口の広いコップ

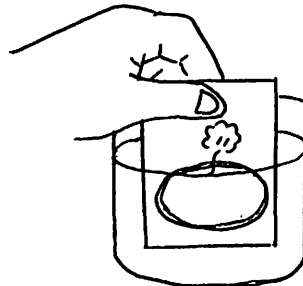


①厚紙をナイロン袋より一回り小さく切る。

②まず厚紙に料理の絵を描き、その絵をナイロン袋に入れ、袋の上から料理が入る大きさの皿の絵を描く。

③厚紙をナイロン袋に入れた状態

④ガラス容器に絵がつかる高さまでの水を入れる。



⑤その水の中に絵をまっすぐ入れると……

あら不思議、お料理が消えちゃった。

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ① イエスさまの弟子が何人歩いていた？ (→二人)
- ② 村に着いたとき、イエスさまは先に進んでいかれた？ (→一緒に泊まった)
- ③ そこで何をした？ (→食事)
- ④ 食事のとき、イエスさまは何をされた？ (→賛美の祈りを唱え、パンを裂いた)
- ⑤ 前にも同じようなことがあった？ (→最後の晩餐のときにあった)
- ⑥ そのとき二人の弟子に何が起きた？ (→目が開け、イエスさまのことが分かった)

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

- ① 礼典はいくつある？ (→二つ)
- ② 何と何？ (→洗礼と聖餐)
- ③ そこでは何が表される？ (→キリストの祝福を受けること)
- ③ そこで使う水やパンなど目に見えるものに特別な力があるの？ (→そうではなく、聖霊が働いてくださり、それらを用いてくださる)
- ④ 礼典はどこで行われる？ (→教会)

〈考えてみよう〉

イエスさまと一緒に話をしながら歩いていたのに、それがイエスさまだと気付かなかった二人の弟子のことを、どのように思うでしょうか。どうして気付かなかったのか、不思議です。自分ならそんなことないのに、と思うかもしれません。でも、イエスさまを信じている私たちも、時々、イエスさまのことを忘れて、イエスさまのことを考えないで過ごしていることがないでしょうか。二人の弟子のことを笑えません。でも、そのようなときにもイエスさまは共にいてくださいます。教会に来るときには、そのことに気付くでしょう。そして、特に二つの礼典は、そのように私たちがイエスさまに気付いて、恵みをいただくためにあるのです。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。今日も教会に来ることができてありがとうございます。教会に、洗礼と聖餐を与えてくださってありがとうございます。その意味がよく分かるように、これからも導いてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



✂ ワークシート ✂

✝ 聖書をひらいて (ルカ24:28~35)

写 外 悔 慕 ち 川 弓 二 鳩
 穴 モ 空 示 休 多 デ 木 有
 作 加

漢字が、汚れて見えなくなっています。カタカナをいれて、カタカナを読んでね。

✝ 考えてみよう

☒ イエスさまは、目に見えません。友だちから、「目に見えないイエスさまを、よく信じることができるねー!」...と言われました。ぼくは、聖書に書かれている「イエスさまの言葉」を信じています。この二人のお弟子さんは、目の前にイエスさまがいるのに、そのイエスさまに気づきませんでした。パンを手わたされた時、二人の目が開かれ、イエスさまだとわかりました。すると、イエスさまの姿は見えなくなりました。どうしてですか？

✝ 言ってみよう

問71

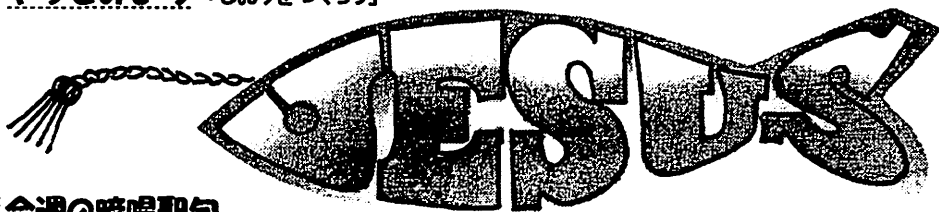
礼典とは何ですか？

答え 洗礼と聖餐です。

神さまは、聖霊のお働きによって、目に見えるものを用いて、私たちをイエスさまと一つに結びあわせ、教会の枝としてくださるのです。

キリストの祝福のすべてを受けていることを表し、保証し、しるしづける、目に見えるみことばです。

✝ やってみよう 「しおりをつくらう」



✝ 今週の暗唱聖句

十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かったしだいを話した。

ルカによる福音書 8章15節

【目標】

生きておられる主イエスを礼典の中にとらえる。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→ルカによる福音書24章28～35節を改めて生徒と読む。

【ポイント】

礼典とは、死んでしまった過去に生きておられることを思い返す式典ではなく、今生きておられる主イエスとの結び付きのしるしである。弟子たちがパン裂きの際に主イエスを見て分かったように、礼典において生ける主イエスの姿が現されるのである。

③生徒と一緒に考える

→教師自身、主イエスが生きておられることを

悟らせられる時は、例えばどのような時だろうか？ 生徒と分かち合う。

Q. なぜ主イエスが目の前におられたのに、弟子たちはそれに気付かなかったのでしょうか？

Q. 目が開けるとは、何がわかること、何に気付くことなのでしょうか？

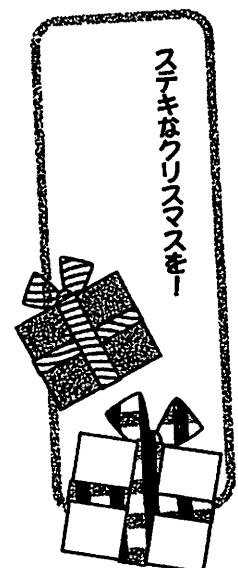
Q. 教会の礼典は何のために行われているのでしょうか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. もし主イエスが生きておられなかったら、私たちの生活はどうなるでしょうか？ 礼拝は、洗礼や聖餐式は、みんなのお祈りは、どうなってしまうのでしょうか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？



テキスト マタイによる福音書3章13～17節

1. 悔い改めの洗礼を受けられた主

「わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる」(11)とヨハネが紹介した主イエスは、「聖霊と火で洗礼をお授けになる」方でした。ところが、当の本人が登場すると、何とヨハネから洗礼を授けられようと言われたのです。洗礼を授けるはずの方が洗礼を受けられる、それに一番当惑したのは、ヨハネでした。「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに」(14)と、主イエスに洗礼を授けることを断わるヨハネの言葉に、その困惑ぶりが表されます。

ヨハネは「悔い改め」を表す洗礼を授けていました。主イエスは、どうして悔い改めを表す洗礼を受けられたのでしょうか。主イエスにも罪はあり、それを消滅する必要があったということでしょうか。どうして罪を犯したことがなく、罪を悔い改める必要のない方が、悔い改めの洗礼を受けられたのでしょうか。

ヨハネと主イエスとは、どのような違いがあるかという点、ヨハネは民衆に向かい合い、いわば神の側に立って悔い改めを迫ったのに対して、主はその悔い改めをするべき民衆と共に、罪人の中にいて、罪人の一員として、いわば罪人の側に立たれたのです。その姿こそ主の生涯であり、主の使命でもありました。罪人と共に立ち、罪人と同じ者となってくださった、それによって罪人の身代わりとして十字架にかけられるべき救い主となってくださったのです。主イエスの生涯と働きは、わたしたち罪人の身代わりとなって十字架にかけられ、その贖いを果たすことでした。その生涯のすべては、わたしたち罪人と同じ地平に立って、ご自身の方から罪人に手を差し伸べ友となれるものでした。ここに悔い改める必要のない方が、悔い改めのヨハネの洗礼を受けられた意味があります。

2. 罪人の一員となられる主

マタイは、福音書の冒頭で主イエスの系図をあげ、主がダビデの子孫、ユダ王国の王家の子孫としての由緒正しき系統にあることを明らかにしました。それは救い主としての資格証明でした。しかし同時に、そこに四人のいわくつきの女性の名を連ねることで、実は主がアダムと共に墮落したアダムの子孫の救い主となられたことをも明らかにしたのです。アダムの子孫に名を連ね、罪人の列の中に自らを置くことで、罪人と連帯していただき、罪人の友、仲間、一員となって、その罪人の罪を贖う方、身代わりとして引き受けてくださる方となってくださったのでした。ここに主イエスが、群衆に混じって、彼らと共に悔い改めの洗礼を受けてくださった意味があります。主はわたしたち罪人の身代わりとして、この洗礼を受けてくださることにより、罪の償いの生涯と使命を開始してくださったのでした。こうして主は、インマヌエルとして、わたしたちのただ中に、わたしたちの罪と悩みと悲惨の現実のただ中に来ていただき、そこに共にいていただき、それをすべてご自身のものとして引き受けてくださったのです。アダムの子孫となられた主イエスは、わたしたちの悩みのただ中に来ていただき、わたしたちの側に立ってわたしたちを救い、助け、慰める方として、わたしたちのただ中に、今もいてくださるのです。「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているのです」(ガラテヤ3:26,27)。わたしたちが、洗礼によってキリストに連なり、神の子とされるために、まず神の子がわたしたちの先頭を切って、洗礼を受けてくださったのでした。

(三川栄二)

カテキズム 子どもカテキズム問72,73

子どもカテキズム

問72 洗礼とは何ですか。

答 父・子・聖霊なる神さまの御名によって、
教会の信仰を自分の信仰として告白した人に、水を用いて、
イエスさまと共に十字架に死に、イエスさまと共に復活して、
新しい人として生きようにする礼典です。

こうして、私たちは教会員とされます。

証典聖句 マタイ28:19、ローマ6:4、ガラテヤ3:27

問73 赤ちゃんにも洗礼を施すのですか。

答 はい。

キリスト者の子どもは、恵みの契約によって、教会の中に入れられていますから、
洗礼を施します。

その他には、信仰を告白して、教会に許された人でなければ、
洗礼を施してはなりません。

証典聖句 コリントー7:14、コロサイ2:11、使徒16:31-32

参考教理問答 『ウ小教理』94-95、『ウ大教理』165-168、『ハイデルベルク』69-74

〈教会の大切な使命〉

復活の主イエス・キリストは、その昇天に際し、教会に伝道の使命を託されました。「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子としなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」(マタイ28:19,20)。これは、その重要性の故に、「大伝道命令」と呼ばれています。この大伝道命令の中に、「洗礼を授ける」という教会の使命が含まれていることに注目して下さい。父と子と聖霊の名によって洗礼を授けることは教会教育(「教えること」と並んで新約の教会にとって中心的に重要な使命であることを覚えましょう。

〈キリストとの結合〉

洗礼の「外的な感覚的しるし」(『ウ大教理』163)は「水」で洗うことですが、それによって表される「内的な霊的恵み」はキリストとの霊的結合です(ガラテヤ2:27)。それは上記「大伝道命令」の中の「父と子と聖霊の名によって(直訳すれば、

名に入れて)」という表現の中にも表されています。本カテキズムでは、ローマ6:4により、キリストの十字架と復活において受洗者がキリストと一つとされることを特に取り上げています。すなわち、洗礼において私たちは「イエスさまと共に十字架に死に、イエスさまと共に復活して、新しい人として生きようようにされる」のです。

〈契約のしるし〉

旧約の礼典としての割礼同様、新約の礼典としての洗礼もまた契約のしるしとしての意味を持っています。成人洗礼の場合、それまで契約の外にいた受洗志願者はキリストへの信仰と服従を告白し、洗礼を受けることによって契約の中に入れられ、教会員とされます。

しかし、両親または片親が信者の場合、その子は契約の中で生まれたので、「契約の子」と呼ばれ、赤ちゃんの時に洗礼を受けることとなります。契約の子は、成人した時に、自ら信仰を告白して教会の陪餐会員(聖餐を受けることのできる成人会員)となります。(宮崎彌男)

テキスト マタイによる福音書3章13～17節
カテキズム 子どもカテキズム問72,73

〔単元のねらい〕

「子どもたちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。」欧米では、洗礼盤を設置する台に、この御言葉を刻印したものが数多く造られていると聞きます。筆者の教会のそれには、御言葉を刻んでおりませんが、洗礼盤を正面のどこからでも見えるように設置しております。洗礼盤じたいが上記の主イエスの招きを告げる象徴であると理解してのことです。私どもは、子どもたちへの洗礼への招きを信じる教会です。契約の子らに、礼拝堂に入堂する際に、自分たちが洗礼を受けた者であることを繰り返して意識させることは、神の民の家である教会の教育にとって本質的に重要なことです。古の神の民は、過越の祭りの度に、「この儀式にはどういう意味があるのですか」と問わせました。洗礼盤が教育的なシンボルとしての機能を豊かに果たすためには、繰り返してこの礼典の意味を説くことが必要です。本日は、契約の子には、自分への神の契約を意識させ、自らその意味を問うことができるように励ましてください。地域から通ってくる子らには、主イエスが洗礼をお受けになられたのは、罪人の友となり、罪人を救うためであること、救いへと招いておられる意味であることを告げてください。

「イエスさま、洗礼を受ける！」

イエスさまの半年前に生まれたヨハネという人がいました。この人はお母さんのマリアさんの親類の人でした。ヨハネは、ユダヤの荒れ野でイナゴと野蜜を食べ、毛皮をまとって、神さまの言葉を語る人となりました。「悔い改めよ。天の国は近づいた。」と大声で叫び、悔い改めたしるしとして洗礼を授けていました。今、大勢のユダヤ人たちがヨハネのところに来て、自分の罪を告白して、ヨルダン川で洗礼を施してもらっています。

ところがなんとその中に、イエスさまも混じって、やって来られたのです。イエスさまも洗礼を受けるために来ておられるのです。それを知った、ヨハネさんは、大慌てです。「イエスさま、なぜ、わたしのところに来られたのですか。わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに。やめてください！」一生懸命、洗礼を受けることを思いとどまらせようとがんばったのです。するとイエスさまは仰せになられました。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」

何故、ヨハネさんは、イエスさまに洗礼を授けることを嫌がったのでしょうか。それは、イエスさまが、どなたさまであるかを、知っていたからです。イエスさまこそは、水で洗礼を施すのではなく、神さまの霊によってユダヤの人々に洗礼を施すことのおできになる救い主であられること、キリストであられることを知っていたのです。ですから、ヨハネさんは身を屈めるようにして、「みなさん、わたしなどは、このイエスさまの履物をお脱がせする事だってできません。自分とは比べられないほどに偉いお方がイエスさまなのです。」と心から紹介したのです。

何よりも考えてみて下さい。ヨハネさんは大声で叫んでいたのです。「悔い改めなさい、悔い改めたら、それにふさわしい生き方をしなさい」つまり、洗礼を授けてもらいにやって来た人たちは、自分のことをこう考えていたのです。「神さま、わたしは、罪人です。これからは、信仰によって生きて行きます。ふさわしい行いをしますから、神さまのお怒りを受けなくてすむように助けて下さい」

それなら、洗礼をお受けになることを求められたイエスさまも、同じように罪を悔い改める必要があるとお考えになっておられるのでしょうか。いいえ、まったく違います。イエスさまは、ヨハネさんが考えていた通りのお方、救い主なのです。

それなら、なぜ、イエスさまが洗礼を受けなければならぬのでしょうか。それは、イエスさまが、ユダヤ人のお友だちであることを明らかにしたいからです。ユダヤ人は、神さまに求められる正しいことをするべきです。もちろん、イエスさまは、自分のことを罪人であるなどとはまったく思ってもおられません。反対です。イエスさまは、神さまの独り子です。世界でたったお一人の尊いお方です。けれども、洗礼を受けることによって、ユダヤ人の友、仲間であることを証明されるのです。いえ、ユダヤ人だけではありません。僕たち私たちと同じ罪人の立場に立ってくださるためなのです。イエスさまは、罪は犯されませんが、洗礼を受けてくださることによって、僕たち私たちと同じ立場に立ってくださったのです。僕たち私たちの仲間の一人になってくださったのです。

人となられた神さまの御子のイエスさまは洗礼をお受けになられました。それなら、僕たち私たちは、もっともっと洗礼を受ける必要がありますか。「僕は、洗礼を受ける必要なんかないさ」と言い切れる人が、もしいるなら、その人は、神さまの御前に悔い改める必要がまったくない人のはずです。悪い心をもったことも、悪い言葉を言ったことも、悪い行いをしたこともない、100点満点の子どものはずです。でも、そのような子ども、人間は、世界中でただお一人、神さまの御子のイエスさまだけではないですか？ しかも、そのイエスさまが洗礼をお受けになられたのだったら、僕たち私たちは、もちろん洗礼を受ける必要があ

るのではないですか？

さて、イエスさまが洗礼をお受けになられたとき、天が開かれ、イエスさまは、聖霊が鳩のように御自分の上に乗ってこられるのを見たのです。そればかりか、天のお父さまからこのような声を聞かれました。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」

皆のなかには、赤ちゃんのときに洗礼を受けているお友だちもいますね。お父さんとお母さんが洗礼を受けているお友だちは、赤ちゃんのときに既に洗礼を施されているのです。けれども、覚えているお友だちはいないでしょう。あるお友だちは、大声で泣き叫びました。でも、そのとき、天のお父さまは、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と呼びかけてくださったのです。

なぜなら、洗礼を受けた子は、イエスさまと一つに結ばれてしまったからです。とても不思議なことですが、まだ赤ちゃんで、何一つとしてよいこと、立派なことができなくても、神さまの御子のイエスさまと一つにさせていただけるという約束の洗礼を受けたおかげで、既に、神さまの子どもとされているのです。だから、あなたがそのことを心から信じることができたときには、「イエスさまを信じます」と、教会の前で告白してください。

もちろん、洗礼を受けていないお友だちもたくさんいますね。でも、イエスさまは、あなたのためにも洗礼を受けられました。それは、あなたのお友だちになって、あなたの罪の身代わりに死んで、あなたを神さまの子どもにするためです。このイエスさまを信じた人は、誰でも洗礼を受けられます。ですから、洗礼を受けられるようにお祈りしましょう。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙6章3節後半

キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、
またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。

〈ねらい〉

イエス様が洗礼を受けてくださった意味を考える。

〈展開例〉

①考えましょう。

1. 洗礼式の意味について

みんなは洗礼式を見たことがありますか。

洗礼式では何が使われますか。(水)

私たちは手が汚れたら何で手を洗いますか。

水で洗って手をきれいにします。

水が汚れを落とすように、神様はイエス様によって私たちの罪をきれいにしてくださいました。

洗礼はイエス様を信じる人がイエス様につながって神様の子供とされたしるしです。

2. イエス様にはきれいにしなければならない罪がありましたか。

(いいえ、イエス様は罪のない神様の御子です)

3. ジャあ、どうしてイエス様は洗礼を受けられたのですか。

(私たちが救うために私たちと同じようになっ
てくださった。)

②洗礼式について話しましょう。

教師自身が洗礼を受けたときのことを生徒に話してあげましょう。洗礼式の写真などがあれば見せてあげるといいでしょう。

生徒の幼児洗礼のときの写真などがあればあらかじめ、用意しておいてもらう。

〈折り〉

イエス様が私たちと同じように洗礼を受けてくださったことを感謝いたします。私たちもイエス様にならっていつの日か洗礼(信仰告白)に与ることができるよう。

くるくるハトをつくらう (図版は125ページに掲載しています)

イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。(マタイ3章17節)

用意するもの

- ・スチロールトレイ(深さ3センチ以上)
- ・竹ひご、細いストロー、太いストロー(5センチ)、セロテープ、糸、マジック

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①ヨルダン川で洗礼を授けていたのはだれ？（→ヨハネ）
- ②ヨハネはイエスさまにも洗礼を授けた？（→授けた）
- ③それはイエスさまも罪人だから？（→イエスさまには罪はない）
- ④イエスさまが洗礼を受けてくださったのは、私たちが洗礼を受けるため？（→私たちが洗礼を受けるため）
- ⑤イエスさまが水から上がると、何が降って来た？（→霊が鳩のように降ってきた）
- ⑥天からはどんな声が聞こえてきた？（→これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

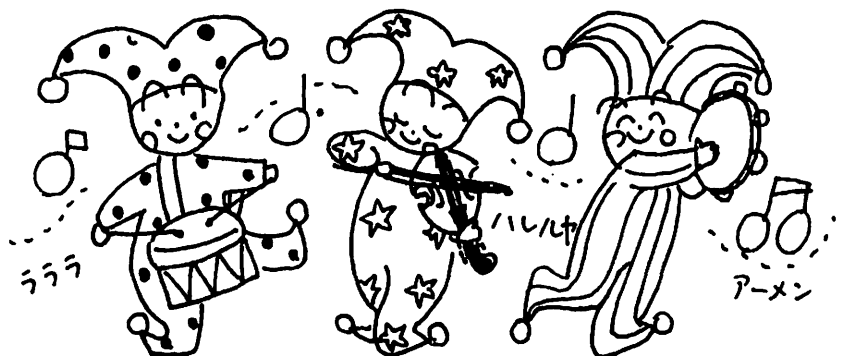
- ①洗礼は誰の名前によって授ける？（→父・子・聖霊の神さまの名前）
- ②洗礼では何を使う？（→水）
- ③教会に来た人には誰にでも授けていい？（→教会の人と同じようにイエスさまを信じ、信仰の告白をした人に授ける）
- ④キリスト者の子供は洗礼を受ける？（→受ける）
- ⑤神さまがそのように子供たちも教会の一員としてくださる契約を何の契約と言う？（→恵みの契約）

〈考えてみよう〉

外から家に帰って来たら、まず何をしますか。手を洗うでしょう。水を使って、きれいにします。夜にはお風呂に入って、体全体をきれいにしましょう。教会という神さまの家に入るときにも、まず水で洗わなければいけません。それが洗礼です。ただし、洗礼は、体の汚れではなく、罪という汚れを洗い流すためのものです。しかし、まだ、洗礼を受けていない人もいます。でも、イエスさまを信じるなら、罪は赦していただけます。洗礼を受けたいという気持ちがあれば、今はそれで十分です。その気持ちを大切にしてください。そして、いつか洗礼を受けることができるように、もっともっとイエスさまのことを学んでいきましょう。

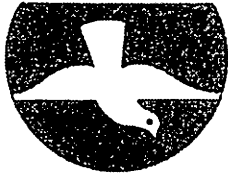
〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。イエスさまも、私たちのために洗礼を受けてくださいました。洗礼を受けている人も、これから受けようとしている人も、みんなイエスさまを信じることができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



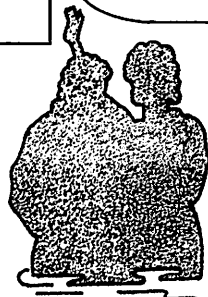
✂ ワークシート ✂

✚ 聖書をひらいて(マタイ3:13~17)の中にみことばを入れてね!



正しいことをすべて行うのは、われわれにふさわしいことです。

これは わたしの○○○○○、
わたしの心に○○○○○。



✚ 考えてみよう

①罪のないイエスさまが、なぜ、罪がゆるされるための洗礼を受けなければならないのですか?

✚ 書いてみよう

問 72
洗礼とは何ですか?

答え 父・子・聖霊なる神さまの御名によって、教会の信仰を、自分の信仰として告白した人に、水を持ちいて、イエスさまと共に死にイエスさまと共に復活して 新しい人として生きるようにする礼典です。

✚ やってみよう



小児洗礼 信仰告白 契約の子 洗礼(入会)式 これらのことばで、知っていることばがありますか? 知っているお友達が、みんなに説明してみましょう。最後に、これらのことばを一度ずつ使って、一つの文章になれば、カンペキです!!

✚ 今週の暗唱聖句

キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けた私たちがみな、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。
ローマの信徒への手紙6章3節

【目標】

洗礼について考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→マタイによる福音書3章13～17節を改めて生徒と読む。

【ポイント】

洗礼には水が使われる。それは神様の御名による、罪を洗い流す水である。洗礼の祝福は新生の祝福であり、洗礼とは、主によって全ての罪が赦され洗い流されたことの証、その太鼓判である。受洗への憧れが聖霊によって子どもたちの心に呼び覚まされ、洗礼の祝福へと導かれるように祈りつつ子どもたちと向き合いたい。

③生徒と一緒に考える

→教師が洗礼を受けたことによって与えられた恵みを生徒と分かち合う。

Q. 洗礼に対してどんなイメージをもっていますか？

Q. いくらタオルで体をゴシゴシと洗っても落ちない汚れが私たちにはあります。それは何でしょうか？

Q. その汚れを落とすものは何でしょうか？

Q. 洗礼を受けるために、何か特別な資格は必要ですか？

→すべての者が招かれている（マタイ28:19）。

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. 洗礼を受けたいと思いますか？ それはなぜですか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？



テキスト マタイによる福音書26章26～30節

1. 罪の赦し

主は聖餐を、過越の食事の時に制定されたことで、聖餐が過越の食事であり、そこで意味されたことは、まさに過越であることを明らかにされたのでした。つまり聖餐とは、「キリストが私たちの過越の小羊として屠られた」ことを表わすものでした（コリントー5:7）。そこで示されたことは、私たちが死から生命へと至るためには、小羊の犠牲が必要であり、そのために小羊の肉が裂かれ、その血が流される必要があるということです。その過越の小羊こそ、キリストご自身でした。キリストは「世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ1:29）であり、これは「罪が赦されるように、多くの人のために流される」キリストの血（マタイ26:28）を表わすものでした。そこで神が私たちと「新しい契約」（エレミヤ31:31以下、32:38以下、ルカ22:20）をキリストの血によって締結してくださったことを確証するものでした。そこからもたらされる効果は、キリストの贖いによる罪の赦しの確かさです。私の罪は、キリストによって確かに贖われ、確かに罪の赦しを与えられたことを、信じる事が出来るし、そのことが保証されているということです。

2. 神による養い

さらに聖餐は、私たちが日毎に養われていく必要を覚えさせます。身体が栄養を必要とし、それなくしては成長はおろか、生命を維持していくことが出来ないように、私たちの信仰もそうであることを示します。信仰が日毎に養われていくために必要な糧とは何でしょうか。それはキリストが備えてくださり、キリストからいただくものであ

ると同時に、それはキリストご自身であることです。聖餐によって私たちは、キリストの「肉と血」を食します。キリストご自身を噛み砕くことで、それが私たちの栄養となっていくのです。私たちの信仰と永遠の生命のための養いは、キリストが備えてくださるものであり、またキリストご自身を食することで、私たちは信仰を維持し、成長し、養われていかなければなりません。信仰の栄養供給を絶やさずにしていく必要があります。ロゴスなるキリスト、つまり神の御言葉こそ、私たちの信仰の養いであり、永遠の生命に生きる食事なのです。

3. キリストの臨在

しかし何より聖餐が示すことは、そこにキリストが共におられる、「キリストの臨在」です。パンとぶどう酒によって表わされたことは、そこに「キリストの身体がある」ということです。それは勿論、物理的にということではなく、聖霊によってですが、信仰において、霊的にキリストは、今確かにここにいます、この「キリストの霊的臨在」を表わし、またそれを保証するものです。インマヌエルなる方ご自身が私たちと共にいてくださることで、「神我らと共にいます」との約束（恵みの契約）が成就されます。それは神との永遠の交わりの約束であり、その確証です。神との絶えることのない交わりこそ、「永遠の生命」であり、その場こそ天国です。ですから聖餐は、永遠の生命の保証であると共に、「御国の前味」であり、この地上にあって既にその確証を与えられているのです。
(三川栄二)

カテキズム 子どもカテキズム問74,75

子どもカテキズム

問74 聖餐とは何ですか。

答 イエスさまの言われた通りに、
パンとぶどうジュースを用いて、
十字架で裂かれたキリストのお体と流された血を覚え、
信じる者と共におられるキリストを覚え、
再び来られるキリストを覚えるための礼典です。
これによって、イエスさまとの交わりが深められます。

証換聖句 コリントー10：16、11：23-26

問75 赤ちゃんは聖餐にあずかれますか。

答 いいえ、自分で信仰を告白するまではあずかれません。
洗礼を施されていない人や、教会が受けてはいけなさと決めた人もあずかれません。
私たちは、一日も早く、救いの喜び、聖餐の祝いにあずかることができるよう、
聖霊の働きを求めます。

証換聖句 コリントー11：27-32、5：9-13

参考教理問答 『ウ小教理』96,97、『ウ大教理』168-177

〈主の死を告げ知らせる〉

聖餐も新約の礼典ですから、洗礼と同じように、「外的な感覚的しるし」とそれが表す「内的な霊的恵み」の二つの要素（『ウ大教理』163）から成ります。前者は「パンとぶどう酒を与え、また受けること」であり、後者は、「キリストの死」（『ウ小教理』96）です。使徒パウロは「あなたがたはこのパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです」と言っています（コリントー11：26）。私たちは聖餐にあずかるたびごとに「主の死」を覚えます。私たちの罪のあがないのために「十字架で裂かれたキリストのお体と流された血を覚える」のです。

主は私たちのためにいのちをささげて下さいました。ここに真実の愛が示されました（ヨハネ15：13、ローマ5：8）。私たちは聖餐のたびごとに、主の十字架の愛を深く覚え、罪の赦しと復活のいのちの恵みにあずかるのです。また再びキリストが

私たちの所に来られて、み救いを完成して下さいる日を頭をもたげて待ち望むのです。

〈主の体をわきまえて〉

聖餐には信仰を告白した者だけがあずかります。赤ちゃんの時、契約の子として幼児洗礼を受けた者でも、信仰告白するまでは聖餐にあずかることはできません。なぜならば、使徒パウロも「主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです」（コリントー11：29）と言っていますように、聖餐の意味がよくわからずにあずかる時、自分自身に裁きを招く恐れがあるからです。

成人でまだ洗礼を受けていない方や、陪餐停止の戒規に服しつつある兄弟姉妹の場合も同じことが言えます。一日も早く聖餐にあずかることができるように、とりなしの祈りをささげたいと思います。（宮崎彌男）

テキスト マタイによる福音書26章26～30節
カテキズム 子どもカテキズム問74,75

〔単元のねらい〕

特に、マタイによる福音書は、クリスマス物語と聖餐式の制定辞を密接に結びつけているので、この恵みを見落とさずに語りたい。今回の説教は、契約という概念を軸に、神との関係の回復を強調した。子ども向け説教ではないが、教師が説教を通して聖餐式を受けている恵みにまず気づいていただきたい。聖餐式を恵み深い儀式として守っていることを、教師が実感を含めて証しすることによって、聖餐式を受けられるように、子どもたちを信仰告白・洗礼へと動機付けたい。

「契約の血」

この聖書箇所には描かれていますのは、過ぎ越しの食事の場面です。受難物語の頂点に位置する食事ですので、十字架の苦しみの影が色濃く覆っていますが、この食事そのものは、決して暗いものではありません。過越の食事は、イスラエルの年中行事において、最大の喜びの食事です。出エジプトの出来事を想起して喜ぶときであります。イスラエルが、エジプトで奴隷であったにもかかわらず、神は、モーセを立てて、救い出してくださいました。出エジプトとは、エジプトからの解放であり、抑圧からの解放であり、貧困からの解放であり、差別からの解放でありました。

イスラエルの民は、過越の食事を通して、歴史に示された神の奇跡的な介入に思いを寄せ、改めて感謝し、そして、新たな神の救いに思いを向けます。過去の救いを思い起こす食事は、未来の救いへの希望を呼び起こす食事でもあります。ローマ帝国下で多くの苦しみを強いられていた民は、ローマ帝国からの解放とエジプトからの解放とを重ね合わせて、新しい出エジプトを待ち望みながら、過越の食事を守っていました。

イエス様は、十字架につけられる前の夜、この過越の食事を弟子たちとされたとき、聖餐式を制定なさいました。過越祭において、小羊の血を鴨居に塗った家は、死から免れ、小羊の血を塗っていない家では、長男が死にました。イエス様は、小羊の血によって死から救われるという記憶を用

いて、真の神の小羊であるイエス・キリストの十字架の血潮によって、死から救われることを明らかにされました。

過越祭はエジプトからの解放を記念するものであり、聖餐式は罪からの解放、つまり罪の赦しを記念します。聖餐式は、罪が赦されることによって、神様との関係が回復されたことを、祝い喜ぶ食事です。また、この罪の赦しは、マタイによる福音書1章21節の「罪から救う」というイエス様の紹介と結びついています。イエス様は、ご自分の民を罪から救う救い主としてお生まれになったので、罪を赦すために御自分の血を十字架に注いでくださいました。そのことによって、神の民の罪が赦され、神様との関係が回復されました。

また、マタイによる福音書は、イエス様の誕生によって、「神我等と共にあり」というインマヌエルが実現したと記しています。神が、イエス様において、我等とともにいてくださいます。この恵みは、実は、イエス様の十字架と密接に結びついていたのです。イエス様が、十字架で血潮を流して、私たちの罪を償ってくださるので、神が、イエス様において、我等と共にいてくださるので、聖餐式は、このインマヌエルの恵みを覚え、このことを可能ならしめてくださったイエス様の十字架の苦しみに思いを馳せて行うものです。

ところで、28節に、「この杯は、罪のゆるしを得させるように、多くの人のために流すわたしの

血で立てられた、新しい契約である。みな、この杯から飲みなさい。」と記されています。イエス様の十字架の血潮は、「契約の血」と呼ばれています。契約とは、約束以上の確かさにおいて成立しているものです。神様は、約束通り、イスラエルの民をエジプトから連れ出しました。それと同じように、約束通り、イエス様の血潮において、御自分の民を罪から救い出してくださいませ。これは、神の契約であり、神の裁可であり、神の決断です。神が、キリストの注がれた血潮において、罪を赦そうと決心され、決断され、契約として立ててくださいませ。聖餐式にあずかる者は、キリストの贖いを受けた者として、完全に罪を赦されが神様との契約関係に入れられています。これが神様の契約であり、神様の決意です。

ですから、聖餐式は、契約関係の確認の儀式でもあります。キリストを受け入れる洗礼式が、罪を赦される契約調印式です。人は洗礼を受けて神様との契約関係に入り、神の民となります。聖餐式を行う度毎に、神との契約関係に入れられていますことを確認します。キリスト者になっても罪深く、悔いてはまた罪を犯し続ける汚れた者であります。神はお見捨てになることなく、契約関係を保ち続けてくださいませ。神の民は、聖餐式の食事によって、キリストと共なる食卓につき、キリストから養われ、霊的に成長します。

神様は、契約と関わる一番大切な事柄において、洗礼式の水と聖餐式のパンと葡萄酒とを備えてくださいませ。言葉による宣言だけでなく、感覚的なしるしを通して、私たちが神様との契約の中に確かに入れられていることを実感するためです。それも、一生涯に一度の洗礼式によってだけでなく、一般には月に一度なされる聖餐式によって、いつも契約の中に留まっていることを確信させてくださるのです。神様は、私たちが言葉によるだけでは契約の恵みを実感できない弱さを抱えていることをご存知であられ、私たちが神との契約関係に一生涯留まることができるように、礼典

を定め、特別に配慮してくださいませ。

契約関係として聖餐式を理解するとき、洗礼を受け契約関係に入れられている者しか聖餐式にあずかれないことが明らかとなります。幼児洗礼を受けた赤ちゃんは契約の民ですから、その意味では、聖餐式にあずかることができるかと思えるかもしれません。しかし、赤ちゃんを含め契約の子は、信仰告白をしないと聖餐式にあずかることができません。聖餐式は、契約の民が神様との契約関係に入れられていることに感謝し、これからも契約関係が守り続けられることを喜ぶ儀式だからです。幼児洗礼を受けた契約の子どもは、聖餐式にあずかるまえに、契約のなかに入れられています恵みを感謝し、契約の民の一員として歩み始める決意を神様の御前に表明しなければなりません。これが、信仰告白です。契約の子どもは、自分が神の契約の民であることを一度ははっきりと口で告白し（信仰告白）、聖餐式に参加できます。

そして、マタイによる福音書は、聖餐式を「父の国で新たに飲むその日まで」という言葉で限定しています。イエス様が最後の晩餐において弟子たちと共にパンとブドウ酒を食されたように、父の国で新たに飲むその日が、やがて訪れます。聖餐式は、やがて訪れるその日を待って、行われます。聖餐式は、天国における祝宴を地上に映し出すものであり、終末のときに喜びの宴を先取りするものです。

復活の主が、聖餐式において重的な仕方で、パンと葡萄酒においてご自分を差し出すためです。牧師・長老が配餐するのは、キリストの代理人として、キリストの血と体を差し出しています。配餐は、給仕する者の仕事です。聖餐式において、復活の主が私たちに仕えてくださいませ。仕えてくださるキリストに感謝して、わたしたちも仕える者に変えられます。再臨の主が来られるときに、僕として仕えている姿を見られる者は幸いです。教会は、聖餐式を尊びつつ、仕える者として自らを形成します。 (岩崎 謙)

〔今週の暗唱聖句〕 マタイによる福音書24章27節後半～28節

皆、この杯から飲みなさい。

これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。

〈ねらい〉

聖餐式にあずかれる日を待ち望むよう促す。

〈展開例〉

1. 聖餐式の意味を確認する。

パンとぶどう酒は何を表していますか。

- ・パンは十字架の上で裂かれたイエス様のからだを表しています。
- ・ぶどう酒はイエス様が流された血を表しています。

聖餐式でどんなことがわかるの？

- ・イエス様が私たちのために十字架にかかれ、その命を与えてくださったこと。
 - ・その恵みが目で見えるように確かであること。
2. 私たちはどうしてパンとぶどう酒がもらえないの？
- ・赤ちゃんのときに洗礼（幼児洗礼）を受けた子供は大きくなって礼拝の中で、「私はイエ

ス様を信じ、ずっとイエス様についていきます」と約束（信仰告白）すれば、聖餐式にあずかることができます。

- ・神様はみなさんが聖餐式にあずかれる日がくるようにと、日曜学校をとおして導いておられます。
 - ・教会の大人の人たちも、みんなと一緒に聖餐式にあずかれる日がくるのを楽しみに待っているのです。
3. 教師が聖餐式をとおして受けた恵みについて自分の言葉で伝えてあげましょう。

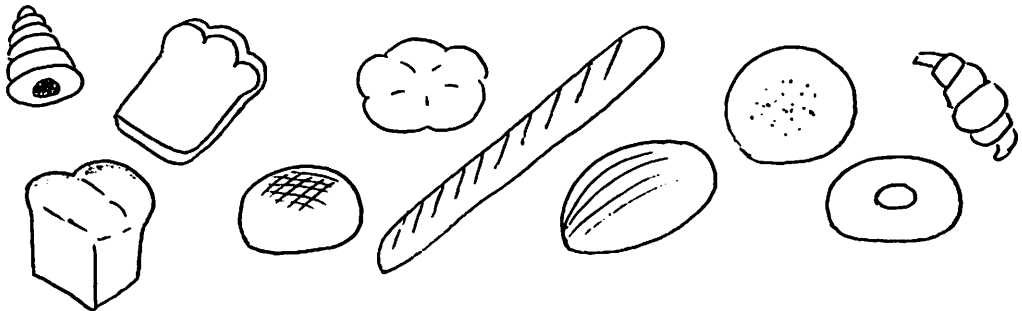
〈折り〉

天のお父様、私たちが大きくなって、大人の人たちと一緒に聖餐式にあずかることができますように。イエス様のお名前によってお祈りします。
アーメン

粘土でパンを作ろう！

用意するもの

- ・粘土（カラー粘土）100円ショップなどにあります。白、茶色、黒、黄色、赤など（色がそろわない場合は、白色のカラー粘土に絵の具をまぜて色のついたカラー粘土をつくります）
- ・粘土のへら、ねんど板、工作板など。紙皿
- ・おいしそうなパンの写真など



好きな色の粘土でいろいろなパンを作りましょう。

できたら紙皿にのせて楽しいお食事会？をしてみませんか。

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①この食事は何の食事だった？（→過越の食事）
- ②イエスさまは裂かれたパンを何だと言われた？
（→わたしの体）
- ③杯のぶどう酒のことは何の血だと言われた？
（→契約の血）
- ④その契約の血で何がなされる？（→罪が赦される）
- ⑤この次の日、イエスさまはどうなった？（→十字架にかかって死なれた）
- ⑥もうイエスさまと食事をすることはできない？
（→父の国で新たに飲むことができる）

〈カテキズムの内容を確認してみよう〉

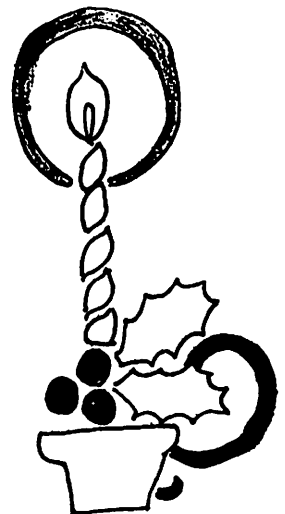
- ①聖餐では何を使う？（→パンとぶどうジュース）
- ②それは何を表すもの？（→キリストの体と血）
- ③聖餐のとき、イエスさまはどこにおられる？
（→パンとぶどうジュースをいただく私たちと共におられる）
- ④誰でもパンとぶどうジュースをいただいている？（→洗礼を受け、自分で信仰を告白している人だけいただくことができる）

〈考えてみよう〉

朝、昼、晩と、きちんとご飯を食べているでしょうか。ご飯を食べないと、元気が出ませんし、体も大きく成長できません。信仰も、同じように、規則正しい食事によって成長します。それが、聖餐です。聖餐が行われるとき、みんなはどうしているでしょうか。まだ食べられないから関係ないと思っているのでしょうか。でも、まだ聖餐を受けることができなくても、それをよく見てほしいと思います。パンはイエスさまの体であり、赤いぶどうジュースはイエスさまの血です。食べられなくても、そのことをよく思い出してください。そして、イエスさまご自身がそこにおられることを感じ取ってください。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。私たちのために、イエスさまは十字架にかかって死んでくださいました。そのことを、いつも覚えておくことができますように。特に、教会で聖餐が行われるとき、そのことを信じることができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



✂ ワークシート ✂

✝ 聖書をひらいて (マタイ26:26~30) ○の中に漢字か、カタカナを入れてね

イエスは、○○を取り、○○の祈りを唱えて、
『取って、○べなさい。これはわたしの○である。
また、杯(さかずき)を取り、○○の祈りを唱えて、
『この杯から○みなさい。これは○がゆるされるよう
にと多くの人のために流されるわたしの○である。』



✝ 考えてみよう

- ①聖餐式の時の聖餐卓は、礼拝堂のどこにありますか？それは、なぜですか？
- ②裂かれたパンとぶどうジュースを、味わい、飲み込むことは、わたしたちに何を教えて、くれますか？

✝ 書いてみよう...

問 74

せいさん
聖餐とは何です
か？

答え イエスさまの言われた通りに、パンとぶどう
ジュースを用いて、十字架で裂かれたキリス
のお体と流された血を覚え、信じる者と共におら
れるキリストを覚え、再び来られるキリストを覚
えるための礼典です。これによって、イエスさま
との交わりが深められます。

✝ やってみよう

- ①今週からアドベントに入ります。カレンダーにキャンデーや一口チョコを一日に一個ずつ貼ってアドベントカレンダーを作りませんか。
- ②ミニ降誕劇や、クリスマス賛美の合唱の練習を始めませんか。皆で、力を合わせて、よきものを捧げることができますように。
- ③だんだん寒くなってきました。分級の終わりは、外に出て、「押しくらまんじゅう」！！また、来週！！



✝ 今週の暗唱聖句

① 皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。

マタイによる福音書 24 章27節後半～28節

【目標】

聖餐について考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？(分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である)

②改めて御言葉に取り組む

→マタイによる福音書26章26～30節を改めて生徒と読む。

【ポイント】

聖餐は、主イエスが私たちのために残して下さった、最大の目に見える遺産であると言える。パンが裂かれたということは、分け与えるために裂かれたということである。主は自らの体を私たちの霊的命を支えるパンとして裂いて下さった。さらに過越しの小羊の血よりも尊い御自身の血を流されて、契約不履行者の私たちの罪を贖い、赦しを与えて下さった。聖餐にあずかることこそ、主イエスの命と赦しがこの身に与えられていることを繰り返し確かめられる唯一の方法である。

③生徒と一緒に考える

→教師が聖餐式によって与えられている恵みを

生徒と分かち合う。

Q. 聖餐式に対してどんなイメージをもっていますか？

Q. 主イエスは食事の時に聖餐式をされました。教会での聖餐式も同じように食事を表わしています。食事のためのテーブルはありますか？メインディッシュは何ですか？パンを裂いてくださる主イエスはそこにおられますか？

Q. ひとかけらのパンとひと口のぶどう酒ではお腹は一杯になりませんが、それを食べる教会の方々は満たされます。聖餐で何が満たされるのだと思いますか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. パンは裂かれて、ぶどう酒も分けられて、決して取り合いにはなりません。すべての人が招かれています？あなたは聖餐を受けてみたいと思いますか？それはなぜですか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト イザヤ書9章1～6節

(1) 神に信頼する信仰

預言者イザヤがこのみ言葉をとりついだ当時、南ユダ王国は戦争の恐怖のただ中に置かれていました。おりしも大国アッシリアが勢力を増し加え、中東世界をその支配下に置こうとして迫りつつありました。そうした中でシリアの王レツインと北イスラエル王国の王ベカは同盟を結び、アッシリアと対抗しようとはかります。しかし、南ユダ王国がこの同盟に加わろうとしなかったため、レツインとベカはまず南ユダを攻めて、その都エルサレムに思い通りになる政権をつくろうとしたのです。このシリアと北イスラエルの連合軍が南ユダを脅かしていた状況が「闇」「死の陰」といった言葉で言い表されています。

ところで、このとき預言者イザヤは、南ユダの王アハズに、神に信頼して静かに落ち着いているように忠告しました（7章3節以下）。み言葉に従っているなら神が必ず戦争の危機を遠ざけ、恐れを取り除いてくださるし、神のみ前ではシリアも北イスラエルも恐れるに足りないからです。

しかしアハズはイザヤの忠告に耳を傾けず、アッシリアの軍事力に頼る道を選びました。その結果、さらに大きな脅威を呼び込むことになったのです。南ユダがアッシリアに援軍を頼んだことがきっかけとなって北イスラエルはアッシリアによって滅ぼされ、南ユダ自身もアッシリアに隷属し、そこから持ち込まれた偶像にひれ伏すにいたります。

いかなる危機のときにも、試練や困難のときにも、人間の力に頼らず、神に信頼すべきことを、神は時代を貫いてご自身の民たちに問いたもうのです。

(2) ひとりのみどりごが生まれた

イザヤは「ひとりのみどりご」の誕生を告げます。このみどりごこそ、神の民を統べ治めるまことの王です。この世の王はこの世の力、人間の力に頼り、軍備を増強し、経済的な繁栄をもたらそうとします。しかし神への信頼のないところでは、ついにまことの平和が実現することはありません。

このみどりごこそ、神へのまったき信頼と服従によって統治する王です。この王のもとでこそすべての戦いは終息し、正義と公正が国を支配し、民は罪と死の縄目からときはなされ、楽しみと喜びとを与えられます。この王の主権は永遠に揺らぐことはありません。

この王こそ、ベツレヘムの家畜小屋の飼い葉桶の中で、無力な乳飲み子として生まれたもうた主イエス・キリストです。

私たち罪人を救う「万軍の主の熱意」が、このお方を私たちのもとに遣わしてくださいました。神の熱意は神のひとり子が人となって来たりたもうという出来事となってあらわされました。この乳飲み子を平和の君、まことの王として迎えるところに、ついに人間の手によっては生み出すことのできないまったき平和が実現するのです。まことの王イエス・キリストの十字架のみわざによってあらゆる敵意は滅ぼされ、私たちは闇から光、死から命にうつされたのです。主イエス・キリストのご降誕にさいして、主のみ言葉への信頼と服従とをあらたにされたいと思います。

(木下裕也)

テキスト イザヤ書9章1～6節

(単元のねらい)

多くの人々が霊的暗黒の中でクリスマスをお祝いしている中で、「真の光であるイエス・キリスト」、「罪から解放して下さるイエス・キリスト」、「平和の君であるイエス・キリスト」の三つのポイントからクリスマスの意味を知り、平和の君であるイエス・キリストを待ち望みたいと思います。

「闇に輝く光」

皆さん、もう直ぐイエス・キリストのお誕生をお祝いするクリスマスですね。街中にはきれいなライトが輝き、ジングルベルのメロディーが響いて、クリスマス一色です。でも、何と多くの人がクリスマスの主人公であるイエス・キリストを忘れて、クリスマスをお祝いしていることでしょうか。

今日私たちは、この聖書の箇所から、平和の君であるイエス・キリストに従う人生について御一緒に考えてみたいと思います。

まず、時代背景から見てみましょう。この時代、南王国ユダは、アッシリアに攻撃されて、占領されそうになっていました。こういうときにこそ人々は、信仰によって、神に頼って、神に委ねてこの危機を乗り切るべきでした。しかし、王をはじめ人々は、全く頼りにならない人間の力に頼ってこの危機を乗り越えようとしてしまったのです。そこで神は、一時期御自分の御顔を隠されたのです。しかし、神はいつまでもイスラエルの民に御自分を隠されているようなお方ではありません。イスラエルの民を見捨てられたままにしておくようなお方でもありません。父祖アブラハムとの契約を決してお忘れにならず、御自身の民の救いの道を、人の不真実を用いてでも開かれ、御自身の御業をなしていられるのです。

第一に、「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた」(1)と聖書は言っています。人々の不信仰が招いた恐るべき闇、それは、「死の陰の地」と言われるほどの大きな暗黒でした。そんな最悪の暗黒の中に

いた民に光が輝いたと聖書は言っています。これは人間の努力による解決でも、意思の強さによって乗り切ることでもありません。神様が一方的な恵みによって、暗闇の中に住む人々に臨んで、光を与えて、救い出されるということです。

今の時代、多くの人々が真の神を忘れて、霊的に暗黒の中を歩んでいるのではないのでしょうか。そして、それを解決するために様々な偽ものの光が輝いているのではないのでしょうか。例えば、神様を信じなくても幸福になれると教える人もいます。どんな神を信じていようと結局はその人の心のあり方が一番大切なのだと教える人もいます。更には、哲学という光もあり、道徳という光もあり、教育という光、高い学歴を身につければ幸福になれると教える人もいます。また、様々な新興宗教の光もあるかもしれません。勿論、哲学や道徳は決して悪いものではありません。しかし、私たちの人生を本当の意味で照らし、導き、様々な問題から解放してくれるのは、「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、『驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』と唱えられる」(5)とされている、クリスマスの日にお生まれになられたイエス・キリスト以外にはないのです。

第二に、光がこの世に来られたことによって、様々な重荷が取り除かれます。「彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を、あなたはミディアンの日のように、折ってくださった。地を踏み鳴らした兵士の靴、血にまみれた軍服はことごとく、

火に投げ込まれ、焼き尽くされた」(3-4)と聖書は言っています。南王国ユダがアッシリアという圧制者の重荷から解放されていくように、また、士師ギデオンの時代に主御自身が選びの民を用いてメディアンに勝利されたように(士師7:17-25)、私たちがまた様々な暗黒と重荷から解放されていくことを、この御言葉は教えているのです。

私たちににとって一番大きな暗黒、それは何でしょうか。それは、私たちが神に背を向けて生きている、罪という暗黒であります。そしてそれが結局私たちの人生の不幸の根本原因であると、聖書は言っています。多くの人々は、「人は生まれながらに良い存在である。しかし、環境がその人を悪に変えてしまうのである」と言っています。実に多くの偽ものの光が罪の問題に解決を与えようと言っています。しかし、私たちが罪という暗黒から本当に解放することができるのは、真の光であるイエス・キリスト以外あり得ないのです。真の光であるイエス・キリスト以外、私たちの罪を解決することのできるお方は他にはおられません。南王国ユダを神がアッシリアの圧制から解放されていったように、神はイエス・キリストによって、私たちの人生を罪という重荷、罪という圧制から解放して下さいのです。

第三に、罪から解放された人生には喜びと平和がもたらされます。「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれました。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、『驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』と唱えられる。ダビデの王座とその王国に権威は増し、平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって、今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる」(5-6)。神は確かにアッシリアを打ち破り、南ユダ王国に喜びと平和をもたらされます。それは、強力な軍事力による力任せの平和ではなくて、全ての軍事力を無にする主の働きによる平

和であり、主の働きによる本当の喜びなのです。神は、このクリスマスの日に生まれて下さった、「ひとりのみどりご」なるイエス・キリストによって、真の平和と真の喜びを与えて下さるのです。

私は、子どもの頃、駄菓子屋さんで盗んだことがあります。やってはいけないことをしてしまったので、私の心の中には平安がありませんでした。盗みをしてしまったという罪が私の心を締め付けました。毎日が苦しくて苦しくて仕方ありませんでした。とうとうある日私は思い切ってその駄菓子屋さんに行って盗んでしまったことを告白しました。そうしたら、その駄菓子屋さんのおばちゃんは、私が正直に告白したことを喜んで、赦してくれました。そして赦されたときに、私の心に平和がやってきました。ですから大切なことはイエスの前に罪を告白することです。「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです」(ローマ10:9-10)と聖書は言っています。イエスの前に罪を告白するときに、真の平安が訪れるのです。

私たちの人生で大切なことは、結局どなたとご一緒するかということです。クリスマスの日に生まれて下さった真の光であるイエス・キリストは、私たちの心の中にある罪がどんなに大きなものであったとしても、その罪を赦し、私たちに真の喜びと平和を与えて下さるのです。「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれました。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、『驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』と唱えられる」(5)。このお方の前に真心から罪を告白してそれを捨て去るならば、神はその人に真の平和と喜びを与えて下さるのです。イエスの前に真心から罪を告白して、喜びと平和をもってクリスマスを歩んでまいりたいと思います。(小堀 昇)

〔今週の暗唱聖句〕 イザヤ書9章5節

ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれました。

ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。

その名は、「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」と唱えられる。

〈ねらい〉

イエス・キリストは真の光として来てくださった。

〈展開例〉

クリスマスにはローソクに火をともしますね。真っ暗な中でローソクに火をつけると、とてもきれいです。でもローソクの火が消えてしまったら、何にも見えなくなってしまいます。

私たちの心も暗くなってしまうときがあります。悪いことをしたとき、どんな気持ちになりますか。うれしい気持ちになりますか。それともなんだか暗い気持ちになりますか。誰も見ていなくても、悪いことをしたことを自分の心はちゃんと知っています。心が苦しくなってくるからです。暗くなってくるからです。

イエス様はそんな私たちの暗い心を照らすためにこの世界に来てくださいました。私たちの心が暗いのは神様から離れてしまったからです。悪い

ことをしたら罰を受けなくてはならないことを私たちの心は知っているからです。この私たちの罪を減らし、私たちの代わりに罰を受けてくださるためにイエス様はこの世に来てくださいました。この暗さを減らし神様の光で照らすことができるお方はイエス様ただお一人です。イエス様は真の光だからです。

イエス様によって明るく照らされた私たちの心を、神様は本当の喜びでいっぱいにしてくださいます。それだけでなく、イエス様は私たちに正しいことをしたいと思う心をもくださいます。

暗闇に輝くローソクの光のようにイエス様はいつも私たちの心を照らし続けていてくださいます。

〈祈り〉

天のお父様、イエス様をおくってください、私たちの暗い心を照らしてくださったことを感謝いたします。主、イエス様のみ名によって。アーメン

キャンドルのアレンジメントをつくろう！ (図版は126ページに掲載しています)

用意するもの

- ・常緑樹の葉 (ヒイラギ、もみの木、ゴールドクレスト、ヒバ、スギなど) 他の葉でも
- ・リボン、木の実 (松ぼっくり、どんぐり、ヒイラギの実、クヌギなど)、オーナメント
- ・オアシス (吸水スポンジ)、ハサミ、針金、ローソク
- ・カゴまたは鉢かガラス容器、または背の低いコップやコーヒーカップ
(カゴを使用する場合は内側に透明セロファンを敷く)

はじめにやっておくこと

- ①オアシスを水につけておく。上から押さえると、中心部に吸水されないので注意。自然に水がしみ込むまで水に浮かべておく。容器の大きさに合わせてカットしておく。容器に入れ、角をカッターナイフでカットしておく。
- ②葉を適当な長さにカットしておく。木の実やオーナメントもさしやすいうように針金をつけておく。

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①この預言を語ったのは誰？（→イザヤ）
- ②いつ頃の人？（→イエスさまが生まれるより700年以上も前の人）
- ③イザヤは何という国にいた？（→南ユダ）
- ④そのころは平和だった？（→強い国に囲まれて平和ではなかった）
- ⑤イザヤは戦争する王さまを望んだ？（→神さまに信頼する平和の王さまを望んだ）
- ⑥ひとりのみどりごとは誰のことだった？（→イエスさま）
- ⑦私たちの闇とは何のこと（→罪）

〈考えてみよう〉

けんかの強いお友達が周りにはいるでしょうか。しかも、弱い人をいじめたりしていないでしょうか。そういうとき、私たちはどうするでしょうか。やめなさいと言えるでしょうか。かえって、恐いので強いお友達の仲間になって、自分を守るということがないでしょうか。預言者イザヤは、争いをやめて、平和の神さまを信じることを教えてくれました。イエスさまは、強い者としてではなく、本当に小さくて弱い赤ちゃんとして来てくださいました。イエスさまを信じる人は、力の強さに頼るのではなく、神さまが与えてくださる平和に期待するのです。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。イエスさまのお誕生を約束してくださいありがとうございます。みんながイエスさまを信じて、平和を与えられて、仲良くできるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



✂ ワークシート ✂

✚ 聖書をひらいて (イザヤ9:1~6)

ば ん ぐ ん ○ ○ ゆ
○ ○ っ ○ ん が ○
れ を な ○ ○ げ る



指令 「いのしし」と「ねこ」を使って読め

✚ 考えてみよう

「平和」ということばを、よく耳にします。みなさんは、「平和」ってどんなことだと思いませんか？
聖書に書いてある「平和」とは何ですか？

✚ やってみよう ペーパークラフト『ランプ』

①正方形の色画用紙(または色紙)を2つに折る。②折り目の方からハサミで均等に6箇所くらい切り込みを入れる。(端から2cmほど残して)③紙をひらいて丸め、両端をのり付けする。④1cm幅くらいの細長い紙をランプにのりづけにして、取っ手にする。⑤色画用紙を切り抜いて、ロウソクを作り、ヒモで取っ手からつるす。



✚ 今週の暗唱聖句

ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。
ひとりの男の子が私たちに与えられた。権威(けんい)が彼の肩にある。その名は「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」と唱えられる。 イザヤ書9章5節

【目標】

クリスマスに何が期待されていたのかについて考える。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→イザヤ書9章1～6節を改めて生徒と読む。

【ポイント】

「闇の中を歩む民」とは、誰のことだろうか？
 こう考えながら少し目をつぶってみるだけで、色々な人の顔が、ニュースで見た残酷な映像、心に痛みを受けて表情を失ってしまった子どもたちの姿が脳裏に浮かんでくる。また自分自身の内側を深く思いめぐらすときにも、そこにも闇があり、死を匂わせるような暗闇の塊がある。イザヤの時代にあった闇、死の陰の地、それは私たちの内側にも外側にも、今も現実に存在している。けれどもクリスマスの日、この世界の暗さの中に、また羊飼いたちのような暗闇に捨てられた人々の一番近くに、闇を光によって塗り変えるひとりのみどり子がお生まれになった。それは紀元前700年頃のイザヤが待望した光であり、今を生きる私たちにも同じように必要な光である。

③生徒と一緒に考える

→闇の中への光の到来として描かれている主イエスの誕生の、教師自身にとっての恵みを証して、生徒と共に分かち合う。

Q. 「闇の中を歩む民」と言われていますが、どういう人たちのことなのでしょう？

Q. 自分たちの周りや、自分自身の中にも「闇」と呼ばれるような暗さはないでしょうか？

Q. 預言者イザヤは、闇を照らすものが自分の周りにはなかったので、ひとりのみどり子による光を待ち望みました。私たちの闇を照らす、何があっても絶対に無くならない大きな光、喜び、楽しみは、どこかにあるでしょうか？

Q. 「メリー・クリスマス！」の「メリー」とは、嬉しい・楽しいという意味ですが、クリスマスの何が「メリー」なのでしょう？考えてみましょう。

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト セカリヤ書9章9～10節

(1) ろばに乗って来る王

前回のイザヤ書9章1～6節と同じく、この箇所も旧約聖書の預言書における、いわゆるメシア預言のひとつです。

ここでもメシアはまことの王として描かれます。旧約聖書において、王がまことの王であることをはかるものさしは、神のみ言葉に従って民を統治するかいなかという一点でした。民が王に従うことよりも先に、王自身に神に従う信仰が求められたのです。王が神との契約に従って歩み、民を神の義によって治め、貧しい者たちのために裁きを行うとき、国は恵みと平和を享受することができますのです。

ゼカリヤが幻に見た王もそのような王でした。何よりも「彼は神に従い、勝利を与えられた者」(9節)と言われていることに注目すべきです。王が民に救いを与えることよりも先に、王自身が神のよきみわざにあずかり、勝利者とされているのです。だからこそ彼の民を神のみこころに従って治めることができるのです。

さて、まことの王は軍馬によってではなく、ろばに乗って来ます。ろばは平和の象徴です。まことの平和は軍事力によっては到来しないことが、ここにも示されています。私たちは平和をつくりだす道を人間の知恵によってではなく、み言葉を学び、み言葉に従うことによって教え示されるのです。

ろばに乗って来た王は、イスラエルから戦車と軍馬を絶つことによって平和を実現します。この平和は諸国民に告げられます。旧約の選びの民イスラエルとその王国にとどまらず、平和の王の支配は全世界に及ぶのです。

(2) 王の謙遜

このゼカリヤの預言が主イエス・キリストのエルサレムへの凱旋のさいに成就したことは言うまでもありません。全世界を統治するまことの王は、世界史上に立てられたいかなる有力な王でもなく、イエス・キリストです。このお方こそ、被造世界をご自身のみこころに従って治めておられる王の王、主の主です。このお方のみ後に従っていくとき、世界は平和と命に満たされます。

ところで、ろばは平和の象徴であるとともに謙遜の象徴でもあります。ゼカリヤも、この王は高ぶることがないと告げています。ただ、ここでの謙遜とは単に物わかりがよいとか、やさしいという意味にはとどまりません。もちろん王が民にとって横暴でなく、やさしいということは望ましいことですが、あまり物わかりのよい王でも民のわがまま勝手にされてしまうでしょう。

この王の謙遜は、何よりも父なる神に対する、また神が彼を用いて世界を救おうとなさる、そのご計画に対する謙遜なのです。この謙遜によって、主はご自身を低くされました。すなわち家畜小屋の乳飲み子として生まれ、罪人に仕える僕として生き、十字架上にみじめな死をとげたまいりました。そこに、罪人である私たちのいっさいを背負い、私たちが神と和解し、神の子としての新しい人間にされるためにご自身の命をお捨てになった救い主の謙遜が示されているのです。この謙遜によって私たちは救われたのです。

(木下裕也)

テキスト ゼカリヤ書9章9～10節

〔単元のねらい〕

ゼカリヤの預言の御言葉から、柔和な王として十字架の死に至るまで従われたイエスのお姿を中心に、「クリスマスを迎える喜び」、「真の平和をもたらすメシア」、「柔和の王なるキリスト」の三つのポイントで、キリストに従う信仰について考えてみたいと思います。

「ロバの子に乗った王」

今日私たちは、この聖書の箇所から、柔和の王であるイエス・キリストに従う人生について御一緒に考えてみたいと思います。

皆さん、「柔和」と聞くとどのようなイメージをおもちでしょうか。何となく、なよなよしている、男らしくない、かよわい感じ、色々なイメージをおもちだと思うのです。しかし、聖書によれば柔和な王であるイエス・キリストこそ、全世界を治めたもう真の王であると言っているのです。

さて、日本語の辞書を開くと面白いことが分ります。たいていの辞書は、「愛」という言葉で始まり、最後は「腕力」という言葉で終わっているのです。これは象徴的なことだと思うのです。人々は最初は愛をもって多くの事を始めていきます。しかし、その途中で色々な事があり、お互いにぶつかり、裁きあい、罵りあい、結局最後はつかみ合いの喧嘩になる、暴力に訴えて終わってしまう。どんなに良い動機ではじまったとしても、愛によって全てを完成することのできない人間の弱さ、人間の現実がここにある訳です。

この聖書時代も同じでありました。最初は隣国同士お互いに仲良く暮らしていました。しかし、ふとしたことから、人々は争うようになって国が国を侵略し、領土を奪い合うようになってしまいました。そしてその問題を解決するために、人々は神に頼らずに人に頼るようになってしまい、神に背を向けていくようになってしまったのです。しかし、私たちがこれから目指して歩んでいく神の御国は、決してこのようなことはありません。そこは愛に満ちて、柔和な王であるイエス・キリ

ストが御支配をしておられる所なのです。今日はクリスマスの日にお生まれになられた、柔和の王であるイエス・キリストについて三つのポイントから一緒に御言葉に聞いて参りたいと思います。

第一に、私たちは何故クリスマスをお祝いするのでしょうか。それは、キリストの方から一方的な恵みによってこの地上に来て下さったからなのです。「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者、高ぶることなく、ろばに乗って来る、雌ろばの子であるろばに乗って」(9:9)。「娘シオンよ、大いに踊れ娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ」と聖書は言っています。これは、世俗的に考えればアレクサンドロス王のエルサレム支配を表しているのかもしれませんが、これはメシアとその御国の支配についての預言の御言葉です。ですから、この御言葉は、アレクサンドロス王の凱旋の言葉と考えるよりも、メシアが全ての人々の喜びとなってこの地上においでになるということを表している御言葉です。「エルサレムの人々よ、主なる神がイスラエルに帰って来て、その中に住まわれる。だから、ラッパを鳴らして、喜び叫びなさい」と聖書は言っているのです。ここにクリスマスの喜びがあります。キリストとは誰でしょうか。あなたの王なのです。そしてこの王はご自分の方からあなたを救うためにこの地上に来て下さったのです。

私たちは何故クリスマスをお祝いするのでしょうか。それは、キリストの方から一方的な恵みに

よって、あなたを救うためにこの地上に来て下さったからなのです。その喜びは、踊り叫ぶような大きな喜びなのではないでしょうか。

第二に、メシアはこの地上に、そして人々に平和をもたらす王として来られるのであります。「わたしはエフライムから戦車を、エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ、諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ、大河から地の果てにまで及ぶ」(10)と聖書は言っています。これはロバの子に乗った王によって平和が永遠にもたらされるということを意味している御言葉です。当時敵国との戦いに勝利した凱旋將軍は、軍馬にまたがって威风堂々と自分の国に戻ってきました。そして人々は熱狂的にその凱旋將軍を迎えました。しかしそれとは反対に、ロバは平和の象徴として用いられていました。ですから当時王たちは戦争のないときは好んでロバに乗って移動していたのであります。王がこのロバに乗ってエルサレムに来られるということは、「わたしはエフライムから戦車を、エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ、諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ、大河から地の果てにまで及ぶ」(10)と聖書が言っておりますように、この地上から戦いが永遠になくなるという平和が、メシアの到来によってもたらされるということを意味している訳です。このように平和の象徴であるロバの子に乗って来られる柔和な王、メシアこそが人々に永遠の平和をもたらすものなのです。そして何よりも真のメシアこそが私たちの人生に消える事のない喜びをもたらしてくれる、そういうお方です。

そして最後に、柔和の王なるイエス・キリストについてです。このゼカリヤの預言から数百年後、イエス・キリストにおいて、この御言葉は成就します。イエスは十字架に掛かれるためにエルサレムに入場なさいます。「それは、預言者を通し

て言われていたことが実現するためであった。『シオンの娘に告げよ。「見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、柔和な方で、ろばに乗り、荷を負うろばの子、子ろばに乗って。』」弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、ろばと子ろばを引いて来て、その上に服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。大勢の群衆が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は木の枝を切って道に敷いた。そして群衆は、イエスの前に行く者も後に従う者も叫んだ。『ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ』(マタイ21:5-9)。イエスは、平和の象徴である子ろばに乗ってエルサレムに入場なさいました。人々は、木の枝を切って敷き、「ダビデの子にホサナ」と叫びイエスを迎えました。しかし、この歓迎の仕方は敵国との戦いに勝利した凱旋將軍を迎えるやり方でした。人々は、イエスをローマの圧制から自分たちを助け出してくれる、この世の救済者としてイエスを迎えました。その数日後、その事が成らないと分かった人々は、てのひらを返すように、「ダビデの子にホサナ！ ダビデの子にホサナ！」と迎えたその同じ口で今度は、「イエスを十字架に掛けろ！ イエスを十字架に掛けろ！ パラバを釈放しろ！」とイエスを罵り、イエスを十字架へと追いやっていったのです。しかし、イエスは柔和な王として、人々を救いに導くために、十字架の死に至るまで従順に従われて行っただけです。

私たちがまたイエスを心からお迎えしていなければ、エルサレムの人々のように、てのひらを返すようにイエスを否定してしまうことがあるかもしれませぬ。柔和の王であるイエスに心から従いながら、クリスマスのシーズンを過ごす者でありたいと思います。(小堀 昇)

[今週の暗唱聖句] ゼカリヤ書9章9節

娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。

彼は神に従い、勝利を与えられた者、高ぶることなく、ろばに乗ってくる、

雌ろばの子であるろばに乗って。

〈ねらい〉

平和の王として来てくださったイエス様を喜ぶ。

〈展開例〉

1. 良い王様とはどんな王様？

（国中で一番えらい人。みんながいうことをきく。強い人。敵が来たなら先頭に立って戦ってくれる人。みんなを守ってくれる人。悪いことをしたら叱り、良いことをしたらほめてくれる。優しい人。みんなのためにいろいろなことをしてくれる。など思っていることを話し合う）

2. 馬とろばってどう違うの？

〔馬とろばの絵や写真を見せながら〕

（馬は王様が戦うときに乗る。戦いに勝って勇ましく町に帰ってくるときに乗るのが馬。ろばは荷物を運んだり、畑仕事をしたり、人を乗せたりする。馬より小さく速く走れない。そのため戦いにはむかない動物）

3. イエス様はどうしてろばに乗るといわれているのでしょうか。

（武器を持って戦争をするのが好きな王様ではなく、人々が愛し合い、仲良くなるために来てくださる平和の王様だから）

4. 私たちがすぐにけんかをしてしまったり、仲良くできないのはなぜでしょう。それは私たちの中に罪があるからです。イエス様はこの罪をほろぼし、私たちが愛し合うことができるためにこの世に来てくださいました。イエス様こそ平和を作り出してくださる真の王様です。

〈折り〉

天のお父様、平和をくださるためにイエス様をおおくりくださりありがとうございます。イエス様を私たちの王様としてお迎えすることができすように。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン

王様のがんむりをつくらう！（図版は127ページに掲載しています）

用意するもの

クレヨンまたはカラーペンか色鉛筆、はさみ、のり

127ページの絵を人数分、コピーして色をぬりましょう。はさみで切って、のりしろにのりをつけてつなげます。

全部つないでかんむりをつくります。生徒の頭の大きさに合わせてはり合わせる三角の数を調整します。

〈聖書の内容を確認してみよう〉

- ①この預言を語ったのは誰？（→ゼカリヤ）
- ②いつ頃の人？（→イエスさまが生まれるより400年以上も前の人）
- ④エルサレムに来る王とは恐い人？（→柔和な、やさしい王さま）
- ⑤何に乗って来られる？（→ろばの子）
- ⑥その王さまとは誰のこと？（→イエスさま）
- ⑦イエスさまは本当にろばの子に乗った？（→十字架にかかる前に乗られた）

〈考えてみよう〉

王さまと言えばどのような姿を思い浮かべるでしょうか。立派な服を着て、馬に乗り、大きな剣を持っている、そんなイメージでしょうか。しかし、イエスさまはろばの子に乗られる王さまでした。それは、イエスさまが、上から命令するばかりの偉そうな王さまではなく、私たちいつも一緒にいてくださり、本当に必要な助けを与えてくださるやさしい王さまであるということです。もうすぐクリスマスで、うれしい気持ちだと思えます。でも、風邪を引いたり、困ったことがあったり、ということもないでしょうか。イエスさまがいつも一緒にいてくださることを信じましょう。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。とてもやさしい王さまを与えてくださってありがとうございます。どんなときも一緒にいてくださるイエスさまを信じてクリスマスを待つことができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



✂ ワークシート ✂

✚ 聖書をひらいて (ゼカリヤ書9章9~10節)

よるのあたま、うおがなく。

文字をならべかえて、御言葉にしてね。(9節)

✚ 考えてみよう

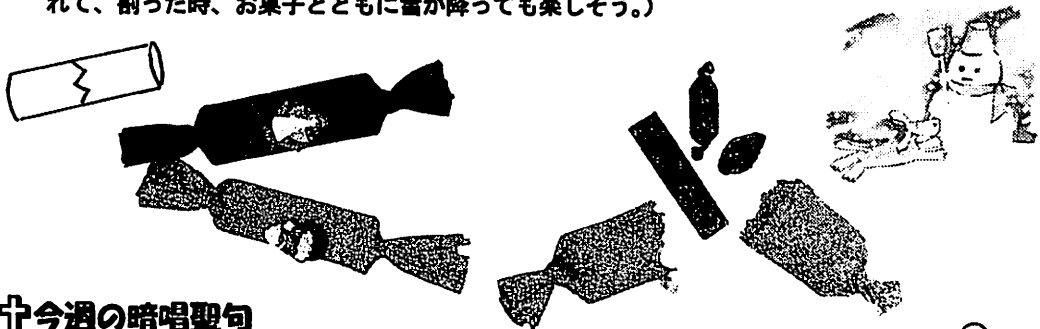
おすもうさんや、野球選手は、パレードの時、リムジンなどのオープンカーに乗って入場します。王さまは、白い馬の馬車に乗って入城します。あなたなら、何に乗りたいですか？ イエスさまにとって、一番重要な「事」に向かわれる「時」がついに来ました。その入場のために、選ばれた乗り物は何だったのでしょうか？それは、イエスさまのどんなお気持ちを表していますか？

✚ やってみよう ◎ ペーパークラフト『クリスマス・クラッカー』◎

使うもの：ちりめん紙（細かい、縦じわのついた伸縮性のある包装紙）、厚紙の筒

① 厚紙の筒（トイレトペーパーの紙芯）の真ん中にハサミで山切りに切り、それをもとのように合わせる。②両端にねじる余裕をもたせて、ちりめん紙をひとまわり巻く。③クラッカーの一方の端をキャンデーの包み紙のようにねじり、中に小さなお菓子をいくつか入れます。入れたら、同様に端をねじります。

★たくさん作ってクリスマスの時にお友達と交換して、クラッカーを割って（ねじって、破く）楽しめます。小さな御言葉カードを入れたり、小さな白い紙片をたくさん入れて、割った時、お菓子とともに雷が降っても楽しそう。）



✚ 今週の暗唱聖句

彼は神に従い、勝利をあたえられた者、高ぶることなく、ろばにのってくる、雌ろばの子であるろばに乗って。

ゼカリヤ書9章9節

【目標】

主イエスがどんな王であられるのかを知る。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？(分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である)

②改めて御言葉に取り組む

→ゼカリヤ書9章9～10節を改めて生徒と読む。

【ポイント】

キーワードは、「王」である。一般に「王」と言う時には、城の奥の一段高い所で立派な椅子に座る者をイメージするが、「柔和の王」主イエスは、子ロバに乗り群集や子どもたちの手が届くようなスピードと、低さ近さで歩み、敵が襲い来る際には、一人の兵士も御自分のために戦死させない、自らが前線に立って、自分の命と引き換えに民を生かしてくださる王である。ここまで優しい王、私たちのことをこれほどまで愛し、大切に守ってしてくださる王は、クリスマスにお生まれになった主イエスの他にいない。

③生徒と一緒に考える

→主イエスが私たちの王であられることの、教師自身にとっての恵みを証して、生徒と共に分かち合う。

Q. 今朝のテーマは「王」ですが、「王様」あるいは「殿様」という時、どんなイメージを抱きますか？

Q. 主イエスは王であると聖書で言われ、この方はクリスマスにお生まれになりました。その主イエスの生まれた場所や、なされたことは、王様らしいものだったのでしょうか？

Q. あなたは従うとしたらどんな王様に従いたいと思いますか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. イエス様を王様にして、この王様に従い守られて一週間を過ごすとは、どういうことだと思いますか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？



テキスト マタイによる福音書1章18～25節

ルカ福音書が母マリアにスポットを当てて主イエスの降誕の出来事を時間的な順序を追って真正面から述べるのに対し、マタイ福音書はあまり目立たない夫ヨセフや東方の博士達を登場させ舞台裏の神の救いの約束の実現とその意味に注目を置こうとする。

〈神の約束の実現としての選びの器〉

マタイ福音書が夫ヨセフを登場させるのは、神による約束の実現がダビデの子孫としてイエス・キリストがお生まれになられるためである。20節で主の天使が神の救いの約束の実現を伝えるところで、ヨセフをあえて「ダビデの子ヨセフ」と呼びかけている。そのことはマタイが既に1章1～17節のイエス・キリストの系図において明らかにしたことであった。この御使いを通しての主のお言葉に、ヨセフは神の救いのみ業の実現のための器としての彼の果たすべき使命・役割を新たに又深く受けとめさせられたに違いない。ともするとクリスマスは、処女降誕の聖霊のみ業（ルカ1:35）から母マリアに焦点が寄りがちであるが、神の救いという点からすると決して夫ヨセフの果たすべき役割は小さくない。このことを彼は深く自覚させられたので、マリアを妻として迎え入れ（1:24）、そして結婚してもイエスが生まれる迄は夫婦関係を自制し（1:24）、正式の嫡子としてイエスと命名したのである。

〈律法に忠実な人〉

マタイ福音書では神の救いのみ業の筋道は読者に一目瞭然である。最初から妻マリアの妊娠は聖霊のみ業による奇跡であることが述べられている（1:18）。マリアはそのことを直接御使いから説明を受け、彼女自身の信仰をもって同意し受け入れた（ルカ1:38）。けれどもヨセフにはそのことは未だ知らされていない。恐らくマリアも全てを神に委ねて受胎告知（ルカ1:28～33）のことをヨセフには語らなかったのであろう。それ故に夫

ヨセフは大いなる苦悩に陥る。未だ婚約中とはいえ、ユダヤの律法では結婚関係と同様と見なされ、婚約中の他の男性との関係は姦通と同罪とされたのである。彼の苦悩を深めたのは妻マリアへの不信だけではなく、彼の神の律法へのこの忠実な態度にあった。マタイは夫ヨセフを「正しい人であったので」と、その苦悩の真の理由を述べる（1:19）。マリアへの愛とユダヤの掟との狭間に彼は立たせられ、律法を重んずるヨセフは密やかな離縁を決断し、自ら身を引こうとすることで問題の解決を図ろうとする。人間的にはこれ以上の解決の手だてではなく、まさにギリギリの選択であった。

〈神、我らと共にいます、インマヌエルの恵み〉

このジレンマ・人間的な解決に終止符を打ち、更なる上よりの神による解決へと導いたのが、御使いによる神の介入のみ業であった。この主の天使の介入によって事の真相は明らかにされ、夫ヨセフもまた神の救いの約束の実現の器として神のみ業へと招き入れられる。ヨセフは妻マリアへの村人の言われなき中傷やユダヤの掟による断罪の危険からマリアを守り、マリアがイエスを無事出産することを助けるその役割を神によって与えられていく。

ヨセフの役割は確かにマリアのそれに較べて補助的なものでしかないとしても、このヨセフの同意と協力がなければマリア一人で何もかも困難を背負い、挙げ句の果てに石打ちにされて殺されてしまう恐れも十分にあったのである。マタイがイエスの名前を「インマヌエル（神、我らと共にいます）」としているのは、もちろん旧約聖書のメシア預言の成就（イザヤ7:14）であるが、そのようにしてマリアやヨセフと共に神がいて下さって、人間的な解決や様々な危険から彼らを守り、そうして神の約束が彼らの信仰を通して実現される為に他ならなかった。（山下朋彦）

テキスト マタイによる福音書1章18～25節

(単元のねらい)

待降節を迎えている今、マリアの婚約者であったヨセフに対するメシア誕生の告知を通して、おとめマリアのお腹に宿り、時至ってお生まれになるイエス様がどのような御方としてお生まれになったのかをもう一度確認し、イエス様の誕生を祝うクリスマスを喜んで迎えられるように導きたい。

「救い主誕生の知らせ」

今日の箇所には、イエス様がお生まれになることになった経緯が書かれています。このお話の中に、マリアさんという女性と婚約していたヨセフさんという男性が登場してきます。このヨセフさんの前に、「主の天使が現れた」と書かれています。そうです。主の天使がヨセフさんに語った言葉が、とっても素晴らしい知らせをもたらす言葉となったのです。

ヨセフさんは、マリアさんと婚約をして、すでに結婚する約束をしていました。そして、しばらくしたら一緒に暮らすことになっていました。けれども、マリアさんが「聖霊によって身ごもった」と聖書に書かれています。ヨセフさんとマリアさんは結婚の約束をしていました。でも、まだ結婚をして一緒に暮らしていません。ですから、まだ結婚をしてないマリアさんとヨセフさんの間に子どもが生まれるのはとても不思議なことでした。けれども、マリアさんのお腹の中に赤ちゃんが宿っていることが分かりました。ヨセフさんはとてもビックリしたと思います。「結婚の約束はしたけれどもまだ一緒に生活をしていないマリアさんに赤ちゃんが出来るなんて、考えてもみなかったことだぞ」と、ヨセフさんは思ったかもしれません。

お腹の中に赤ちゃんが出来る、その赤ちゃんはお母さんのお腹の中で栄養をもらい大きくなっていきます。そうすると、マリアさんのお腹はどんどん大きくなり、周りの人たちが見たら、「赤ちゃんが産まれるんだね」と分かります。赤ちゃんが産まれるということは、とっても嬉しいこと

です。新しい命が誕生することは、周りの人々を喜ばせる出来事です。

けれども、ヨセフさんはとても困っていました。なぜかという、ヨセフさんやマリアさんがいたユダヤの国では、結婚して一緒に生活をする前に赤ちゃんが産まれることが分かると、とても重い罰を受けなければならないという決まりがあったからです。ヨセフさんはマリアさんのことがとっても大好きでした。だからマリアさんと結婚したいと思ったのです。でも、結婚して一緒に暮らす前に赤ちゃんが出来たことが周りの人たちに分かってしまうと、マリアさんは重い罰を受けなければなりません。ヨセフさんは、そのような罰をマリアさんに受けさせたくないと思いました。どうしたら良いか考えた結果、ヨセフさんはマリアさんと結婚の約束をしていなかったことにしようと思ったのです。

そのように思っていた時、主の天使が夢の中で現れ、ヨセフさんに言ったのです。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」と。「聖霊によって」と言うのは、「神様の力によって身ごもった」という意味です。とても不思議な出来事が、ヨセフさんとマリアさんの間に起こり、そこから男の子が産まれることになりました。その男の子がイエス様だったのです。この出来事は、まさにイエス様が神様の力によって生まれるということを表す出来事でした。イエス様

は、神様の力によって、まことの神でありまことの人間である「神の御子」としてお生まれになる。しかもそのイエス様は、私たちを罪の力から救い出すことができる御方としてお生まれになるのです。

罪というのは、神様に背を向けて信頼せずに生きることです。私たちの心には罪があり、愛の神様を見失い、その結果、神様や周りの人たちが悲しむようなことをしてしまうことがたくさんあります。でもイエス様は、そのような私たちに神様の愛をたくさん注いで下さり、私たちが神様の愛に生きることが出来るようにして下さいます。そのためにイエス様は、聖霊によってマリアさんのお腹の中に宿り、生まれることになったのです。

更に、今日の聖書には、イエス様のことについてとっても大切なことが書かれています。「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。この名は『神は我々と共におられる』という意味である」と。

「あれ、これと同じ様な言葉をどこかで聞いたことがあるよ」と気づいた人はいますか。そうです。今日の聖書の箇所と同じ様なことを、イエス様ご自身も語っていました。十字架に付けられた後に復活したイエス様は、ご自分の口を通して弟子たちに言いました。マタイ28章20節、「わたし

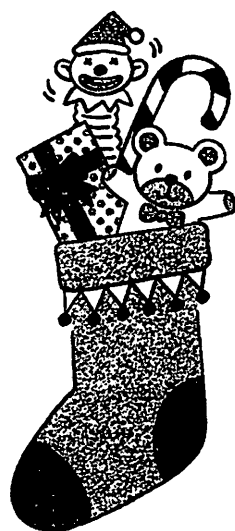
は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と。愛に満ちた神様を見失い、神様に背を向け、神様に頼らないで生きようとするのが、罪人である私たちです。神様が悲しまれるようなひどいこと、悪いことをしてしまうのが、罪深い私たちの姿です。しかしイエス様は、そのような私たちが、神様を心の底から頼って生きることが出来るように、神様や周りの人たちを心から愛しながら生きることが出来るように、いつも私たちの近くにおいて、たくさんのお愛を注いで下さるために生まれて下さったのです。マリアさんから生まれることになったイエス様は、そのような御方として生まれて下さったのです。

マリアさんのお腹の中に赤ちゃんが出来たことを知ったヨセフさんは、初めはとっても驚きました。でも、神様の御計画を伝えに来た天使の言葉、マリアさんから生まれるその赤ちゃんが、私たちに神様の愛をたくさん注ぐために、いつも近くにおいて下さるまことの救い主、イエス様であるという良き知らせを聞いてとても安心しました。そして、そのイエス様が生まれることを心から待ち望みました。

私たちも、イエス様が生まれて下さった意味をもう一度思い出して、クリスマスを喜んで迎えることが出来るように祈りましょう。（千ヶ崎基）

【今週の暗唱聖句】 マタイによる福音書1章23節

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」
この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。



〈ねらい〉

神の御子の誕生の不思議を学び、クリスマスを迎える心の備えをする。

〈展開例〉

1. 今日のお話をふりかえる。先生が今日のお話を短くまとめて話してあげましょう。

①ヨセフさんが心配していたこと。

(マリアが結婚する前に赤ちゃんがおなかに入ってきたので罰を受けなくてはなくなること)

②天使がヨセフさんに言ったこと。

(マリアさんと結婚しなさい)

(神様の力によってマリアに男の子が生まれるようになること)

(子供の名前をイエスと名づけなさい)

(その子は私たちを罪から救ってくださる方である)

③ヨセフさんはこれを聞いてどうしたか。

(神様の言葉を信じてマリアと結婚した)

2. クリスマスはどうしてうれしいの？

・クリスマスはどうして喜びなのでしょう。プレゼントがもらえるからかな。ケーキが食べられるからかな。

・クリスマスがうれしいのは、私たちが罪から救う救い主がお生まれになったからです。イエス様が私たちといつも一緒にいてくださるようになったからです。

〈折り〉

天のお父様、イエス様をおおくりくださりありがとうございます。イエス様のお誕生を心から喜んでお祝いできますように。救い主、イエス様のお名前によってお祈りします。

手作り楽器でさんびしよう！

用意するもの

①ガラスのコップ、箸、水

②500mlのペットボトル、ビーズ、お米やあずき、ストロー

③びん、ビー玉

④クッキーなどが入っていた空き缶、割り箸、どんぐりなどの木の实か大きいビーズ



こどもさんびか24番(うれしいうれしい)などを歌いながら楽器で演奏してみよう！

〈聖書の内容を確認してみよう〉

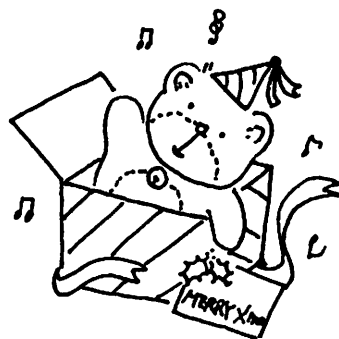
- ① マリアは誰と婚約していた？ (→ヨセフ)
- ② マリアは何によって身ごもった？ (→聖霊)
- ③ ヨセフは喜んでマリアと結婚しようとした？
(→ひそかに縁を切ろうとした)
- ④ マリアのことが嫌いになったから？ (→表ざた
になってマリアが罰を受けてはならないと思っ
たから)
- ⑤ そのときヨセフの夢に誰が現れた？ (→天使)
- ⑥ 天使が告げたマリアの赤ちゃんの名前は？ (→
イエス)
- ⑦ 他にも名前があった？ (→インマヌエル、神は
我々と共におられる)
- ⑧ イエスは民を何から救う？ (→罪)
- ⑨ 天使の言葉によってヨセフはマリアをどうし
た？ (→迎え入れ、結婚した)

〈考えてみよう〉

別に悪いことをしたわけではないのに、責められたり、困ったりしてしまうということはないでしょうか。お友達や周りの大人の人から、してもいないことをしたと言われたり、言ってもいないことを言ったと言われたりすることはないでしょうか。どうしたらいいのかわからないときがあります。実はヨセフもここで、そのような危険があって、とても困っていました。でも、そのときに天使が現れて、困っているヨセフを通して神さまのご計画が行われるということを教えられたのです。私たちも、困ったときには、クリスマスのことを思い出しましょう。そして、ヨセフと一緒にいてくださった神さまがみんなとも一緒にいてくださることを信じましょう。

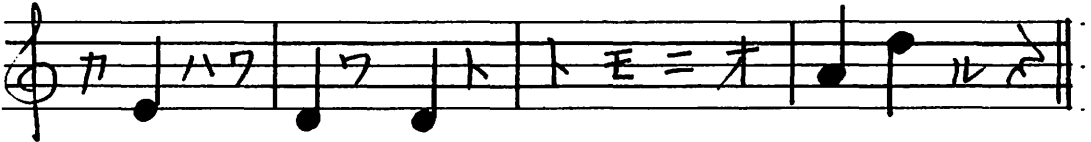
〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。ヨセフが天使の言葉を聞いて信じたように、私たちも神さまのお言葉を信じることができるようになります。うれしいときも、困ったときも、イエスさまがいつも一緒にいてくださいますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



✂ ワークシート ✂

✝ 聖書をひらいて (マタイ1:18~25)



✝ 考えてみよう

ぼくたちの名前は、お父さんやお母さんがつけてくれたけど、イエスさまのお名前は、天の神さまが、直接、名づけてくださったんだね。主の天使は、ぼくの夢にも現れて神さまのみこころを教えてくださいませんか？ (毎日、天使が現れるのを期待しているDくんより)

☆イエスさまのお名前には、神さまのどのようなみこころが表されていますか？

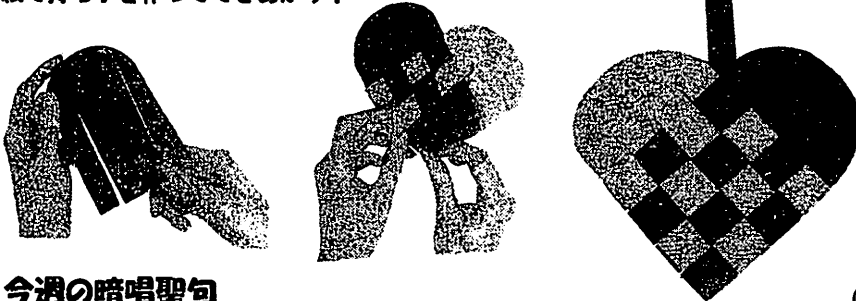


✝ やってみよう

★「系図」って知ってる？マタイの福音書1:1~17の系図の中で、聖書に出てくる、知っている名前を探してみましょう。(私たちの教会では、小学科上級クラスのお友達がクリスマスの祝会で、系図の名を初めから、最後まで全部、暗しようして、発表してくれました。)

★ペーパークラフト『ハートのお菓子かご』

- ①幅12cm・長さ36cmの2色の色画用紙を用意する。半分に折り、折ったまま折り目から、3本切り込み(12cm)を入れる。
- ②切り込みの行き止まりを半径にして、半径6cmの半円を描いて切る。
- ③紙と紙をたがいちがい、折り目の輪の中をくぐらせながら、中心から外へ編んでいく。
- ④画用紙で持ち手を作ってできあがり！



✝ 今週の暗唱聖句

「みよ、おとめが身ごもって 男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神はわれわれと、共におられる」という意味である。

マタイの福音書1章23節

【目標】

ヨセフの信仰、インマヌエルの恵みを知る。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→マタイによる福音書1章18～25節を改めて生徒と読む。

【ポイント】

私たちは日常の様々な場面で、とても多くの場合、真の交わりというものを探しながら生きている。本当に、真実に共にいるということが実現する瞬間を私たちは求めている。なぜなら人間は、一人孤独でなく、神との間に交わりを持つ存在として、共に生きるということの中にこそ満足を見出す存在として創造されたからである。ある時はそれを友情に求めたり、恋愛や結婚に求めたり、それを空想の世界や快楽に求めたりする。自分を満たすことのできる、何か自分を温めてくれるような親密な交わりはどこにあるのかと探し求め、私たちはそのためにもがき苦しんだり、途方に暮れたりする。この大きな問題の解決がインマヌエルにある。

インマヌエルの主が、ヨセフに働きかけられる。ヨセフへの告知は突然で、彼はこの告知をただの夢として握りつぶすことも出来たはずである。人間は自らの意志で生まれ出てくることはできない

が、神は自らの意志で、また歴史を導かれる中で周到な準備をなされて、このダビデの子ヨセフの夫婦を用いて主イエスを誕生させられた。

③生徒と一緒に考える

→教師自身にとってのインマヌエルの恵みを証して、生徒と共に分かち合う。

Q. あなたが寂しさを感じる時はどんな時ですか？

Q. インマヌエルとはどういうことでしょうか？なぜそれが私たちにとって嬉しいことなのでしょう？

Q. 神様は遠くにおられる方ではありません？主イエスが人間としてお生まれになったことで、何が変わりましたか？

Q. もし仮にクリスマスがなかったら、どうなっていたと思いますか？

Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. ヨセフさんはインマヌエルの主にこたえて歩みました。あなたがインマヌエルの主にお答えして歩むとは、具体的にどういうことだと思いますか？

Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト マタイによる福音書2章1～12節

この箇所は一見詩情豊かで神秘的な物語であるが、マタイはここでも神の約束の実現に焦点を置いており、神の約束の受け取り手が誰であるのかを語ろうとする。その約束の受け取り手は、驚くべきことに約束の民ではなくむしろ全くの異邦人の博士達だったのである。

〈神の約束の実現としての選びの器〉

博士達の出身地について「東方の」とマタイは述べる(1,2)。この「東方」とはユダヤから見て「東方」であって、恐らくペルシャやバビロニアを指すのであろう。この「東方」の地は約束の民イスラエルにとって忘れがたい捕囚の地であり、又遠く遡るとカルデアのウルやニムロドの国という全くの異教の地・異邦人の地であった。神の救いの約束から最も遠く離れて立っていたのが、この「東方の博士達」だったのである。その地にいた彼らがどうしてもはるばる長い旅をしてユダヤの都エルサレムを訪ねることになったのか、その理由は「その方の星を見、拝む為に來た」と彼ら自身語っていることに見出される(2)。旧約聖書の昔からの約束で「メシアの星」のことがこの国でも伝わっていたのか、又バビロン捕囚の折りにそのことをイスラエルの民から直接に聞いたのかもしれない。いずれにしても博士達は何とかしてメシアに会う事を心から渴望していたことは確かなことであろう。そうでなければはるばる何千kmもの長旅を途中の広大な砂漠や数々の危険・困難を抱えて出発することはなかったであろう。

〈約束の民自身の冷淡と拒否〉

他方、エルサレムの都にいたヘロデ大王を始め律法学者・祭司長・住民など約束の民はわずかに10kmも離れていないベツレヘムで生まれられたメシアを訪ねることもお祝いすることも全くしなかったのである。東方の博士達が来訪して初めてメシアの出身地を調査し確認する始末であった(4)。ここにマタイは、約束の民自身のメシア拒

否という十字架の影を暗示するのである。メシアは約束の民のためにおいでになられたのに、その約束の民はそのお方を認めようとしなかった。

それは又東方の博士達の贈り物においても同様に示されている(11)。黄金と乳香は共に高価なものであり、高貴なお方への献げものとして相応しいものであったが、どうして没薬という埋葬の時に用いる贈り物が含まれていたのか、ここにもマタイの意図があると見なさなければならない。

〈メシアと出会った博士達の喜び〉

東方の博士達が冷淡な約束の民のいるエルサレムの地を去り、ベツレヘムの村里へただちに向かったのは想像に難くない。神は博士達の願いをお聞き下さり、遂に救い主に出会うという大いなる喜びと祝福をお与えになられる。最も神の約束から遠く離れていた彼らが、約束の受け取り手とされたのである。やがてこの彼らに見るように異邦人が神の救いの約束の受け取り手とされる、その前ぶれであり、予兆である。

彼らの喜びの中味は何か、それはもちろん救い主に出会えたという喜びであるが、2:10には彼らは「救い主に会って」ではなく、「その星を見て」喜びにあふれたと注意深く述べられている。すでにメシアに会う前に「星を見る」ことによって与えられた喜び、それはとりもなおさず信仰によってこそ救い主に出会えることを教えるものである。私たち罪人を真の救い主へと導き、そのお方に出会わせるのは、神のみ言葉に聞き従うという信仰のみによってである。彼らを東の国からメシアに出会う途に誤りなく導いた「星」とは、神のみ言葉であり、そのみ言葉に聞き従う信仰によってのみ成された神の大いなる救いのみ業であった。救い主を心から慕い求め、そのお方のみ元にひざまずいて私たちの持っているものをおさげするその礼拝こそ、神様が喜んで受け入れて下さる本当の神への献げものに他ならない。

(山下朋彦)

テキスト マタイによる福音書2章1～12節

(単元のねらい)

イエス様が誕生するところを見た人は、今生きている人々の中には一人もいません。しかし、神様の言葉としての聖書に明らかにされているイエス様の誕生が、自分のために起った出来事として子どもたちが受け止め、心からイエス様の誕生を祝うクリスマスを迎えられるように導きたい。

「イエス様の誕生を喜ぼう」

今年も、イエス様のお誕生をお祝いするクリスマスがやってきました。クリスマスになると、街並みには色とりどりのイルミネーションが飾られ、光り輝く風景を見ることができます。テレビからはクリスマスソングが流れてきて、クリスマスの雰囲気が感じられるようになってきます。

今日の聖書には、イエス様の誕生を祝うクリスマスを色々な思いで迎えた人々が伝えられています。その人たちは、クリスマスをどのように迎えたのでしょうか。「クリスマスはイエス様がお生まれになったことを祝うんだから、みんな喜んでいたはずだよ」と思うかもしれませんね。でも、全ての人たちがクリスマスを喜んで迎えたわけではありませんでした。

イエス様は、ユダヤの国でヘロデという王が治めている時代にお生まれになりました。そのヘロデ王の所に、占星術の学者さんたちが東の方からやって来ました。そして、ヘロデ王に尋ねました。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです」と。占星術の学者さんというのは、星のことに詳しい博士たちのことです。彼らは、ユダヤ人の王として新しく生まれる方の星を見つけたので、その星を頼りにユダヤの国にやってきたのです。

この事を聞いたヘロデ王はどのように思ったでしょう。聖書には「不安を抱いた」と言われています。そうなんです。ヘロデ王は、イエス様がお生まれになる知らせを聞いて良く思わなかったのです。ヘロデ王は、自分が一番偉い王様だと思っ

ていました。「自分にはお金も権力もある。地位や名誉もある」と思っていました。それはなぜかということ、彼が王だったからです。でも、星のことに詳しい占星術の学者さんたちが、「ユダヤ人の王として新しくお生まれになった方はどこにいますか」と尋ねてきたとき、ヘロデ王は、「新しい王が生まれたということは、もう自分は王になれない」、「ユダヤの王になって、お金も権力も地位や名誉も手に入れたのに、それが全部無くなってしまう」と考えたのです。だからヘロデ王は、イエス様がお生まれになったことを聞いて不安に思ったのです。ヘロデ王は、イエス様の誕生を喜べなかった。クリスマスをお祝いできなかったのです。

イエス様の誕生を喜ぶクリスマスを気持ちよく迎えられなかった人が他にもいました。それは、祭司長や律法学者と呼ばれる人々です。ヘロデ王は、新しくユダヤの王としてお生まれになる方がどこで生まれるのかを知らませんでした。そこでヘロデ王は、その場所を知りたいと思い、祭司長や律法学者たちを呼び寄せました。彼らは、聖書の言葉を詳しく知っている人たちです。そこで、旧約聖書の言葉の中にイエス様がお生まれになることが語られている箇所を見つけ出し、ヘロデ王に伝えました。「王様、その場所はベツレヘムです。旧約聖書の中にこう書かれています。『ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである』」。イエス様がお生まれになる場

所はベツレヘムです。何と、エルサレムから数キロしか離れていない町だったのです。

祭司長や律法学者たちというのは、神様の言葉を良く学び、良く知っている人たちでした。ですから、イエス様がお生まれになることも良く知っていたはずなのです。何も知らなかったヘロデ王に対しても、「イエス様はベツレヘムで生まれることになっています」と教えることが出来ました。でも、この人たちは、自分たちがいる場所からとても近いところでイエス様がお生まれになっているにも関わらず、イエス様のところに駆けつけ、イエス様を礼拝することをしませんでした。自分には何の関係もないと言わんばかりの態度でした。彼らは、ベツレヘムまであと数キロの場所においてもイエス様の誕生を喜ばなかったのです。結局、彼らはイエス様のことを教えることは出来ても、イエス様を受け入れることがなかったのです。

では、この時イエス様の誕生を心から喜び、祝った人たちは誰だったのでしょうか。それは、星のことに詳しい占星術の学者さんたちでした。彼らは、ユダヤの国の人ではありません。ですから、イエス様がお生まれになることを詳しく知りませんでした。しかし、イエス様の誕生を示す輝かしい星を見ながら、何とかしてその新しいユダヤの王なる方を見たいと思ったのです。しかも、彼らは長くて危険な旅を乗り越えて、やっとの思いでユダヤの国に辿り着きました。

でも、何で占星術の学者さんたちは、長く危険な旅をしてまで、イエス様に会いに来たのでしょうか。それは、イエス様が単なるユダヤの王ではなくて、私たちを罪の力から救い出し、神様の愛を豊かに注ぎ込み、本当の希望や喜びをもたらすことが出来る御方としてお生まれになったからです。世界中の人々が喜ぶべき御方としてお生まれになったからです。だから占星術の学者さんたちは、何としてでもイエス様にお会いしたいと旅をしてきたのです。

彼らは、マリアさんから生まれた幼子イエス様を見たとき、その御前にひれ伏し、黄金、乳香、没薬を宝の箱から取り出し、自分たちが持っている最高の物を献げて礼拝しました。彼らは、真の王であり真の救い主であるイエス様をひたすらに求める心がありました。熱心があったのです。イエス様を慕い求めるその人だけが、イエス様を礼拝することが出来き、そして救い主イエス様との深い交わりを味わえるのです。

ここにいる私たち全員が、クリスマスの出来事を見たわけではありません。しかし、そのクリスマスにどのような事が起こったのかは、この聖書の中に記されています。占星術の学者さんのように、心からイエス様を慕い求めて、真の王、偉大な王として私たちに平和をもたらして下さるイエス様の誕生をお祝いしたいと思います。

(千ヶ崎基)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書2章10～11節

学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。

彼らはひれ伏して幼子を拝み、

宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

〈ねらい〉

神様からの最高のプレゼントであるイエス様をくださったことを感謝する。

〈展開例〉

1. クリスマスの意味を考える。

きれいに包装してリボンをかけたプレゼントを机の上におく。

- ①プレゼントはどのようなときに贈りますか。
(お誕生日。母の日。父の日。クリスマスなど)
- ②それはどういう気持ちからですか。
(おめでどうか、ありがたいの思いを込めて贈る)
- ③神様が私たちにくださったプレゼントにはどのようなものがありますか。
(私たちの体、両親、お友達、自然、食べ物、知恵……)
- ④神様は私たちに特別な贈りものをくださいました。それがイエス様です。神様にとってイエス様はただ一人の子供でした。神様はその一番大切な独り子を私たちにくださいました。このプレゼントには、どれほど大きな神様の

愛が込められていることでしょう。

⑤クリスマスはそのことを感謝し、お祝いする日です。またお友達と一緒にそのことを喜び合う日です。

2. 神様が喜ばれる捧げもの

- ・博士たちは遠くから長い旅をしてようやくイエス様を見つけ出し、お会いすることができました。そして贈り物を捧げました。
- ・私たちは何をお捧げしますか。神様が喜ばれる捧げものは何でしょうか。話し合ってみましょう。
- ・博士たちは贈り物を捧げただけでなく、イエス様にお会いし礼拝を捧げました。博士達はイエス様にお会いして喜びでいっぱいになりました。
- ・クリスマスの本当の意味を知り、神様に感謝の礼拝と賛美を捧げましょう。

〈折り〉

神様、私たちのためにイエス様がお生まれくださったことを感謝します。私達も博士たちのように喜んで礼拝をお捧げします。

折り紙ツリーをつくろう! (図版は126ページに掲載されています)

用意するもの

- ・緑の折り紙または緑の紙、ビーズ、星型スパンコール、ボンド

〈聖書の内容を確認してみよう〉

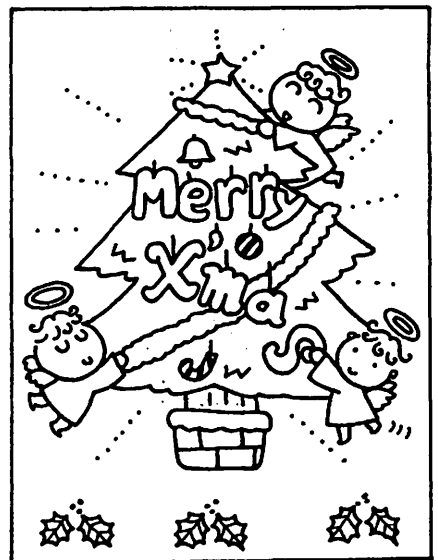
- ① 占星術の学者たちはどこから来た？ (→東の方)
- ② 誰を探しに、何に導かれて来た？ (→ユダヤ人の王を探しに、星に導かれて)
- ③ ユダヤ人の王の誕生に不安を抱いたのは誰？ (→ヘロデ王)
- ④ ユダヤ人の王はどこで生まれた？ (→ベツレヘム)
- ⑤ その王とは誰のこと？ (→イエスさま)
- ⑥ 学者たちはイエスさまを拝み、何を献げた？ (→黄金、乳香、没薬)

〈考えてみよう〉

いよいよクリスマスです。楽しみはプレゼントでしょうか。教会で、またおうちで、クリスマスプレゼントをもらえることでしょうか。でも、クリスマスにはもらうだけでなく、あげるということも考えてみましょう。東方から来た学者たちは、イエスさまのために、高価な黄金などを献げました。私たちは何を献げられるでしょうか。献金ができるでしょうか。たとえ少しでも、心を込めてイエスさまにお献げしましょう。また、学者たちは、喜んで、イエスさまを拝んだとあります。イエスさまに何もあげるものがなくても、イエスさまのことを喜んで、イエスさまを礼拝するなら、そのプレゼントを神さまはととても喜んでくださるはずですよ。

〈一緒に祈ろう〉

天の神さま。今年もクリスマスをお祝いできてありがとうございます。神さまはイエスさまというとても大切なプレゼントをくださいました。私たちも感謝して、イエスさまを喜び、礼拝をお献げすることができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



✂ ワークシート ✂

✝ 聖書をひらいて(マタイ1:18~25) 暗号文を、解読書を使って読んでください

解読書			暗号文					
コ	ノ	カ	□	□	□	□	□	□
デ	ヘ	ト	□	□	□	□	□	□
□	エ	ル	な!					

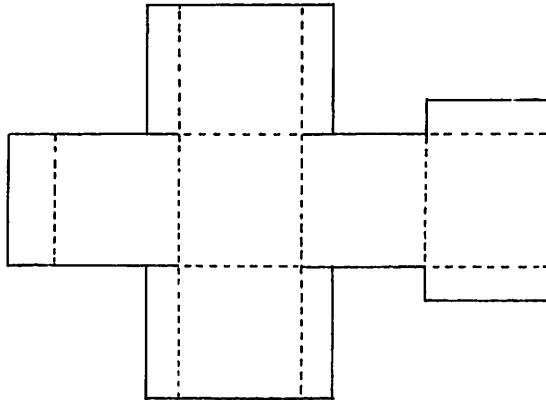


✝ 考えてみよう

☒ 占星術の学者って、星占いをする人ですか？神さまは、神さまをまだ信じていない人も、愛して、導かれるのですか？

✝ やってみよう ※ プレゼントの箱をつくろう ※

箱を開ける時は、だれでもワクワクします。好きな色の厚画用紙で、好きな大きさにプレゼント用の箱を作りませんか？模様は、紙を切り抜く前に、描いておきましょう！下の型紙を拡大コピーして使ってね。中には、何を入れてプレゼントしますか？



✝ 今週の暗唱聖句

学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として捧げた。
マタイの福音書2章10節~11節

【目標】

今、私たちがクリスマスの第一発見者として招かれている恵みを知る。

①説教を深めるために

Q. 説教を聞いて新しく発見したことは？

Q. わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしながら進めてゆけるならば理想的である）

②改めて御言葉に取り組む

→マタイによる福音書2章1～12節を改めて生徒と読む。

【ポイント】

第一発見者というのは、一番大切な人物であるべきである。クリスマスの第一発見者は、マリアの親戚ではなく、マタイでは東方の学者たちであった。彼らの一番の特徴は外国人であるということである。神様は、異国の、そして異宗教の文化の中にあつたこの学者たちを、誕生の第一発見者とされた。ここに主イエスの誕生の意味、主イエスの誕生が目指している目標が示される。主イエスの誕生は、遙か地の果てを指差していた。そしてそこに届いていた。よってこのことから、この私たちも、クリスマスのターゲットになっている、クリスマスの第一発見者になれる、一番先に馬小屋に行って、イエス様を礼拝できる、このク

リマスの恵みに間違いなく招かれている、ということが分かる。

③生徒と一緒に考える

→教師自身にとって、主イエスの誕生がなぜ喜ばしいことなのかを、生徒と共に分かち合う。

Q. 主イエスの誕生を礼拝しに行った人々は、どこから来たどんな人々でしたか？

Q. なぜマリアやヨセフの親戚でもないその人たちが、主イエスの誕生に居合わせたのだと思いますか？

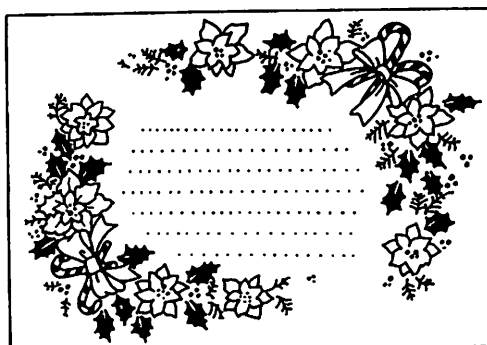
Q. 疑問は解けましたか？

④御言葉を生徒が自ら自分の日常に適用できるように導く

Q. クリスマスは2000年以上も前に、世界の裏側で起こったことですが、だからと言って、ユダヤ人でもない日本人の今の私たちとは関係のないことなのでしょうか？

Q. 私たちには特別な星は見えませんが、主イエスがどこにおられるのかは知らされています。主イエスはどこにおられるのでしょうか？ どうやってお会いできるのでしょうか？

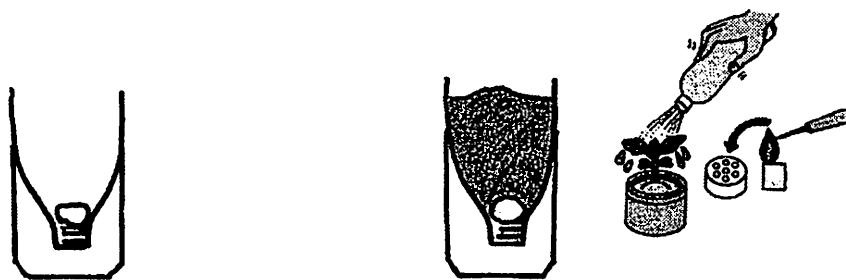
Q. これからの一週をどんな一週間にしたいですか？



《10月9日分 幼稚科工作》



《10月30日分 幼稚科工作》



①きれいに洗ったペットボトルを上から半分くらいのところまで切る。(ここまではやっておく) 上の部分を逆さにして下の容器に入れる。口に小石を1つ入れる。

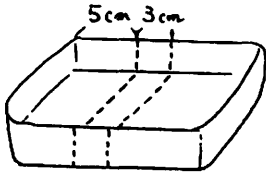
②肥料を混ぜた土を入れる。(割合は肥料の説明に従う。種を蒔き上に薄く土をかぶせる。じょうろで上から水をかける。(じょうろはペットボトルの口に穴をあけても作れます)



③日当たりの良いところに置く。土が乾いたら水をあげる。

④40日ぐらいでラディッシュができる。(条件によってはもっと長くかかる場合もある)

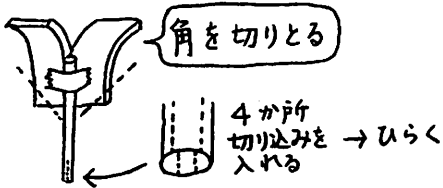
《11月20日分 幼稚科工作》



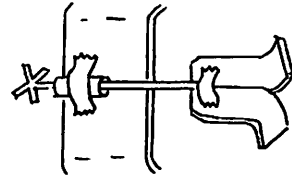
① スチロールトレイを切る



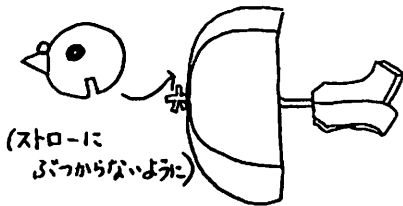
② 3センチ幅のほうを半分に切り、
1枚を裏返してセロテープでとめる。



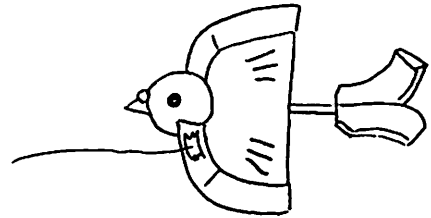
③ ②に細いストローをセロテープでとめる。



④ 太いストローを5センチ幅のほう裏にとめ、
③を差し入れる。



⑤ 残りのスチロールトレイで鳩の顔をつくり、
胴に差し込んでセロテープでとめる。

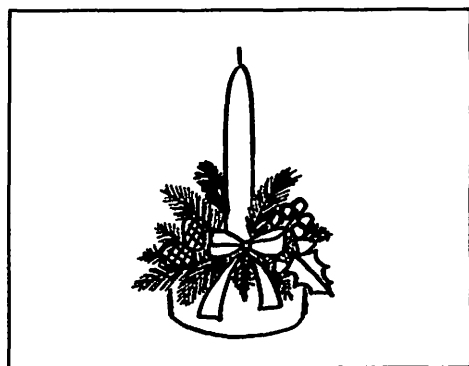
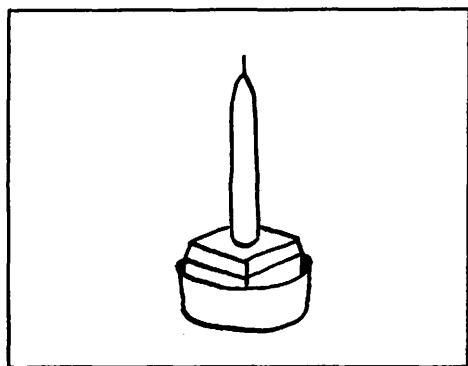


⑥ 鳩の左肩に糸をとめ、糸の先を竹ひごにとめる。
それぞれのパーツに初めに色をぬっておくと
きれい



竹ひごを持って、広い公園などで走ってみよう。うしろの羽根が音をたててまわるよ！

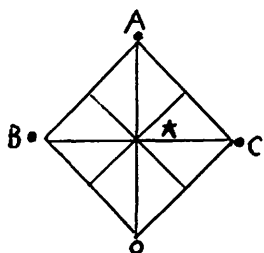
《12月4日分 幼稚科工作》



①オアシスを入れ物の中しっかりと固定する。
オアシスの真中にローソクをしっかりと立てる。
(1回で立てないと穴があくので注意)

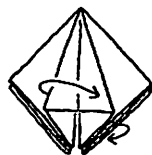
②葉っぱをローソクの周りにさしていく。
オーナメントやリボン、木の实などをさして
きれいにアレンジメントする。

《12月25日分 幼稚科工作》



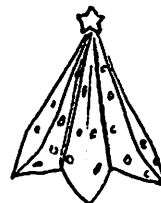
①ABCの順に●を○に合わせるように折る

②三角部分を広げてつぶすように折る



③残りの部分も同様に折る

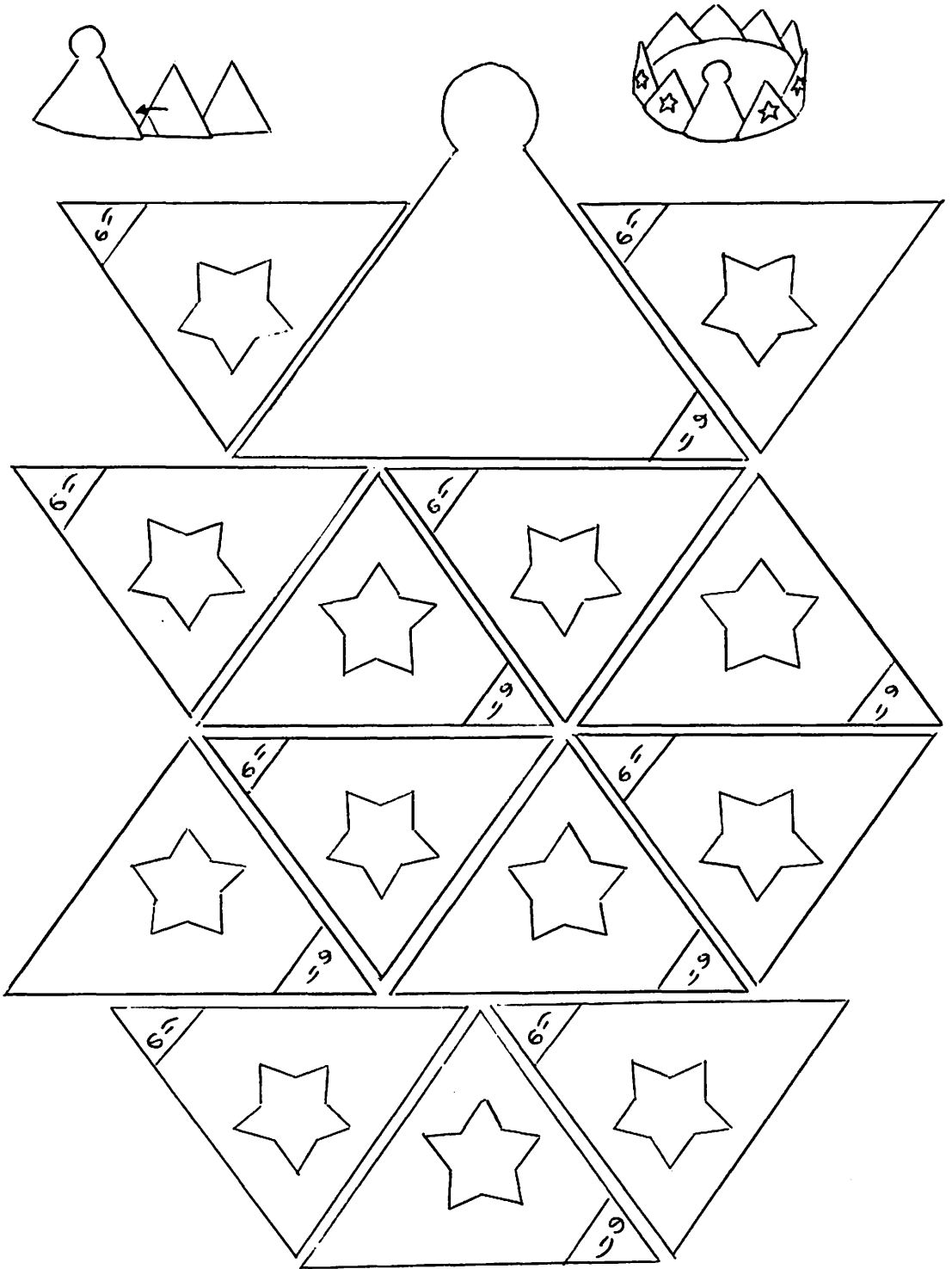
④三角の部分を内側に入れ込む



⑤4ヶ所の三角を広げてツリーの形にする

⑥ビーズやスパンコールをボンドでつける

《12月11日分 幼稚科工作》



《小学科上級ワークシート・考えてみようの答えの参考》

教師の皆さんは、聖書研究・カテキズム研究・説教展開例をご覧ください。

- 10/6 ☒エペソ4:12・13 教会において、私たちは信仰と知識において成熟し成長します。励ま
あつて日曜学校に集い続けましょう！
- ☒エペソ4:14・15 「……もてあそばれたり、引き回されたりすることなく」キリストに根ざ
し、キリストに向かって成長します。
- 10/9 ①イエス・キリストを指し示しています②カテキズム問66「イエスさまを信じ、命にいたる、
悔い改めをすることです。」
- 10/16 ①「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の力の満ちておられ
る場」(エペソ1:23) 教会を迫害することは、主を迫害すること。主と教会がひとつとされ
ているから。
- 10/23 ①イエスさまが、いつもわたしたちといっしょにいてくださることを信じさせてくださるため
- 11/6 ①御言葉の力を信じましょう。「神さまの、時」は私たちにはわかりません。あきらめることな
く、祈っていきましょう。
- 11/13 ☒イエスさまは、40日の間、弟子たちのところへ、訪れてくださいました。お姿が、見えたり、
見えなくなったりしました。たとえ目にはみえなくても、イエスさまが共にいてくださるこ
とを信じることでできるための訓練のときでした。イエスさまが、パンを裂き、弟子たちに
渡されたとき、イエスさまだとわかりました。パンを裂くとき、弟子たちはイエスさまのお
姿が見えなくてもイエスさまの御臨在(イエスさまがともにいてくださること)がわかるよ
うになったのでしょうか。私共の聖餐式も同じです。
- 11/20 ①イエスさまは、わたしたちと同じ罪人のようになってくださったから。
- 11/27 ①礼拝堂の中央・イエスさまが礼拝の中心に御臨在くださり、聖餐に招いて下さるお方だから。
②ぶどうジュースとパンが、私たちの体に入り栄養となることは、私たちがイエスさまと一つ
にさせられていることと、信仰と永遠の命のためにキリストの御言葉が私たちにとって必要
欠くことのできない食事であることをしめています。
- 12/4 「平和」戦争がなくおだやかにおさまっていること。(国語辞典より)
聖書にある平和とは、「わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、私たちの主イエス・
キリストによって神との間に平和を得ており……」(ロマ5:1)のように神さまとの関係の回
復を意味します。世界は、平和を待ち望んでいます。しかし、人間の手によっては生み出すこ
とはできません。キリストによるまことの平和を求めましょう。
- 12/18 ☒マリアのところにも天使が、またヨセフのところへも主の天使が夢に現れましたね。イエス
さまの御降誕には、天使も大切な働きをします。Dくんも、いざというときに天使が現れる
のを楽しみにしているのですね。天使は、多くは天において仕えています。しかし、神さま
の救いの歴史の重要な部分において(荒野の誘惑、ゲッセマネの祈り、復活の朝、使徒たち
の伝道 etc) 天から遣わされます。そのような、救いに関わる重要な時ということ覚えて
おいてね。
- 12/25 占星術の博士たちは、おそらく、ヘルシャ・バビロニア地方に住んでいた異教の地の民、異邦
人でした。
星占いをして、多神教の神の中で生活していたのかもしれませんが。しかし、神さまは、その
ような異教の地の民をも眼に留められていました。異邦人が神の救いの約束の受け取り手とさ
れる前ぶれでもありました。彼らは、「メシアの星」を見たとき、ためらうことなく何千kmも
の長旅にでました。広大な砂漠、厳しい自然環境、危険を承知で、「メシアの星」に従ったので
す。イエスさまに出会った彼らは、別の道を通って帰りました。かれらは、真の神さまを、礼
拝する民となったのです。大切なことは、信じ、従い、方向転換(生き方を変えること)をし
て、礼拝をささげることです。

第7課 大正のキリスト教会（その一）

1. 明治から大正へ

1912年に明治天皇が死去し、時代は明治から大正へとつります。日本の国家のすがたもここで大きく変化します。それは一言で言えば、国家の時代から個人の時代への変化です。

明治という時代はとにもかくにも第一の関心が国家に置かれた時代でした。識者のだれもが天下国家を論じるナショナリストでした。キリスト者たちもしかりです。

しかし大正の時代になると、明治国家がさまざまなほころびを呈しはじめるということもあって、人々はようやく個人としての自分に目覚め、個人の権利や幸福を求めはじめるようになります。大正デモクラシーと呼ばれる民主主義運動（この運動のリーダーともいうべき吉野作造は、海老名弾正門下のキリスト者でした）も起こり、民衆の政治参加への意欲もたかまりを見せはじめます。加えて哲学や思想、文学や芸術の領域でもさまざまな新しい試みが生まれます。

大正期のもうひとつの特徴は、国際化の自覚がうながされてくることです。日清、日露の両戦争に勝利した日本は朝鮮半島を植民地とし、資本主義国家としての体裁をととのえて、ともかくもアジアにあって西欧諸国と並ぶような強い国をつくるなどの目的をある程度までなしとげ、大正期には帝国主義への道をさらに先へと進むこととなります。そうした中で、おのずから世界における日本のありかたを見つめていかざるをえなくなってくるのです。

大正日本のこうした傾向はキリスト教会の動向にも多かれ少なかれ反映されていきます。たとえば日本基督教会を見ても、植村正久の場合は終生国家意識を強く持ち続けたのですが、その弟子の高倉徳太郎になると個人的な求道の動機がぐっと

たかまってきます。植村がキリスト教的道義にもとづく国家形成ということを考えてのに対して、高倉がキリスト教を信じるきっかけとなったのはエゴイズムの克服の問題であったのです。

さらに、大正期になると教派をこえた、国際的な宣教運動がたて続けに生まれてきます。教会の歩みもこの時期は比較的順調で、教勢も伸びました。政府もキリスト教のインターナショナルな性格に注目して、この時期になると教会との協調路線をとりはじめます。

2. 三教会同

大正期は大正デモクラシーのような運動が起こった一方で、近代天皇制の支配体制が安定したかたちで定着した時代でもあります。この頃には内村不敬事件のような、キリスト教と国家との鋭い対立をそのままあらわすような出来事は起こらず、反対に国家がキリスト教をたくみに利用しようとする傾向が強まってきます。

1912年2月、政府は神道（ただし神社神道は当時非宗教とされていきましたから、天理教、大本教といった教派神道です）、仏教、キリスト教の代表者たちを招待し、宗教によって国民道徳の振興をはかるよう求めました。三教会同と呼ばれる出来事です。このとき宗教者たちも政府の要望にこたえようと、あいはからって決議書を発表します。その中には「皇運を扶翼し国民道徳の振興をはかる」といった文言がみられます。

この出来事については多くの人々が、キリスト教もようやく神道や仏教と同列に扱われるようになった、日本国家において市民権を得たと歓迎したと伝えられています。一方で、内村や柏木はこれを政府による宗教利用のたくらみとして厳しく批判しました。植村も批判的であったようです。

（木下裕也）

第8課 大正のキリスト教会（その二）

3. 協力伝道

この時代は世界的にも宣教の機運の旺盛であった時代ですが、日本でもその影響を受けて教派の枠をこえた大規模な協力伝道が続けてこころみられます。

1914（大正3）年から三年間にわたって全国協同伝道と呼ばれる伝道運動が実施されます。全国を東西のふたつのブロックに分けて組織的な伝道を展開し、大都市はもちろん地方都市や町村までくまなく福音が宣べ伝えられました。連合祈禱会、講演会、伝道会のほか女学生大会、会社店員大会、天幕伝道、教育者大会、名士招待会、市街戦、自動車伝道などさまざまな趣向をこらした伝道がこころみられ、総集會数4788、會衆77万7千、求道者は2万7千人にのほりました。

この伝道運動はおのおのの教派、教会の伝道活動にもおおいに刺激を与え、日本のプロテスタント教会の教勢は以後10年間で教會数が三倍近く、信徒数も二倍以上に増加します。日本社会にキリスト教をアピールするという点でも多大な貢献をしたといえます。ただ、政財界の実力者を招いて協力を求めるなど、日本のキリスト教が徐々に支配者層への接近をはかりつつあったということもまたうかがえます。

4. 大正キリスト教の指導者たち

この時期にはいわゆる大衆伝道者たちの活躍にもめざましいものがありました。明治以来、日本のプロテスタントは都市のいわゆる知識階級への伝道という特色をもってきましたが、大正期においては福音を庶民層にまで届かせようと力を尽くす伝道者たちが注目されます。彼らはまた社会改良や労働運動にもきわだった取り組みをなしました。賀川豊彦と山室軍平をその代表としてあげることができます。

伝道者としての賀川の働きを代表するものとしては、1930（昭和5）年から5年間にわたってなされた神の国運動があります。これは教会、キリスト教諸団体、ミッションスクールなどプロテスタント諸教派団体の総力を結集して展開された、日本教会史上最大の組織的伝道運動です。この伝道運動がさきの全国協同運動とことなっていたのは、それまではかならずしも伝道の射程がのびていかなかった工場労働者、農民、漁師、炭鉱夫といった人々の救いをはっきりとうちだしたことです。さらに、ただ福音を伝えるのみならず、貧困や搾取などの具体的な問題の解決をも目的としたことです。神の国運動そのものはあくまでも教会を場とするものでしたが、賀川自身は労働組合運動、農民組合運動、消費組合運動などにも指導的な役割を果たしました。

山室軍平は日本救世軍最初の日本人士官となり、のちには司令官となりました。救世軍は英国に始まったメソジストの一派で、伝道の便宜のため軍隊組織をとり、社会事業をともなわない救霊はないとして、慈善や医療、廃娼運動、児童虐待防止運動をも精力的に行います。山室もまた社会改良や人権保護のあらゆる分野で献身的な働きをなしました。同時に民衆に平易な福音を説く必要を痛感して『平民の福音』を著しました。

一方、植村正久以来の日本基督教会の教会中心の路線と正統的福音信仰とを忠実にうけつぎ、さらに深めたのが高倉徳太郎です。彼ははやくからエゴイズムの問題に苦しみますが、その解決をイエス・キリストの福音に見出し、植村から洗礼を受け、植村の創設になる東京神学社に学んで伝道者となります。代表作とされる『福音的基督教』は宗教改革者以来の福音的信仰をふかくとらえ、キリスト教を言の宗教、贖罪宗教、恩寵宗教、良心宗教として論じた当時において画期的な著作です。

（木下裕也）

第9課 昭和のキリスト教会 (その一)

1. 日本基督教連盟による教会合同運動

1931 (昭和6) 年の満州事変にはじまり、1945 (昭和20) 年の敗戦にいたるいわゆる十五年戦争の時期は、日本の近代史における暗黒の時代であるとともに、日本の教会の歴史にとってもかつてない受難と試練のときでした。天皇制ファシズムの嵐のふきあれる中で、教会は真に主権者たるキリストを仰いでいるのかということ容赦のないしかたで試されました。まさに教会と国家との関係が最も鋭いかたちで問われた時代です。

この時期の日本プロテスタント教会の歴史は、ほぼ日本基督教団の成立と展開のプロセスを重ねてきます。日本基督教団は1941 (昭和16) 年に、当時の日本のほぼすべての教団教派がひとつになって成立しました。

このきわめて大がかりな教会合同の実現については、ふたつの要因があったとされています。ひとつは内的要因ともいうべきもので、かねてから日本基督教連盟という超教派の団体がすすめていた教会合同運動の実りであったとする見解です。もうひとつは外的要因ともいうべきもので、当時の国家的圧力によって地すべりのように教会合同に追い込まれていったとする見方です。

まず日本基督教連盟による合同運動を重く見る人々は、日本基督教団の成立を明治以来の日本の教会の宿願の実現であるとし、つまりすでに見たように、日本の教会はその草創期から無教派の路線、いわゆる公会主義を理想の夢としてきました。その夢が日本基督教団の誕生によってついにかなったとするのです。

ただ、そもそも日本基督教連盟はあくまでも各教派教団の連絡や交流のための団体であり、おのの信条や教会政治にはふみこまないことに

なっていました。そのような団体が教会合同の問題にまでかかわるのは明らかに勇み足でした。

さらに日本基督教会や日本福音ルーテル教会など、自派の信条や教会政治を重んじる教派には、教会合同は真理問題にかかわるものであるとして、安易なしかたでの合同を警戒する空気がありました。そういうこともあって、実はこの合同運動自身には困難がともない、一進一退ともいうべきものにとどまったというのがほんとうでした。

2. 宗教団体法の成立

そのように教会合同運動そのものは膠着状態にあったにもかかわらず、急転直下各教派を教会合同の方向へと転換させる情勢の変化がありました。それが宗教団体法の成立をはじめとする政府・軍部による圧迫です。

1939 (昭和14) 年4月に宗教団体法が公布され、翌年4月から施行されます。宗教団体を法人格として認め、財産の管理や租税上の特権を与える一方で、教団の設立にあたっては文部大臣の認可を必要とし、その活動が天皇制国家の安寧秩序をさまたげ、臣民たるの義務にそむくときには認可を取り消され、活動の制限や禁止、教師の職務停止、教団の解散が命じられるというものでした。この法律によれば政府は教団の教義や儀式、財政、組織などに自由に介入し干渉することができましたし、統理者という制度を義務づけることによって教団の実質的な監督権を国家がにぎるというしくみができあがっていました。要するにこの法律は、天皇制国家が宗教団体を自由に管理し統制するためにもうけられたものであったのです。教会がこれを受け入れるとは、まさにキリストの主権を国家に売り渡すことにほかならなかったのです。

(木下裕也)

第20号カリキュラム (2006年1～3月分)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年—

月日 教会暦・行事	主 題 単 元 の 目 標	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
1月1日 新年	一年の感謝と始まり 昨年の歩みを感謝し、主をほめたたえて新しい一年の歩みを始めよう	—	—
		詩編100	詩編100:2
8日	祈りとは何か (一) 祈りは御言葉に耳を傾けることから始まる。主の呼びかけに耳を傾けよう	問76	ハイデ116, 117、ウ小教理98
		サムエル上3:1-14	サムエル上3:10b
15日	祈りとは何か (二) 祈りは主なる神に信頼する信仰のあらわれである。どんなことでも素直に祈ろう	問76	ハイデ116, 117、ウ小教理98
		ヨハネ5:13-15	ヨハネ5:14
22日	祈りのお手本 主イエスの祈り「主の祈り」をお祈りして、お祈りを学び身に付けよう	問77	ハイデ118, 119、ウ告白14章
		ルカ11:1-4	テサロニケー5:17
29日	天の父よ 神の子とされた感謝と喜びをもって父の御名を呼ぼう	問78	ウ小教理100、ハイデ120-121
		ローマ8:14-16	ローマ8:14
2月5日 (信仰の自由)	御名を あがめさせたまえ 祈りとは、神を神としてあがめることである。御名をほめたたえて祈ろう	問79	ウ小教理101、ハイデ122
		ダニエル6章	ダニエル6:11c
12日	御国を来たらせたまえ 祈りとは、御国の完成を待ち望んで生きることである。再臨を待望して祈ろう	問80	ウ小教理102、ハイデ123
		フィリピ3:20	マルコ4:30-32
19日	御心の天になるごとく 主イエスの祈りに学び、神の御心を喜び受け入れることができるよう祈ろう	問81	ウ小教理103、ハイデ124
		マタイ26:36-46	ヨハネ3:16
26日	日用の糧を与えたまえ 主は私たちの必要をすべてご存じである。私たちの必要のすべてを求めて祈ろう	問82	ウ小教理104、ハイデ125
		マタイ6:25-46	マタイ6:33
3月5日 レント	我らの罪を赦したまえ 十字架の主イエスの祈り。十字架のキリストを仰いで、罪の赦しに生きよう	問83	ウ小教理105、ハイデ126
		ルカ23:32-38	ルカ23:34a
12日 レント	悪より救い出したまえ 勝利の主イエスが私たちのために祈られた。私たちも誘惑に負けまいよう祈ろう	問84	ウ小教理106、ハイデ127
		ヨハネ17:13-19	マタイ26:41
19日 レント	頌栄 祈りは神をほめたたえて閉じられる。神に栄光を帰して感謝と喜びをあらわそう	問85	ウ小教理107、ハイデ128
		ヨハネ黙示録5:11-14	ヨハネ黙示録5:13
26日 レント	アーメン 祈りはキリストの真実によって支えられている。心から「アーメン」と言おう	問85	ウ小教理107、ハイデ129
		ヨハネ黙示録3:14	コリント二1:20

『教会学校教案誌』発行のための 自由献金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会教育委員会は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに5年目を迎え、第19号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ40教会で採用されています。先の第59回定期大会の教育委員会報告にありますように、大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会教育委員会では、あわせて皆様からの自由献金によってご支援いただきたいと願っています(2005年4月中部中会第一回定期会にて自由献金願いを可決承認)。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと献金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由献金」と明記してください。

2006年度 年間カリキュラム

(2006年4月～2007年3月)

二年サイクルの聖書物語（救済史）と教会暦の併用カリキュラム

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所
2006年 21号	4月2日	進級式・レント	十字架のキリスト	マルコ15：21-32
	4月9日	受難週	葬られるキリスト	マルコ15：42-47
	4月16日	復活祭	キリストの復活	マルコ16：1-8
	4月23日		天地の創造	創世記1：1-31
	4月30日		人間の創造	創世記2：4-25
	5月7日		人間の墮落と救いの約束	創世記3：1-15
	5月14日	母の日	ノアの箱舟	創世記6：1-22
	5月21日		バベルの塔	創世記11：1-9
	5月28日		アブラハムの召命	創世記12：1-9
	6月4日	聖霊降臨祭	教会の誕生	使徒2：1-13
	6月11日	花の日	アブラハムへの約束	創世記15：1-21
	6月18日	父の日	イサクの誕生と奉獻	創世記21：1-8, 22：1-19
	6月25日		ヤコブとエサウ	創世記27：18-29
22号	7月2日		ヨセフの苦難	創世記39：1-23
	7月9日		ヨセフの勝利	創世記50：15-21
	7月16日		モーセの誕生	出エジプト1：22-2：10
	7月23日		モーセの召命	出エジプト3：1-14
	7月30日		過越	出エジプト12：1-32
	8月6日		紅海徒渉	出エジプト14：1-31
	8月13日	平和主日	平和を創り出す	エフェソ2：14-22
	8月20日		天からの食べ物	出エジプト16：1-36
	8月27日		十戒付与	出エジプト19：20-20：17
	9月3日		金の子牛	出エジプト32：1-14
	9月10日		幕屋つくりと礼拝	出エジプト40：17-38
	9月17日	(18敬老の日)	カナン偵察	民数記14：1-10
	9月24日		モーセの死	申命記34：1-12

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所
2006年 23号	10月1日		洗礼をお受けになる主イエス	マタイ3：13-17
	10月8日		荒れ野での誘惑	マタイ4：1-11
	10月15日		弟子の召命	マタイ4：18-22
	10月22日		幸いの説教	マタイ5：1-12
	10月29日	宗教改革記念日	思い煩いからの解放	マタイ6：25-34
	11月5日		人を裁くな	マタイ7：1-6
	11月12日		岩の上に家を建てる	マタイ7：24-29
	11月19日		一羽の雀でさえ	マタイ10：26-31
	11月26日	アドベント	重荷を負う者への招き	マタイ11：25-30
	12月3日	アドベント	平和の主の預言	ゼカリヤ9：9-10
	12月10日	アドベント	真の羊飼いの預言	エゼキエル34：1-16
	12月17日	アドベント	心が新しくされる預言	エゼキエル36：25-28
	12月24日	アドベント	御子の降誕	ルカ2：1-7
	12月31日	年末	少年イエス	ルカ2：41-52
2007年 24号	1月7日	新年	5000人の給食	マタイ14：13-21
	1月14日		嵐を鎮める主	マタイ8：19-22
	1月21日		ペトロの信仰告白	マタイ16：13-20
	1月28日		山上の変貌	マタイ17：1-8
	2月4日		善きサマリア人	ルカ10：25-37
	2月11日	(信仰の自由)	見失った羊のたとえ	マタイ18：12-14
	2月18日		放蕩息子	ルカ15：11-32
	2月25日	レント	マルタとマリア	ルカ10：38-42
	3月4日	レント	幼児の祝福	マタイ19：13-15
	3月11日	レント	金持ちの青年	マタイ19：16-30
	3月18日	レント	ザアカイの救い	ルカ9：1-10
	3月25日	レント	種まきのたとえ	マタイ13：1-9, 18-23

〈編集後記〉

●幼稚科としては少々難しいかもしれませんが。それぞれの年齢に合わせて工夫してみてください(漆崎春美)。●今回の原稿執筆中に子供が生まれました。恵みの契約の尊さを覚えています(石原知弘)。●上級の子たちがもれなく中学科に進級できるように、ひと工夫と愛情と祈りをこめて……(相馬直子)。●拙い奉仕が少しでも用いらればと願っています(吉岡契典)。●11月23日の教会学校教師研修会に、どうぞ多くの日曜学校教師の方々が集われますようお願い(木下裕也)。●先日、下の娘が幼児洗礼を受けました。神様の恵みに心から感謝し、同時に教理教育の大事さを思わされています(春名義行)。●今号も執筆のご協力をありがとうございました(望月信)。

〈あとがき〉

第19号をお届けいたします。秋を迎えて、伝道活動に励んでおられることと思います。クリスマスに向けて備える時期でもあります。諸教会の福音を宣べ伝える営みに主よりの祝福が豊かであるよう、お祈り申し上げます。巻末に、来年度の年間カリキュラムを掲載しました。聖書物語(救済史)に基づく二年間のカリキュラムを編んでいます。

〈購読の申し込み〉

『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。別冊『子どもカテキズム』(300円)、バックナンバーの在庫もあります。

津島教会気付 春名義行まで

〒496-0038 愛知県津島市橋町2-30

Tel/Fax. 0567-26-4221

☆執筆者一覧☆

まえがき

辻幸宏(大垣伝道所協力牧師)

巻頭説教

佐々木稔(南浦和教会牧師)

宝塚教会教会学校の紹介

富井篤(宝塚教会教会学校教師)

連載「日曜学校教師会のために」

相馬伸郎(名古屋岩の上传道所宣教教師)

聖書研究

辻幸宏(大垣伝道所協力牧師)

春名義行(津島教会牧師)

望月信(高蔵寺教会牧師)

三川栄二(稲毛海岸教会牧師)

木下裕也(名古屋教会牧師)

山下朋彦(平和の君伝道所宣教教師)

カテキズム研究

相馬伸郎(名古屋岩の上传道所宣教教師)

久保浩文(高知教会牧師)

宮崎彌男(筑波みことば伝道所宣教教師)

説教展開例

小野田雄二(上野緑ヶ丘教会牧師)

長田詠喜(高松東教会牧師)

小野静雄(多治見教会牧師)

岩崎謙(神港教会牧師)

相馬伸郎(名古屋岩の上传道所宣教教師)

小堀昇(CRC東洋宣教伝道所協力教師)

千ヶ崎基(草加松原教会牧師)

分級展開例

幼稚科 漆崎春美(金沢伝道所日曜学校教師)

小学科下級 石原知弘

(北神戸キリスト伝道所宣教教師)

小学科上級 相馬直子

(名古屋岩の上传道所日曜学校教師)

中学科 吉岡契典(仙台カナン教会牧師)

成人科 木下裕也(名古屋教会牧師)

表紙イラスト

坂野知子(松戸小金原教会日曜学校教師)

本文イラスト

平尾信子(高蔵寺教会教会学校教師)

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上传道所宜教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻幸宏	大垣伝道所協力牧師
春名義行	津島教会牧師
望月信	高歳寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』
2005年10・11・12月号 (季刊)
第19号
2005年8月21日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上传道所 宜教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ 〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F
頒価	900円 (本体価格)
